

鳥居龍蔵のアジア踏査行

— 中国西南・大興安嶺・黒龍江 (アムール川)・樺太 (サハリン) —

東 潮

I 鳥居龍蔵の西南中国調査—貴州・雲南・四川省—

II 鳥居の西南中国踏査と現在

III 黒龍江 (アムール)・大興安嶺

IV 黒龍江 (アムール) 流域から樺太 (サハリン)

V シベリヤから満蒙へ

VI 鳥居の大興安嶺・黒龍江・樺太調査と現在

鳥居龍蔵 (1870-1953) の東北アジアにおける考古学的・人類学的調査研究の足跡をたどり、検証する。鳥居龍蔵が調査、探検した東北アジア諸地域 (朝鮮半島、中国東北地方、内蒙古、モンゴル、東部シベリヤ、千島・樺太) を踏査し、明治・大正・昭和期と現在の諸環境と比較することにある。鳥居龍蔵のアジア行はつぎのように集約される。

①シベリヤ東部・樺太 (サハリン)・千島の北方諸民族の調査

大興安嶺・黒龍江流域の人類学的・考古学的調査と探検 (オロチョン族、ゴリド族、ギリヤーク族、ニヴフ族、アイヌ族)

②中国西南部・台湾・琉球の南方諸民族の調査

③朝鮮半島・中国大陸・モンゴル、東北アジア諸民族の調査

東北アジアの支石墓調査、漢魏の楽浪郡・帯方郡の調査、遼東半島の漢魏晋墓、高句麗の広開土王碑、集安の積石塚、遼の歴史と文化 (慶陵、遼上京・中京などの都城と寺院の調査)、渤海・金の都城、朝鮮半島の考古学・人類学的調査 (金海貝塚など)

④日本列島の考古学的調査 (北海道、琉球、日向、信濃、武蔵野、徳島)

鳥居龍蔵のフィールドにあつては、これらの諸地域はアジア的世界としてひとつである。

『ある老学徒の手記』では、自らのフィールドワークを年次的に回顧する。

遼東半島の調査 (明治28年) 台湾調査時代 (明治29年) 北千島調査 (明治32年)

西南支那の調査 (明治35年7月30日～36年3月13日) 私と沖縄諸島 (明治29年、36年)

満州の調査 (明治38年) 蒙古旅行 (明治39年～41年) 第3回満州行と漢代遺跡 (明

治42年) 第1回朝鮮の調査(明治43年~44年) 南樺太の調査(明治44年)
 第2~6回朝鮮の調査(明治45年~大正5年) 第1回東部シベリヤ調査旅行(大正8年)
 北樺太サハレン州の調査、第2回アムール河(黒龍江)とキジ湖調査(大正10年6月24日
 ~8月3日) 山東省調査(昭和元年) 金の上京と渤海故址(昭和2年) 第3回シベ
 リヤ・満州調査(昭和3年4月12日~7月13日) 第3回蒙古旅行・遼代陵墓の調査(昭和5
 年) 満鮮の調査(昭和7年) 壘巫山と画像石墓(昭和8年) 第四回蒙古調査・遼の
 三陵と中京城(昭和9年) 結語

このほか満州・華北調査(昭和10年)、ペルー・ボリビアの調査(昭和12~13年)、満州・山
 西省・山東省調査(昭和15年)の調査をおこなっている。

以上の調査のなかで、西南中国、満州、蒙古、東部シベリヤ、樺太の調査を中心に、鳥居の
 フィールドをたどる。日記、フィールドノートに鳥居龍蔵の問題意識がこめられている。報告
 書を要約するかたちですすめる。当時の調査・紀行の記録じたい、普遍的価値をもつ。筆者自
 身のフィールドの経験をもとに記述する。

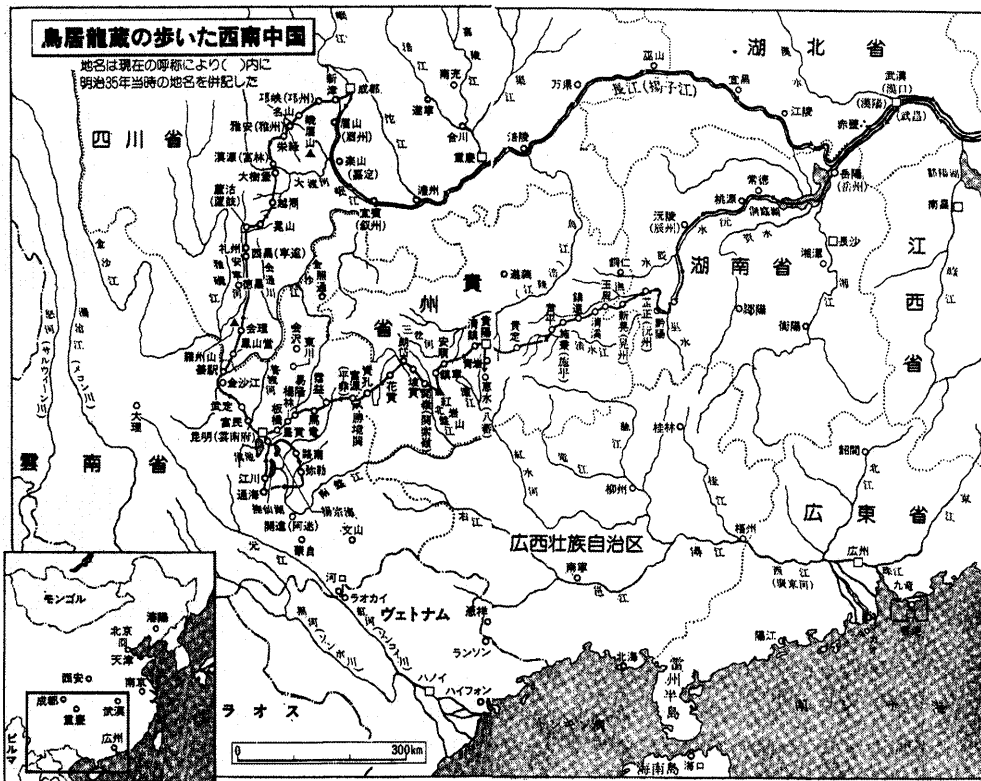


図1 西南中国諸民族の人類学的調査(『中国の少数民族地帯をゆく』一部修正)

I 鳥居龍蔵の西南中国調査—貴州・雲南・四川—

1902年7月30日～1903年3月13日

1902年（明治35）7月30日～1903年（明治36）3月13日調査（鳥居龍蔵1929『苗族調査報告』東京帝国大学理科大学人類学教室、明治40年7月、鳥居龍蔵1926『人類学上より見たる西南支那』富山房、大正15年8月）

『人類学上より見たる西南支那』は「明治三十五年七月から同三十六年三月の九ヶ月間わたって東京帝国大学からシナ人類学上苗族調査として出張を命ぜられた時の日記である」。その調査報告は明治四〇年（1907）に『苗族調査報告』として、東京帝国大学理科大学人類学教室から出版されている。踏査から二〇数年たった1926年8月、「人類学上より見たる西南支那」として改題、あらたに構想されまとめられた。「この日記は余の大学時代に記したもので、今から見ると、その着眼その他にあまりに幼稚な所がある。けれどもその幼稚な所は当時余の青年時代の若々しさであった、その懐かしい記念として日記の文章に一つも加筆や削減等を施さず、そのままにして置いた」という。

『人類学上より見たる西南支那』の終章にあたる、「余は西南シナ旅行で人類学上何を調査研究したか」で本書の出版の意義についてのべる。

余が本書の記述はすなわち「旅行日記」に属するのであった、余の後に発表せんとする論文・報告とは別なものである。すなわちこれは研究調査当時に於ける毎日記述した飾らざる偽らざる、素直な日記文である。そしまず余はその土地をいかに旅行したか、その土地の山・川。人情。風俗と我らとの交渉は如何というものを主にして、これを書いたものである。余はがために日々の学術研究をすると共に、日記の記述を怠らなかつた〔鳥居1926：518〕。

余のこれらの地方を調査した目的は、全く人類学上の研究調査である。そしてこれら地方を調査した動機は…台湾の生蕃のあるものと南シナの蛮族との間に何らかの交渉が無かるうかということが一つ。なお由来この地方は昔から三苗の国、有苗の国と称せられて居った処で、シナの歴史上、極東の人類学上、最も著しい地方であるにも拘らず、これまで日本の学者は何人も此処に手を下したものが無い。その意味に於いても、余はこの地方に於いて非常に興味を感じ、ここに調査旅行をしたわけである〔鳥居1926：518〕。

鳥居のおかれた環境はかわった。「撮影写真は本書中にかなり多く挿入する考えであったが、これらのすべて現近は人類学教室の所蔵となって居ってちょっと出すに困難であるから、まず手許にあるもののみ少しばかりを用いることとした」のであった〔鳥居龍蔵1926：221〕。1924（大正13）年に東京帝国大学を退職し、鳥居人類学研究所を設立している。

同年の大正15（1926）年の1月には『極東民族』第1巻（『東洋人類学叢書』第1編、文

化生活研究会)が刊行されている。極東民族編につづく、いわば西南中国民族編というべき書となっている。両書〔鳥居1926・1929〕によって、踏査の行程をみよう。

1902 (明治35) / 07 / 30 東京を出発。

07 / 30 横浜出帆。博愛丸。神戸、門司、長崎港を經由。

08 / 06 上海に到着。10日まで滞在。日本総領事館小田切・井原氏、樂善堂の小林氏、日清汽船会社の白岩氏、商船会社、郵船会社、大東汽船会社と往来。シカベエ仏国天文台、シナ書店、英人ケレー書店、シナ劇場に通う。

08 / 08 午後3時、蘇州に行くため、人力車で波止場まで行く。ジャンク船が充満。夕方出港。数艘の客船を汽船が引く。日本人は1人のみ。

08 / 09 午前5時、蘇州城の傍に着く。備っていたシナ人通詞をともなって来なかったため、客引きの厄にあう。「当時余は一言もシナ語に通じなかったから、彼らの言葉が何をいつて居るのか、少しも解することが出来ない」という。大東汽船会社で熊本県人の高橋氏を通訳としてつけてもらう。小船に乗る。旧7月の七夕の日のため、蘇州城外の河は遊覧船でこむ。2匹の驢馬が用意されていた。「馬術を知らない余をして、鞍上不自由を感じさせなかった」。午前11時ごろ寒山寺に着く。写真撮影。蘇州城にもどり、城門から城内の高塔を撮影。午後5時の船に乗る。

08 / 10 翌朝上海にもどる。

08 / 11 樂善堂より、修繕依頼していた写真機を受け取るなどして、午後8時通事(王氏)とともに旅館をでて、波止場にむかう。漢口行きの汽船(大阪商船太貞丸)で上海を出発。

08 / 12 午前4時、上海を出帆。通州をへて、張黄湾、江陰に至る。岸上に砲台、軍艦3艘が停泊。古塔が立つ。泰興で停船。午後11時ごろ鎮江府につく。上陸して、菓子を買って求めて船にもどる。出帆。

08 / 13 南京に到着。下関という波止場に停泊。甲板から城郭、塔、鍾山をながめる。午前11時ごろ太平府を望む。古塔2基が立つ。午前12時半蕪湖に着く。日清戦争後始めて開市された港。山水画的景色をみて、「我が故郷の家(阿波徳島市舟場町)の二階に入れてあった襖のシナ山水画は、まさしく此処の景色に髣髴たるもの」〔鳥居1926:496〕であった。午後5時ごろ万県を左岸に見る。7時15分ごろ荻花港が左方にみえる。

08 / 14 午前5時半、安慶(安徽省首府)に到着。九江(江西省)につく。午後5時、九江をでる。夜に武穴鎮。灯籠流しをみる。

08 / 15 午前10時、漢口に到着。馬王廟街の高陞号に宿泊。通事とともに写真屋に行き、ともに撮影。領事館に山崎領事をたずねる。シナ風呂にはいる。

08 / 16 漢口滞在。山崎領事を訪問、夜劇場に行く。

08 / 17 領事館。商船会社支店で角田氏に会う。宿の主人の案内で劇場に行く。

08 / 18 午後日本郵便電信局に福井兌氏を訪問。徳島県人で、同氏の案内で日本居留地附近を散歩。旧暦盆の15日にあたる。

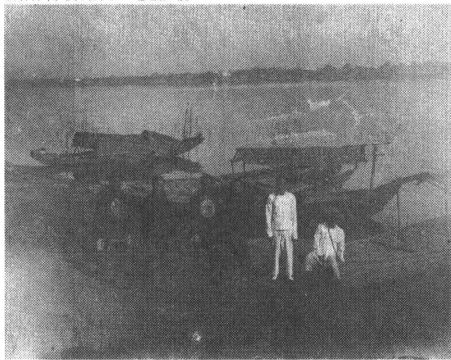
08 / 19 貴州鎮遠まで帰るといふ船を見に行く。麻陽県の船で、船頭と船賃の協定。鎮遠まで食費抜きで62円、52円を先渡しすることにする。劇場に行く。



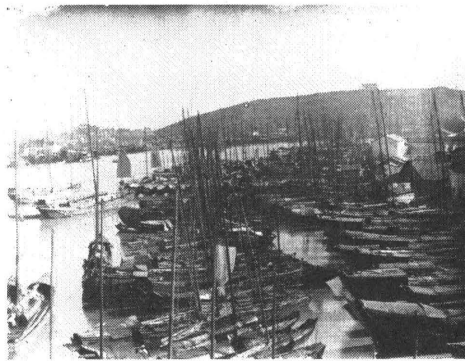
湖南省新路河の渡船場



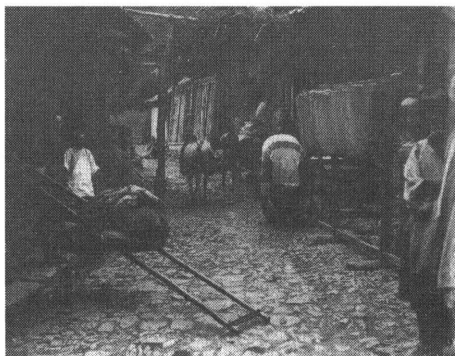
船着き場



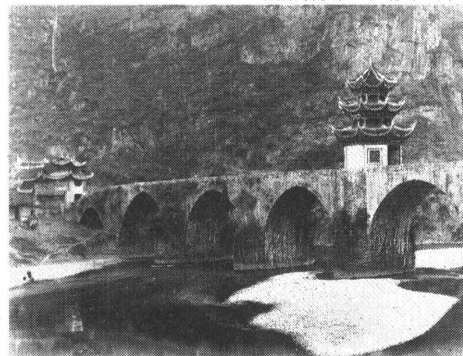
沅江



湖南省洪江司(洪江市)



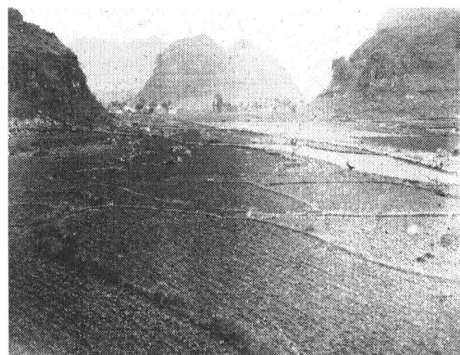
湖南省黔城(黔陽) 陸行開始



貴州省鎮遠府 樓閣橋



湖南・貴州省



貴州省

図2 西南中国諸民族の人類学的調査〔東大総合研究資料館 1990〕

08/20 調べものや各地に送信。夜は看劇。領事館から書簡があり、「湖南行きの危険を説いて行程変更の注意をせられた」〔鳥居1926：500〕。

08/21 午前10時ごろ、通事をともない漢陽を視察。

08/22 終日書簡をだしたり、読書。夜は劇場に行く。「余は漢口滞在中は種々の調査と共に、シナ劇の見物にほとんど毎夜費やした。これは余のシナ劇場及び俳優の研究に対し頗る興味を感じずからで、これは上海滞在中に於いてもこれを試みた」〔鳥居1926：501〕。

08/23 貴州行の予定が変更。僧侶の姿で旅をするため、注文していた僧服もできあがってくる。乗客は官吏として雲南省にいく2人で、江蘇省生まれの主人と僕。他の2人（夫婦）は貴陽まで帰るもの。あわせて6人。茶園に行き、午後5時ごろ船に帰り、宿泊。

08/24 午前8時、漢口を出発。漢口の波止場には船舶が夥しく停泊。漢水と揚子江の合流点の渦をさけて通りぬける。櫓と帆を併用して進む。午後5時半ごろ沌口司に到着。泊。航程30シナ里（日本里約5里）

08/25 午前11時ごろ金口司につく。沌口司から30シナ里。午後2時龍糖口。15シナ里。

08/26 午前5時ごろ出帆。4時半に牛骨脊に到着。

08/27 午前6時ごろ出帆。江岸にそって進航。午後7時半、嘉魚足につく。航程50シナ里。

08/28 午前5時出帆。午後7時ごろ嘉魚頭に到着。

08/29 午前9時前、宝塔州につく。海関があり、荷物検査。2枚撮影。シナの税関吏が出張して税をとる。岸上に石塔。陸溪口につく。シナ里20里。

08/30 草帽江に至る。午後6時、新隄鎮にくる。航程50シナ里。

08/31 朝5時出発。午前8時羅山にいたる。午前12時、華橋港に到着し、上陸。大阪商船会社の支店がある。泊。

09/01 午前4時半、華橋港を出帆。湖畔の丘陵上に岳州城がある。君山がみえる。洞庭湖に入る。このあたりは三苗の地。岳州と君山との間、洞庭湖の東岸を渡り、南方に流れる蘆陵潭に至る。午後2時半に到着し、停泊する。

09/02 蘆陵潭出発。順風で帆走。午前8時、林子口。水上住居を1枚撮影。附近の光景を2枚。午後3時に白馬四。巢常湖に出る。午後6時、来林州にたつし、停泊。航程90シナ里。

09/03 午前4時半ごろ出発。午前7時半瓦焦溪にいたる。9時50分西福につく。水上住居式の家屋もならぶ。北西の間を引き船で進み、午後6時ごろ沅江につく。航程80シナ里。

09/04 再び洞庭湖に入る。午前9時ごろ南岸嘴を通過。午後3時楊閣老につく。景色を2枚撮影。鵜飼い。航程80シナ里。

09/05 逆風のため、櫓こぎで出発。天青湖にいたる。午前12時、流星蕩につく。両岸は沖積層で、船員は上陸して挽き船。

09/06 船員4人に挽き船ででる。やがて帆走。午後7時半牛皮灘に到着し停泊。70シナ里。

09/07 挽き船で出発。午前10時徳山にくる。両岸に五重塔と七重塔が立つ。午後3時常德府につく。

09/08 承德城、禹廟、関帝廟をみる。写真屋で風俗写真3枚、景色写真2枚を求める。

09/09 渡船を撮影。写真屋で現像する。

09/10 知府などを撮影。『湖南全図』が贈られる。「明日はいよいよ沅江を遡って貴州省に向かうのである」〔鳥居1926：517〕。

09/13 常德を出発。常德府知府は保護のため、1艘の支那軍艦を従わせる。乗組員は艦長以下12～13名。船首に「東京帝國大學堂教習」という白旗がかかげられた。

09/14 沅江をさかのぼり、桃源洞につく。道士廟を見学。白石の渡しで宿泊。

09/16 白石を出発して、沅水をさかのぼる。途中、貴州方面からの官船と行き合う。玉玉谿で宿泊。白石から35清里（6町1里）。

09/17 未明進行。正午、青浪灘にたつする。青浪灘は後漢代、武陵蛮（五谿蛮）の住んだ所という。ペンツンチで宿泊。

09/19 午前5時出発。午後1時3分九谿にいたる。戸数三百以上。川幅は広いところは10町で、岩石露出。23人の人夫を雇って曳き船とする。5時間を費やし、九谿をでて1里余で宿泊した。

09/19 百葉灘にいたる。難破船多い。和尚州をへて辰州につく。「辰州はさきに英国宣教師の殺された土地」である。知府衛門は官吏を派遣、来意が問われたが、その顔に驚きの色があつたという。それは「余は漢口出発の際、万一の用意にシナ服及び辮髪（お髷）の付け髻をも携帯して来て、この一番危険な辰州につくと、手早く洋服を脱ぎ棄ててシナ服に換え、シナ帽子を冠って中から辮髪が垂れるように変装して居たからである」。

09/20 辰州を出発。知府は3人の護勇をつける。リチクという村落附近、山の半腹に木造の三層楼をみる。在地民族のもの。火它湾に投錨。

09/21 午前5時火它湾をでる。9時50分蘆谿の入り口に停船、附近の地形を撮影した。夕刻茅家店に着いて宿泊。

09/22 午前4時50分茅家店を出発、7時30分に浦市にたつする。「浦市は戸数約千戸ばかり、沅水水路の要地」である。シナ装で市中を見学。9時20分浦市を出発、十町余で洞泉灘にいたつた。辰谿県に到着、市中見学。石灰岩地帯。宿泊。

09/23 午前5時出発。

09/24 砲艦と軍船に前後を護衛されて出発。9時江口汎に到着、上陸して市中を見学。戸数六、七百。婦人の古風な頭髪に注目する。鵜飼いの漁法もみる。午後1時辰州灘にいたる。浅瀬のため、乗船者が下りて、荷物のみ船にのこして遡上。午後3時小鷓鷯着。宿泊。

09/25 難所を過ぎる。鵜飼い。「水中に網を張って魚の逃げ去ることを防いで、然る後に鵜を放つて魚を漁らせ、程好い折りを計って鵜と網と一緒に船の中に引き上げる」。洞湾汎にいたる。新路河につくと、渡船場がある。下船。関帝廟の祭日、芝居（狂言）の演し物は「三國志」。

09/26 「舟行いよいよ困難」という見出し。櫂は使用不能で、人夫30人を雇って曳き船。数丁で、土鷓灘にいたる。さらに黄獅滾洞にいたる。第3紀の地層を見る。午後6時20分、王家河から24,5丁のある村落で、投錨。

09/27 王家河附近を出発して、安江司にいたる。途中七重塔が川を隔てて相對して、各々砂岩の小山の上に建てられている。

09/28 未明に出発。牛庇股岩、玉河、三妓をへて灘頭につき、宿泊。税関がある。「大日本帝國大學堂教習」の旗が「疫病神除けの大妙薬」となる。上陸して、徒歩で行く。「余は例によってシナ服を着し、仮装辮髪をゆらゆらと揺るがしつ、山を越え谷を渡り、又は乾燥した水田の稲の切り株が行儀好く並ぶ処などを通過して進んだ」〔鳥居1926：246〕。渡船場につく。洪江司の対岸。乗船。砲艦艦長及び護勇に護衛されて洪江司の役所を訪問。日本人としてはじめてという。船は人山となる。陸行は危険なため、黔州まで船で行くことにする。

09/29 午前8時、本司黄献珍氏と市中見学。午後3時から役所の食堂で宴。「余は満腹に堪えず、殊に性来嗜まない酒を、この一種儀式的の棒杯ごとに飲まなかったのには、ホトホト閉口したが、万事に気の利いた通事は余の傍らにあって杯を助けてくれた」〔鳥居1926：249〕。飲めば飲めるらしい。辮髪の帽子をとる。船にもどる途中、「東洋鬼来れり、殺せ、殴れ」と呼ばわりつつ暴民があらわれたが、逮捕されたという。

09/30 黔州まで船で行く。出発間際に、船人の3,4日の休息という風習のため、出発できないということであったが、賃錢1人前40錢と船子に酒手としての相当の手当をだすことで納得させた。

出発に臨み、砲艦は例の如く三発の号砲を放ち、軍船と共に前後余の本船を擁して進んだ。陸上には本司より特に派遣した四名の兵卒が、川に沿うて附近を物色しつつ、船の進行と釣り合いを取って進む。その兵卒は手に手に青龍刀又はシナ流の槍や刀を肩に担ぎ、その軍服の背には字劃太く「弓兵」と記して居る。そもそも弓兵は昔は戦時に弓を司った兵の名称であって、今の砲兵・歩兵等の称号と同意味であろう。けれどもこの弓矢なるものは、余の今日まで通過した各地方では、未だかつて目にふれなかったものである。それが洪江司に来て初めて見たのは意外だった。これによって見るも、この地方がいかに文明に遠ざかり、今日まだ昔日の遺風を墨守してい居るか窺い知ることが出来る〔鳥居1926：250〕。

岸辺の丘陵に、各省の公館が建てられている。陸上警護の兵卒は、引き返した。この兵卒は警備というより、方相氏、辟邪のようなもので、遠来の客を送りかえすという風習であろうか。

この地域の兩岸の奇岩と怪石屹立の独特な地形や人家の風景は、「余が昨年旅行した所の四国の山中、阿波的那賀川上流の景色がよくこの附近の景色と似て居るので、そぞろに当時の記憶を喚起した」〔鳥居1926：250〕。10名内外の人夫で曳き船をして、午後2時に連州につく。岸上に楊公廟、観音廟、関帝廟がある。さらに狗腦岩に着き、船を岸辺に繋ぎ泊まる。この日の航程は5里（日本里）で、舟行は困難。

10/01 星を戴いて出発。舟行はますます困難になる。曳き漕ぐ。船頭は例によって紙を焼き銅鑼を鳴らして神護を祈る。チギを構えた屋根を見る。噴水灘に入る。上流から十数の筏が奔下、危機一髪で難をさける。筏が通過するあいだ「土人の風俗・習慣等を視察」、風景の撮影。筏は早くの過ぎ去ったという。遙か上流に七重塔がみえ、やがて黔陽に到着する。十数日にわたる沅水の遡上航程も終わりを告げる。砲艦は3発の礼砲で、来着を官衙に告げた。官吏が来訪する。

黔陽から翌日の宿泊予定地まで約15里（日本里）。「山路十五里は一日の行程としては少し困難であるけれども、余はある事情のため是非とも踏破しようと決心」したが、通事が躊躇。通

事のため、一挺の山駕籠を作り、3人の人夫をつけることにした。砲艦の艦長と水夫、軍船の兵卒に労を謝し、礼をのべ、若干の酒肴料を贈った。途中、本船に便乗した楊氏（雲南知県の候補でその就任の途にある）とその従者は同行することになる。

10/02 早朝、黔陽を出発する。黔陽の官衙から護衛として派遣された兵数名が遅れて来る。途中山頂に大門があり、「滇黔孔道」と書かれた扁額がかかっていた。雲南・貴州に通じる街道に入る。7時30分ごろ甘溪坪につく。廟砂坪から旬登坡をへて、12時に羅薄甸に到着。3里で関公界。桃樹浦。青龍刀を負った兵卒十数名が沅水知府の命によって出迎え。沅水城につく。行程90清里。

城の前を流れる沅水には石造の眼鏡橋が架けられ、その前後に商家が櫓を連ねて一小路をなして居る。余らが其処を通過するや、市民は日本人、日本人と呼ばわって群集し、あるいは楊氏を取り巻き、あるいは余を指して何事かを話し合っている〔鳥居1926：254〕。

10/03 湯知府に送られ、衛門をでる。5里で五里碑にいたる。戸数二百戸ばかり。午前11時ごろ消路口につく。

この附近は山の傾斜やや急であって、その裾に水田を設けて居るが、この状態はもとより、その他四周の地勢・風景等、総て余が郷里徳島の八万によく似て居る〔鳥居1926：255〕。

7月30日に東京を離れて、2ヶ月郷愁の念がでているようだ。32歳の鳥居は旅路をいそぐ。冷水舗で饅頭を食し、向日葵（植物の実）を試みつつ、茶を喫して小憩した後、関口界をへて、大関にたつ。川の沿って20町に七重塔がある。回龍閣という。便水駅につく。途中に関帝廟。ここには官衙がないので、行台（官立旅館にあたる）に泊った。

10/04 便水駅を出発。船で川を渡る。本便水駅。戸数約四百。07時10分新店舗に。対河舗に着いて「朝飯」をすます。蜈蚣関に到着。七盤嶺の関門で、貴州に対する要害の地という。波州をへて、晃州に到着。砂岩が築いた長さ一町の大橋がある。橋上に三層楼を設けた楼閣橋である。

10/05 早朝晃州を出発。省境を越え貴州省に入る。午前8時ごろ酒家糖を通過。晃州から20清里。婦人の髪が変化することに気づく。5里で黄頭店。戸数30戸ばかり。苗族の婦人に初めて出会う。

年のころは三十歳前後で、身長は低い方であるけれども、凸額で眉尻太く、目尻下がって鼻は隆くない。而して鼻柱が窪んで居るように見えた。顔面はやや扁平であって、頬骨高く、口大きく、頭髪は黒くして、皮膚は黄色である〔鳥居1926：257〕。

鯨魚舗で「孝貞表」を見て、写真をとる。この附近の女子は白布で頭部を巻いている。八保亭でもおなじ婦人を見る。纏足をするのはシナ風であるが、顔丸く扁平な容貌は苗族と大差ない。シナ人と接触し、シナ化した。苗族とシナ人が雑居しているとみる。5里で沙漠甸にたつ。白布を巻く男子がいる。苗族男子のシナ化したものととらえる。龍の舞をみる。午後4時玉屏城にいたる。宿屋もなく、楊花店にいたった。

10/06 楊花店を出発。第3紀の地層、谷川の丘陵をつたって進む。10里で三家糖につく。頭に黒布や白布を巻いた女子を見る。秋溪糖は戸数4、5軒。苗族が雑居。上下黒色の衣服で、胸当てをつける。水田の水車を観察しながら、10里で楊坪。戸数二、三百。「市中いたる処乞



貴定花苗



青岩花苗



青岩花苗



惠水打鉄苗



安順青苗



安順花苗



安順花苗



安順青苗

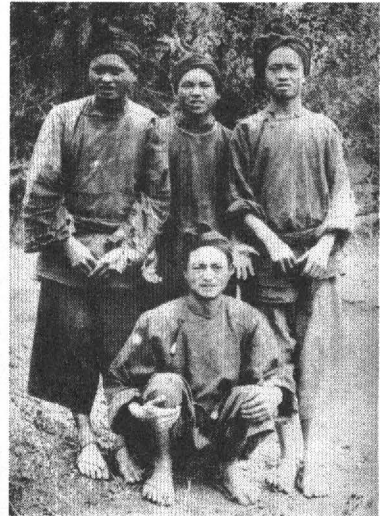


朗岱附近の黎民子（里民子）

図3 西南中国諸民族の人類学的調査〔東大総合研究資料館1990〕



重安附近山上の黒苗の婦女 (著者撮影)



重安附近山上の黒苗の男子 (著者撮影)



青岩地方白苗の男子 (著者撮影)



青岩地方白苗の婦女 (著者撮影)



青岩地方花苗の村落 (著者撮影)



青岩八番の打鉄苗の婦女 (著者撮影)

図4 西南中国の人類学的調査〔鳥居龍蔵 1926〕

食の多いには一驚を喫した」〔鳥居1926：259〕。男女の苗族、シナ人も「苗族との雑種であることを発見」する。「余がどうかして撮影ようと思って、彼の肖像を正面からと側面からとを写した」。人物像撮影のアングルが定まっていく。**東瓜棚**をへて**青溪県**にいたる。「左右に山を控え、その山を利用して城壁を築き、更に要所要所に高壘を設けて、苗族その他の来襲に備えて居る」〔鳥居1926：260〕。**鷄鳴関**にいたる。**青溪県**の関所。**長旗**をへて**蒲店**に着き、「一品客棧と称する旅舎」にはいる。

10/07 早朝出発。鎮遠府まで行く予定で出発。**栗拗子**につく。4軒の茶店があり、日本の柏餅のようなもの、米を搗いて餅となし、中に砂糖を包み、その上を桑の葉で巻いたもの。10里で**草鞋拗**につく。人家10戸ばかり、白布で頭部を包んだ婦人を見かける。**平蛮道**にたつする。「昔シナ人が蛮族を討ち平らげた所」。5里ほどで**焦溪**につく。鎮遠から派遣された8名の兵士が来ていた。銃を肩にしていた。銃を携えたシナ兵を見たのは初めてという。赤色の服の背に「鎮遠練軍」の文字を縫いつける。20丁で**五店舖**にいたる。ここでも乗馬の士官1名が兵士数名引率して迎えた。**二路口**につく。風光が画のようで写真と撮った。苗族とシナ人の雑種、服装、言語・風俗などみなシナ化しているが、容貌・骨格は純シナ人である。沅水の支流の溪畔に出る。午後2時ごろ雨が降り出す。沅水上流の**鎮遠府**につく。地方庁の所在地で、貴州・雲南の地方より湖南・湖北の方面にたいする交通運輸の要衝地。入り口に石橋を架し、中央に三層楼門を設ける。門上の額面に「阿山石柱」と大書する。知府衙門から兵士が遣わされた

10/08 **鎮遠府**に滞在。住人はことごとくシナ人であるが、広西・湖南省が主として、雲南省から来た移住民で、一種の「集散的移住民」とみる。数名の写真撮影。

10/09 重陽の節句。祭日のため、人夫の手配ができず、出発をとりやめる。ここで景色や風俗などを撮影する。

10/10 鎮遠府から旅行用として馬1頭を贈ってきた。6時半に乗馬で出発した。途中落馬する。「あわや谿関へ転げ落ちる所であったが、幸いにもすぐ後ろに跟いて居った兵卒に抱き留められ、危うくも一命を助かった」〔鳥居1926：264〕という。この旅で最大の危機であった。徒歩にかえる。10里で文徳関にたつした。「物見台」のようなものを見る。「昔苗族の盛んな頃、これを防ぐためにシナ人が見張りをなした趾である。四辺の山河を望み、当時シナ人がいかに苗族征服に苦心したか、又苗族がいかに勇敢にこれに反抗したかというようなことを追想」〔鳥居1926：264〕している。**白羊塘**にいたる。5里で**相見塘**につく。2丁で**雄鎮関**、3里で**小東関**、5里で**饅子塘**にいたる。シナ人の苗族にたいする征服について、「シナ人の侵入力の強盛」によるとみる。2里で**劉花塘**につく。人家は約20戸。朝餉をとる。通事が命じて茶で玉子を煮たものを携帯してきていた。施平県の兵卒が出迎えに来る。5里で**華巖塘**につく。戸数十四、五で、すべて飲食店。12時。洞窟内の廟を見る。10里で**七里冲**につく。8里で**望城塘**にいたる。途中、苗族の老女に出会う。

頭部は黒い布を巻き、耳には大きな銀環を嵌め、頸には同じ銀環を掛けて胸に垂れて居る。

上着は筒袖で、黒木綿で製し、長さは臍の辺りまでたつするくらいで、前を合わせ、裳は朝鮮婦人の如裳を取った腰巻きで、それを短く着け、足は跣足であった〔鳥居1926：266〕。

8里で**沙坪塘**に入る。10丁ばかり行くと、14人の男女が耕作し、女子はみな頭に黒布を巻き

付けて、台湾の熟蕃の婦女のようであったという。はじめて夕立にあう。施平城から知事から遣わされた1人の兵卒が出迎え。5時ごろ溪畔にたつし、橋台がのこる。舟で渡る。施平城に到着する。

10/11 夜来の暴雨。小降りのなか、6時に出発。施平県城から乗馬の仕官1名と兵卒12名の護衛。城を出ると沅水畔。五里墩にたつする。石垣で築いた墩台のがのこる。「苗族征伐」の時に建設したもの。7里で草塘関につく。戸数4~5軒。女子はみな白布で頭を包む。男子は白布で鉢巻きのように巻きつけ、衣服は袖が長い。「シナ服中の最も古い型」で、「シナ文化の中心を遠く離れた僻陬の土地で、中央の変化が容易に影響しないために、昔の風俗が割合によく保存されている」〔鳥居1926:268〕。「この道は雲南と貴州との連絡する重要な街道で、駅馬の鈴が喧しいほど頻繁で、馬子の謡う俚歌の声」がする。午前8時出発。途中で苗族の女子。

その風俗は、頭上に黒布を置き、耳には耳環を嵌め、頸には銀環を掛け、衣服は黒布で製し、腰まで垂れて居る。腰より以下は、台湾のツァリセン蕃の男子がやって居るような、膝の辺まで垂れる黒布の腰巻きを着けて居った〔鳥居1926:268〕。

沿沙塘をへて、称勾坡につく。施平城から三十シナ里。山上各地に墩台が散在。籃橋塘につく。「村落の市街」で行台(旅舎)が設けてある。三重屋根の廟や高床倉庫がある。楊柳塘をへて、東坡塘にいたる。52~53軒。村の周囲は城郭のように石垣をめぐらし、出入り口に楼門を設ける。「シナ人の廟族襲来に備える用心から出たものであって、いかに以前シナ人と苗族との衝突が激しかったが窺われる」。10里で冷水井、さらに進んで十里舖にいたる。苗族の群派として白苗、青苗、黒苗、華苗、打鉄苗などがある。鎮遠以来の苗は黒苗の一派。衣服の色などで類別される。十里舖の先で黄平県から兵卒2人が出迎え。苗族のイクトン村に入る。戸数十戸ばかり。屋根は草葺き。牛・豚を飼育。男子は辮髪を結び、腰巻きのようなものを着ける。頭に黒い布を巻く。嘉慶十二年に建てた孝貞標の石門、乾隆五十二年築造の丁未橋を過ぎる。五重塔がみえる。午後4時新黄平城に到着。城郭が築かれ、城外に苗族が居住する。この日の行程六五シナ里。

10/12 午前7時半、新黄平城を出発。途中、商人の旅行団にあう。百匹以上の列をなし、銃や刀剣類の利器を携える。13,4人の馬子と商人。五里墩にいたる。重要、楊老(620m)、平越の各地を数日で通過し、黄絲に到着する。

余は最初日本を出発する際、苗の土地は我が日本帝国の台湾の生蕃に於けるが如く、全くシナ人との交通隔離し、絶えてその間に往来無きものと考えて居ったが、今実際に就いて黒苗の状態を見ると、初めの考えとは大いに異なって、その風俗の如きは固有の状態を存じて居るとはいえ、一面にはシナ人の感化を受けて居ることも亦甚だ多い。殊に苗族の男子の如きは、その風全くシナ化して、少しもシナ人の男子と違わないものがある〔鳥居1926:273〕。

重安の黒苗 重安(480m)はシナ人が苗族の根拠地へ侵入した地である。黒色の衣服を着用。男女の身長は日本人のうちでもっとも小さなものと等しい。皮膚の色は黄色。面貌は丸顔、鬚髯は少ない。黒髪は黒色で直毛。男子の頭髪は前頭部の額の上で丸めて、形を仁王の頭髪のように結び、その上より黒木綿を使用。上着は筒袖で太い。襟は中央部にて釦で締める。下着

は膝より少し下くらい。腰から下には太く袴のようなものを着る。足に脚絆を巻き、跣足か草履を穿いているものがある。家屋は狭小で、柱は掘っ立てで、屋根は草葺きでその上に瓢箪あるいは南瓜類の蔓をはわす。寝所・囲炉裏・台所がある。家は孤立して建てられ、5～6戸からなる。食料は穀物や野菜、まれに羊・豚の肉類を副食物。衣服は昔は麻、今ではシナ人の手を経て輸入される木綿類を用いる。黒苗の分布する沅水上流の沿岸地は「むかし漢当時の牀柯且蘭の地で、今の苗族こそ正しく後漢時代の五溪蛮と称せられたものの一つ」〔鳥居1926：275〕とみる。かつては沅水流域から洞庭湖、湖南省に分布していた。

10/15 沅水上流の分水嶺の**谷濠関** (1500m) にたつする。沅水上流の分水嶺は「苗族の分布区域の分かれる境界線であって、その地理上の分界と共に自然に同一変化を呈して居る」〔鳥居1926：276〕。貴定県から出迎えの兵卒2名にあう。苗人の老夫婦の衣服に水色を用いる。花苗の群派で、風俗や体質などを調査し、撮影した。貴定県の知県はこの地を通過することを「危ぶんだものと見え」、知県は満州人で、「余らを迎えるに威儀堂々、儼めしい官服を着け、多数の兵卒四面を警護し、各々青龍刀を翳し大旗を押し立て、威風四辺を払うの概があった」〔鳥居1926：276〕。知県の懇請もあって一泊する。

10/17 貴陽府に到着する。

この日貴陽府にたつせんとする五、六里手前の処で、洋服を着た三、四名連れの人に出会った。この人らは余を見て、君は鳥居ではないかと問うた。すなわち異域には珍しい我が同胞であって、当時貴州省の武備学堂の教授として聘せられて居る高山少佐・間宮氏らの人々であった。昨日貴州省巡撫衙門に於いて、余ら一行の本日貴陽府に着するというのを聞知し、わざわざ余を迎えにきてくれたのである。ここに於いて余の喜びは譬うるに物無く、かの人たつとも故国の人に出会って、いわゆる天涯万里、骨肉に逢ったような感をして非常に喜ばれ、余に向かって万歳を三唱せられた…想い起こせば漢口出発以来、長い旅路を孤影飄然として、異邦人の間にのみ起臥して来た余、此処で同胞に会おうとは、実に思い掛けない想いかけないことであった。…諸氏の貴陽府に来られたのは四川省の重慶附近から往来せられたのであった〔鳥居1926：277〕。

貴陽府は明朝による「苗族討伐」後に中心となった。狛家苗が居住する。狛家苗の本拠地は広西省で、「いつの時代にか貴州省の方へ移って来たものようである。今日シナ古銅器中の銅鼓と称する器は、全くこの群派に係るものである」〔鳥居1926：278〕。

培陵江上流の八蕃に向かう。風俗、景色を撮影しながら進む。八蕃から広西省の広東河に合流する支流を過ぎる。狛家苗の貴州への移住のルートである。青岩で一泊。ここには狛家苗、花苗、白苗、青苗が群在する。

青苗の女子は頭巾のようなものをかぶり、黒木綿の太い筒袖で、裳をはき、前垂れをかける。頭髮は頭の周囲を剃髪し、頂きのところで少し髪をのこし、「の」字形に結ぶ。花苗は衣服に刺繍をほどこす。各群派の言語は相一致するが、方言はことなる。同一の祖先からでたという言い伝えがあり、民族名をムン (mun) という。花苗の家屋は、屋根が藁葺きで、壁は竹木を組んだり、泥土を塗る。通常2階となっていて、2階では藁を積み重ねて寝所とする。一階は土間で、竈などを備える。家屋の外に豚小屋を設け、数頭の豚を飼う。青岩から2日かかりで

八蕃に入る。打鉄苗が居住。打鉄苗はシナ人が呼称するもので、ムンと称している。打鉄苗の村落は二、三峯からなる。女子の風俗は、頭部を黒木綿で巻きつけ、その上に一つの額巻きを施し、耳に銀環を嵌め、銀の頸飾りをつけ、上下の衣服をまとう。筒袖の上衣に、裳を下衣として裳をはく。前垂れをつける。衣服の下地は木綿を黒色に染めたもの。打鉄苗の舞踏は、女子は舞手、男子は囃子方の役。囃子方は笙を吹く。

踊り手は両手を前に回して、腰のあたりでその 両甲を組み合わせて置く。そうして胴より上は 少しも動かすことなく、ただ足部のみを運動せしめる。その足も前の方へは踏み出さず、一列に立ったまま、蟹の横行するように、足を横さまに運んで、あるいは右しあるいは左し、徐ろに飛び踊るのみである〔鳥居1926：281〕。

八蕃は濠江の上流に位置する。広東河に流れる。広東河は苗嶺山脈を源とする延長数百里の大河で、揚子江、黄河に次ぐ。苗族以外に、苗族・猺族・獠族が住む。八蕃苗の調査を終え、**貴陽府**に帰る。

10/29 貴陽府から安順に向かう。武備学堂関係の日本人の見送り。50清里で**清鎮県**にいたり、宿泊する。

10/30 西に進む。60清里で**安平**にいたり泊る。

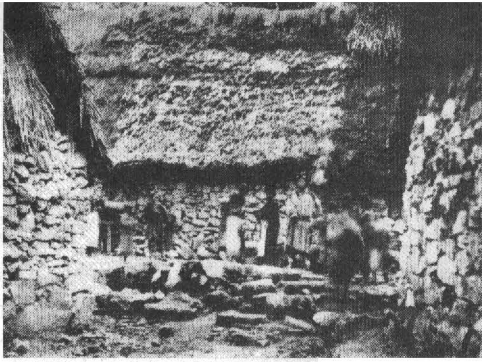
10/31 早朝、**安平**を出発する。「朝霧濛々と立ち籠めて、四面景色は何も辨ずることが出来ない。「一日のなかばはほとんど濃霧に閉ざされた」貴州高原特有の天候である。霧中を**飯籠塘**にいたる。「此処はシナ人の一小市街であって、戸数5,60戸ばかり、やはり苗族と雑居して居る」。屋根瓦・壁は石灰岩の薄片を張る。ここに「鳳頭鶏と称する一つの部落民」〔鳥居1926：283〕がある。シナ人や苗人は「フォンデッチ」とよぶ。婦女子の頭髪の結い降り振りが前髪を高く束ねて、その形が鳳凰の頭のようなから、鳳頭鶏とよぶという。この鳳頭鶏というのは、苗族の群派でなく、「純粹のシナ人」である。貴州省は明代にシナの領地となった。

シナ人が大挙して貴州の苗族を征服したのは、明の太祖時代・洪武年間前後のことであって、当時明朝政府は此処へ多くの兵隊を派遣し、多年苦戦の後に漸く苗族を屈服せしむることが出来たけれども、なお苗族が何か機会を見つけては反旗を翻すことを慮り、守備として屯田兵を置き、長く苗族の鎮圧に当たらしめた。それがために兵士に妻子の随従を許し、家族的生活をなさしめた。その時派遣された兵士は主に江南の人であって、その内にも鳳府の出身者が多かった。けれども当時シナ人として貴州に入ったもので、軍人以外に農事に従事するものが無かったので、兵士は自ら耕作に従事しつつ守備の役を勤めた。

爾来長い年月を経る間に、彼ら及び子孫はいつとはなしに全く貴州の農民と化し去ったのである〔鳥居1926：283-284〕。

土着した兵士の子孫が鳳頭鶏部落で、婦女の髪型は明代初めの江南地方の髪を結い振りともみる。鳳頭鶏の家屋は一般シナ人の農家とかわらない。鳳頭鶏の地理的分布は、西は安順府から東は安平県にいたる。午後4時頃**安順府**にもどる。40余清里の行程。

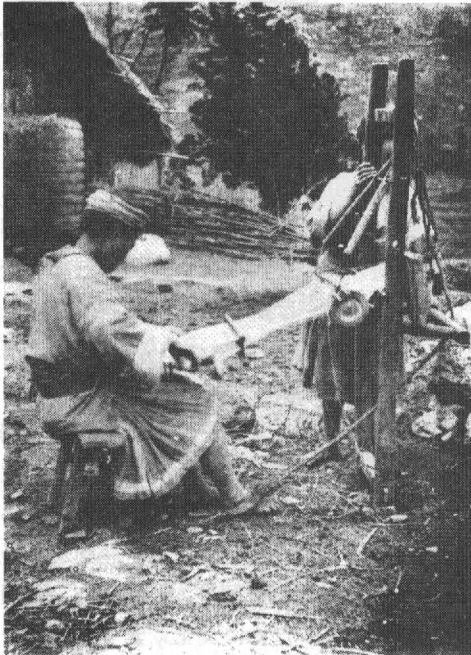
安順府は標高1200mで、河川にそって四川・江西・雲南省にできることができる、「貴陽府と同じく一種の分水嶺」である。城外には苗族の村落がある。自ら「ツベ」と称し、貴定県の所在地を「シンベ」とよぶという。青苗と花苗が住む。



安順附近旧寨花苗の村落 (著者撮影)



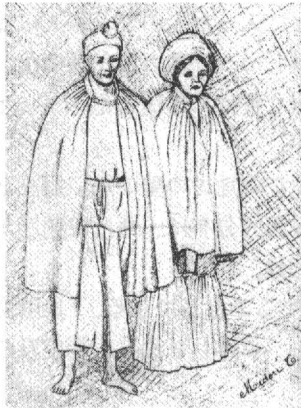
旧寨花苗の婦女 (著者撮影)



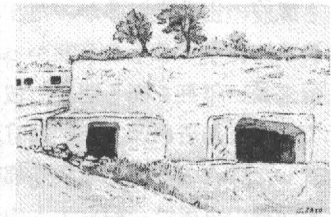
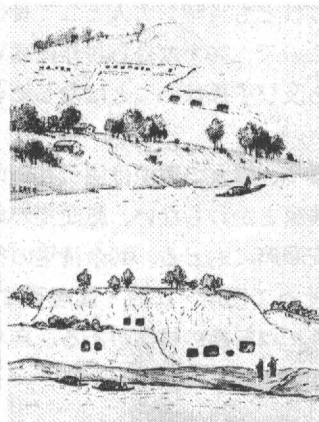
貴州省坡眞の白苗婦女麻布を織る所 (著者撮影)



北盤江上流毛口附近侗家苗 (著者撮影)



獼猴の男女とその風俗
(撮影写真より鳥居緑子写生す)



ワンチャツ一の蛮子洞の図
(筆者のスケッチより佐藤醇吉氏模写す)

図5 西南中国諸民族の人類学的調査 [鳥居龍蔵 1926]



鳥居龍藏一行



雲南省昆明から四川省成都への道

図6 西南中国諸民族の人類学的調査〔東大総合研究資料館1990〕

青苗は安順府の南に村落がある。**青苗礪**と称するところで、二つの村落にわかれる。戸数は各々百戸未満。安順の花苗は府城の北に居住する。シナ人は旧寨、苗人は「タサイクー」と称する。戸数4,50。蠟纈染がおこなわれている。その染色法はすでに宋代に貴州の辰州や沅州の「溪蛮」にあったという。男子の頭髪は毛髪を後頭部に集め、その余りを前頭部すなわち額の上に差し挿んで置く。耳に銀環を嵌める。衣服は青色、灰色に染めた木綿、帯に刺繍をほどこす。女子は銀の耳環、頭に一筋の銀環をかけ、腕環をはめる。両端が長く頭の外にでるほどの一種の櫛を頭上に挿む。荷物は藁縄でくくり、肩にかけて運ぶ。米は麻布の袋を用いる。家屋は二階建て、二階に穀物貯蔵の納屋と寝処、一階は仕事場と台所、家畜小屋。壁は石積み、屋根は草葺き。同族結婚、他の苗とも結婚しない。横笛や笙の楽器が用いる。

11/04 早朝**安順府**を出発。苗人の言語研究のため、花苗の首長の阿連をともなって調査。**鎮寧**で一泊する。鎮寧からは高原地帯になる。広東河の支流**北盤江**に沿ってゆく。

11/05 鎮寧から**紅岩山**に向かう。北盤江流域に狛家苗の村落が分布する。鎮寧以南の狛家苗の婦女は青苗のように頭部の周囲を剃髪し、頂上に毛髪を残して堆く束ね、その上に黒布を巻き付ける。衣服は黒色の木綿で、腰巻が長く地に引き摺る。腰巻きや衣服に蠟纈の藍染めの紋様を施す。衣服の渦紋・雷紋・三角形紋・円形紋は特徴的である。銅鼓を用いる。当時貴州省の苗族間で銅鼓を用いているのは狛家苗のみと記している。

紅岩山上の岩壁に刻まれた文字を調査。獼猴族の文字と関連づけている。獼猴族は雲南から四川方面に分布するという。紅岩山の麓に青苗の村落。戸数14,5。家屋は草舎で、屋根は藁葺き。倉庫が付属する。壁は竹で円形に編み上げ、泥土を塗り込む。草葺きの屋根。北盤江の下流での**関索嶺**に登る。山上は一平原で、その村落で一泊する。

11/06 **関索嶺**の村落を出発して、郎岱に向かう。黒苗の村に出る。「性質は極めて臆病であって、我ら一行の姿を見ると、忽ち逃げ出してしまふ。やっと近づいて追いつこうとすると、頭を地上に摺りつけて平伏して起きない。これはシナ人を頗る恐れる結果である」〔鳥居1926 : 295〕。狛家苗の村落に出て、蠟纈の製造法をはじめて実見する。蠟を熱して布の上に垂れ流し、それにて模様を描いた後に、その上に紺色の染料を流して染め上げる。関索嶺から30里である山頂にたつする。**坡貢**というシナ人の小村落があり、苗族と雑居している。漢・苗雑種で純粹のシナ人でない。白苗も住む。衣服は麻布で白地のみ。白苗と名づけられる。途中、「里民子という者の村落を見た。これはもと明朝の遺民で、当時此処に土着して、一部落を作った純粹のシナ人であるが、今は多少苗族等との雑種をも見るようになった」〔鳥居1926 : 296〕と記する。松明をつくり、午後10時に**朗岱**につく。

朗岱はシナ人集合の一城郭で、昔に苗族鎮圧のために設けた警備地という。一百清里で、旅行中よほど多く歩いた割合であった。

11/07 **朗岱**に滞在。狛家苗・花苗などの身体測定や撮影。花苗の風俗は、男子の頭髪は仁王に似た結び方で、額の上に丸く束ねる。衣服は麻で、彩色を施さない。婦女の結髪は額の上で二つにわけ、後ろに集めて、残りを周囲に巻き付け、櫛をさす。里民子の風俗は漢・苗雑種で、男子はシナ人と異ならないが、年若の女子は結髪を前部で二つにわけ、髻のところを纏ね、余りを後部に垂れている。夫ある婦人は一般シナ人とかわらない。頭に白布を巻き、衣服はシ

ナの婦人服を用い、前垂れをつける。獮獠族も初めてみる。男子はかわらないが、女子の結び振りは額の上で髪を二つに分け、下を辮髪して、余りの髪を頭の周りに巻き付ける。容貌、皮膚の色合い、言語が苗族と異なる。祖先を異にしている。獮獠は朗岱以西に分布する。朗岱の存在する位置は、地勢上貴州・広西・雲南・四川の四省を連絡する交通の中心点と見るべき処で、その地域を流れる北盤江は、雲南省東部に発源して水域に接近し、而して水域は四川省に流れる涪陵江の上流で、北盤江は東流して広西省に入る。諸蛮族が集中する。

11/08 午前7時、朗岱を出発。6,7戸の独家苗の村落。打苗関にたつする。五陵にいたる。毛口駅につく。シナ人が住む。戸数四、五百。

一休貴州省では、諸物価売買のため毎月例日各処に市を開くのは慣例であつて、今日は彼処、明日は此処と日々場所を定めて開くのである。市の有様は、シナ人、又は苗族各群各派の人が思い思いに自己の作った畑作物又は手織り物、その他手工品などを持ち寄つて、これを売り捌いて金銭に易え、又は物々交換で取引するのもある。たとえば一反の木綿を買おうとする時に、その木綿に相当する物品を提示して相交換するのである。その辺の漢・苗は右の方法によって交易するものが多く、シナ上古の歴史に「日中為市」といえるのは、けだしかかる状態をいつたのであろう〔鳥居1926:299〕。

砂糖、米、麦、果物、鶏などが売買されていた。市に出てくる独家苗は盛粧している。シナ人は独家苗を「水府」と称している。女子の頭髪に黒布を巻く。腰に褌をとつた長い腰巻を締めている。楽器は笙を用いずに、横笛をつかう。銅鼓も使用する。「銅鼓は我らの言葉でナンエンといい、現にこの附近の土中から掘り出すことがある」。花苗が住む。頸に銀製の環をはめる。毛口駅に一泊する。

11/09 7時に毛口駅を出発。5～6丁で北盤江の沿岸にいたる。山中で舟にのる。舟はまず岸に沿うてずっと上流に遡り、それから流れに随つて斜めに川を越えて前岸につくという。2丁ばかりで、小村落、さらに15清里で阿都にたつする。60軒ばかりの一小駅次である。

11/10 花貢を出発。北盤江の上流に進む。シナ人雑種の村落と独家の村落が分布。11・12日も進み続け、13日に劉官屯に着き、南方70kmの所に住むという獮獠族に出会う。劉官屯の西、標高1750mの山塊は雲南と貴州省境の分水嶺。13日の行程は58清里。両頭河駅で宿泊。漢・苗族が居住する。

11/14 午前6時に出発。資孔泊。

11/15 午前6時に出発して、西方に向かう。貴州・雲南省を走る山脈。標高830mの地点で記念撮影。馬上の鳥居の写真か。1800mの高所、勝境関にいたる。雲南・貴州省の境界。石門があり、「勝境関」の文字。2～3丁で「滇南勝境」、その左に「東至貴州亦資孔三十五里」、右に「雲南平彝縣城十五里」とある。関帝廟がある。雲南省に入り、第一に目に留まったのは牛車の多いことで、牛が車を拽くのは貴州省に於いて絶えて見なかつたという。牛車の写真がある。雲南省に入つてからは苗族や独家苗はみない。「雲南省に於けるシナ人は果たして純粹のシナ人なりや否や」か。「雲南省土着の蛮族が古い時代にシナ化してしまつたものではないか」とかんがえた。勝境関から10清里で平彝県の城門にたつする。「知県衛門では早くその通知があつたものと見え、あらかじめ宿舎の用意をなし、宿舎の入り口に紅色の紙を貼り出して、「日

本教師鳥代人寓」と記してあった。「漢口領事山崎氏」〔鳥居1926：233〕らの連絡網か。**平彝城**は方形で街衢は一筋町、中央に三層樓の孔子廟がある。市街の戸数は五、六百ばかりで、八分は商人、二分は農民が居住する。

11/16 早朝出発。12清里で**多羅舖**にたつする。蕃名でツラボという。戸数15。「十中の七分が甲状腺腫と称する病症に罹って居る」〔鳥居1926：305〕。**白水駅**に着いて泊る。「巡撫の一行」が市内に宿泊した。「引率した兵隊は、皆一時雇いの輩」という。

11/17 午前7時、**白水駅**を出発。標高1900mの**水嶺墩**にいたる。戸数20。男女とも甲状腺腫(子)の病者がいたという。**広東河**をくだり、35清里で**小霑舖**(標高1650m)にいたる。10里で平地に出る。水田がひろがる。**霑益州城**に着き、宿泊。四川・雲南・貴州三省の交通の衝にあたる中心駅。市内に閔帝廟が建つ。

茲に少しく特記して置くことがある。余は此の日例の如く乗馬で城門を通過しやうとする時、其の入口で鍛冶屋をして居る一工人に遇つた。彼は余に向つて、「洋鬼^{ヤンキョー} 洋鬼」と絶叫して、侮辱の意を現はした。余は頓着せずして通過し、然る後通事をして知州に其の無禮を警告せしめ、且つ附言するに、若し知州にして此の事件を等閑に附し去り、何等の處分をも行はないやうなことがあれば、余は雲南省城にいたつて巡撫衙門に訴ふべき旨を以てした。知州はこれが為めに大に驚いて、間もなく吏員を派して余に謝罪の意を表し、尚禮物として豚の乾肉・鶏肉等其の他の品を夥しく贈り來り、この事件内済に願ひたい、無禮を加へた奴輩は鞭撻の刑に處するからと申出た。余が斯ういふ強硬い手段えを取つたのは、従來日本人にして支那内地を旅行する者が往々洋鬼呼ばゝりで嘲罵されることがあつても多くは泣寝入の姿で済ますのをして知つて居るので、日本國民の體面上、さういふ場合には遠慮なく支那當局を責めて、斯かる陋習を根滅せしめたいと考へて居つたからである〔鳥居1926原書：199〕。

11/18 早朝**霑益州城**を出発。護衛兵として兵士・壯丁6名、馬丁1名を随伴。人家に「石敢当」を立て置く風習がある。**茶庁墩**につく。30里で馬龍城附近にいたる。知州から派遣された兵卒とともに**馬龍城**内に入る。知州が宿舍を用意していた。

11/19 **馬龍城**に滞在。戸数三、四百。知州の招きで、部下一隊の訓練を見る。

11/20 早朝出発。30里で**閔帝山**にたつする。戸数五、六百。午後3ごろ**易降駅**につく。雲南街道の一小駅。戸数二百余。泊。87清里の行程。

11/21 午前4時出発。20里で**小新市街**にいたる。20里で**老街**。清真寺がある。建物の構造はすべてシナ風。「回々教」が盛ん。5里で**龍橋墩**にたつする。戸数百戸以上。市場は財神廟の内外の広い庭地。木綿・金物類・土器・果物・紙・墨を物々交換の取引をする。途中山塩を運んでいる者に出会うことが多い。5里で**楊林駅**に到着。駅の行台に泊る。

11/22 午前5時半**楊林駅**を出発。30里で**長坡**、15里で分水嶺にいたる。滇池を遠望する。5里で**シンス**。牛車を拽くもの、数十頭の雲南馬を牽いて山塩を運搬するものに出会う。散密羅猓であった。撮影する。午後3時**板橋駅**に到着。一泊する。羅猓は雲南府一帯に居住していたが、漢民族の勢力がおよび、滇池附近、板橋駅を中心に左右数里の地に移住。十八ヵ村ほどあり、自らサルヌバと称している。身長高く、皮膚は褐色。女子は頭髮を辮髪にしてその上を

黒い布で巻きつけ、銀製の耳環を嵌める。ペトツアは板橋駅の西6里、戸数50戸の羅猓の村落で農業で生活する。自ら「散民」と称する。板橋駅をフタク、シナ人をシューバ、苗族をナイスツプ、独家をソーチャツという。

11/23 板橋駅を出て、清里約40里の雲南府に向かう。5里でセンキウタンにいたる。散密羅猓の女子が田を耕す。5里で豊楽寺（別名、金馬寺）につく。鎮江府附近を過ぎ、放馬橋に到着。5里で十里舖（6戸）。戸数20の散密羅猓の村落。雲南府の三層樓の城門を通り、12時に雲南府につく。

11/24 雲南府に滞在。漢の時代は益州郡、唐代に雲南・四川の西南夷は六詔王国をつくった。その盛大であったのが蒙舎詔で、大理府にあたる。蒙舎詔はその後、他国を統一して南詔王国を建設し、元の時代に滅亡した。『マルコポロの旅行記』から元代雲南府を描写する。明の太祖洪武15年に雲南府の城郭を修築した。周囲九清里余、高さ二丈九尺余、六個所も門を設ける。城壁は塼築。人口は5万。交易品は茶・塩・阿片、工業は硃類の製器、大理石の彫刻物、象牙細工、皮細工、毛氈の製造。硃は雲南府、大理石は大理府附近に産出し、象牙はビルマから輸入している。雲南特有の馬が産出する。文献に西南夷の馬のことがみえるという。雲南府城外の万慶寺白塔（元代）、城内の元代の塔などを調査。雲南府の洋務局は巡撫衛門内に設けられた役所で、外国人に対する諸般の事務を取り扱う。仏領トンキンと国境を接していて、仏国人の往来は盛んである。トンキンから雲南府に通ずる通路には、仏国によって、電信・郵便等の通信事業が盛んに行われている。「然るに顧みて日本人は如何と云えば、独り余が孤影飄然として此処に立って居るだけで、他に一人の居住するものだけに見受けぬ」〔鳥居1926：322〕。

11/26 雲南府を出発。雲南省南部の蛮族探検の途に上る。広東河の上流、仏領トンキンに流入するトンキン河の上流地方、弥勒・十八砦・通海等の方面、マルコポロのいわゆるアニン附近である。出発に際し、洋務局は2名の親兵を護衛とし、昆明県の親兵2名その他駅丁等を付き添わした。

30里で小板橋駅にたつする。散密羅猓のタシヨブ村落（40戸）を過ぎて、滇池の湖畔にいたる。呈貢県城につく。投宿する。

11/27 午前7時出発。呈貢城の東門を出る。カノワ村落（戸数50～60）、クワンインス村（数十戸）、七旬にいたる。米を負う駄馬の群にしばしば出会う。午後2時半、七孔関城につく。戸数三百余。温泉がある。宿泊する。江西省の土匪鎮定から雲南省に帰っていく軍隊も宿泊。

11/28 午前7時出発。「悪路の峻坂をも、余は乗馬で登った。騎手の伎倆あるのではなくて、馬の雲南産なるがためである」。靖安肖にいたる。数十戸、村内に観音廟がある。宜羅県の城壁を見つつ進む。羅猓の婦女を観察しながら、渡船場から城沙塘に渡る。農作が専業。「各戸の入り口に、石敢当の大極図を円形の板に描き、その形が二つ巴の内に眼のついてものを掲げて居る」。イーロンツアンという村落を過ぎ、タウクにつく。戸数15。13戸はシナ人、2戸は羅猓。羅猓の家を調査するため、暫く一行の通事等を別れ、二、三の壮丁のみを従え、留まった。言語などの調査をして、トンゼーチン（戸数20）を過ぎる。5里でショアツンにたつする。随行の壮丁中に提灯を携えてきたものがあって、先頭に日暮れの道を進む。5里で、

6時半**老牛井**につく。通事らと合流する。十数戸の村に泊る旅舎がないため、**路南庁**に向かう。5里進んで、7時半につく。85里の行程。

11/29 7時**路南庁**を発する。半丁がかりで河畔に出て渡る。石灰岩の奇観を写真撮影。獼猴の方言の**アツロン**村につく。戸数10。男子は頭の上を厚い布で二重三重に巻く。女子は羊皮を肩に掛け、腕輪をはめ、足は跣足。高い塔がある。**スイップ**（4戸）にたつする。通事が用意した米を炊いて、朝食をすます。**大麦地**に到着、宿泊。**弥勒・路南**間の駅次で、戸数20。

11/30 7時出発。獼猴の**法矣哨**村。4,50戸。小池の周りに散在。獼猴の女子の頭に巻く黒布の上に子安貝をいくつともなく連貫したものを飾る。子安貝は台湾の生蕃や西南夷が盛んに用い、マルコポロ旅行記に雲南・四川の蛮族が貝殻を以て通貨していたのは子安貝のこととみる。午前12時ごろ**花口**につく。朝食をとり、体質などを調査し、撮影。午後2時に出発。花口から2～3丁で**タンリンス**にいたる。戸数約50。入り口に三層樓の門を設ける。雷神を安置。花口から5里で**ルークワンジュ**にたつする。独家の老女に出会う。北方15里の**タライツン**という村（戸数25）のものという。この附近は独家苗の北辺にあたるとみる。**弥勒県城**に着き、投宿。知県衙門を訪問。

12/01 **弥勒県城**附近を調査。マルコポロのアミンの地。通海の南の阿迷州。元時代、シナ人は住んでおらず、「全く蛮族の巢窟として存在」〔鳥居1926:335〕していた。午前8時**県城**を出発。山金河にいたる。一大橋があり、欄干に2頭の獅子を彫刻する。小獅子山の、獼猴の村落にたどりつく。戸数35～36。5～6戸ずつの一群が点々散在する。中央に一つの小池があり、飲料水をとる。家屋は箱形で、高さ6尺、四壁は粘土を積み重ね、その上に丸太を横たえ、屋根も方形で泥土を置きかためる。屋内は食堂、台所、豚・牛・水牛などの飼育所屋根は穀物の乾し場になり、階子を備えている。屋根の上に樹木を寄せ集めて籠のようになり、底に4本の足ををつけ、移動可能な「倉庫」（貯蔵施設）がある。獼猴は黒獼猴（ニセツブ）、白獼猴（アシブ）の2群派がある。雲南府から弥勒県にかけては白獼猴に属する。獼猴数名の身体測定と撮影。その内の1人は8清里隔たったカシミと名づくる黒獼猴であった。**弥勒県城**にもどる。往復20里。

12/02 5時に出発。十八砦までの85清里であるので、未明に出発せねばならず、護衛の兵卒を宿舎に帰るを許さず、旅館に留めたが、起きなかったという。5里で**ニシサウ**村落にたつする。ここで花苗の母子2人に出会う。東方20里の花苗の**龍甸**村落（戸数約10）の人。母は40才、娘が17才くらい。自らムンといっている。母に甲状腺腫があり、貴州の苗族にみなかった。『南詔野史』に雲南省内に花苗が住み、貴州省から移住してきたと書かれているという。11時過ぎ**小坪地街**に到着。戸数30。弥勒県城から約40里。一軒の家で、「赤錆びの米」を附近から買い取らしめて炊き、午餐をとる。0時半に出発。水田稲作をみる。5里で**チャツウ**村落にいたる。戸数30戸。村の入り口に高麗狗が置かれている。5里で苗族の小村落。耕作中の一人の老女に問うと、七、八丁先の**カターजू**村落まで逃げた。戸数約15の花苗の村であった。家屋は長方形の二階建てで、校倉の建て方と同じ、長い丸太を横に組み上げ、四隅で井桁のように作る。萱葺き屋根。屋内は台所、物置、家畜小屋。2階は穀物貯蔵庫と寝所になっている。獼猴とシナ人の雑居の村（14～15戸）などを過ぎ、日暮れに**十八砦**につく。行程85里。

12/03 十八砦に滞在。市の立つ日。この地は明の嘉靖元年に蛮族鎮圧のため、十八の砦を設けた。現在千戸。役所に武官1人が在任。城内に文廟・武廟・城隍廟を設けている。城隍廟の傍らに康熙五十六年建立の碑がのこる。市街の来歴を記す。廟前に高麗狗と1対の石象。「雲南省はシナに於いて最も古風の残存して居る地方」〔鳥居1926:341〕で、諸廟は明代以前とみる。他省から移住したシナ人と土着の蛮人との雑種が一つの社会を組織している。役所の官吏に調査協力依頼、義学(私立学校)で調査。白・黒羅猱のほか阿者羅猱(アチャブ)が存在する。集まったのは東北5里のトリミ村(石頭村)のアチャブ。阿者羅猱は、一はチー、二はイヌー、三はズー、四はシー、五はウンコ、六はフー、七はシウ、八はヒー、九はクー、十はツォーという。

散密羅猱、黒羅猱、白羅猱、阿者羅猱など特別名を冠して諸地方に別居分住しているが、体質・言語上、共通同一で広き意味の羅猱と総称しえる。苗族・独家とは同一群族でない。

12/04 午前5時半、随行の兵卒12名とともに西方に向けて出発。城外は畑地。10里で**タウツ**にたつ。戸数10余戸、黒羅猱。さらに**ウイー**の黒羅猱村落。女子の撮影。頭髮は辮髪で、先端を頭に巻き付け、上に黒布を被ぶる。被り方は先端を長く後背に垂れ、我が国の御高祖頭巾に似る。バヘルンと称する。頭巾の上に銀製飾り。少女の頭髮は前額と後背の所に少し残して、その他は皆剃り落とし、その頭上に一種の帽を被り、**トンイー**と称する。明代遺風の面影である。

12/05 早朝出発。絶壁の山路を歩き、約20里で**楊柳井村**につく。6戸ばかり。午後4時、**寧州**にたつた。宿泊する。戸数一千戸。市街の入り口に四角形の七重塔がある。行程60里。市場に阿者羅猱が多く混じる。女子の頭に視角四角の冠をい置く。「刺繍した風呂敷のものを畳んで、鳥打帽子の如き形になしたもので、縁に朱、青等の刺繍」〔鳥居1926:348〕をする。

12/06 早朝知州を訪問挨拶。**通済橋**を渡る。途中村の入り口に石獅子一対が立つのを見る。山道を数里、通海が見える。午後3時30分、**通海**の市街にたつ。雲南府と仏領トンキンを連絡する交通の中央。戸数約二千。商業が盛ん。煙草が名産。西洋や日本の齒磨楊子・石版画からの輸入品もある。この地の羅猱は**アプー**と自称する。一はチー、二はウンニー、三はスー、四はシー、五はウン、六はテウ、七はヒー、八はシン、九はキュー、十はツーという〔鳥居1926:349〕。羅猱族はチベット=ビルマ民族に属するという。

12/07 6日に通海に到着したとき、張鎮という男が市の入り口に出迎えた。沉水を遡ったとき同船した楊氏の家僕で、郷里の路居村(通海から60里)に帰省中、ここの来遊したことをきいて、来たりむかえた。早朝に、羅猱とシナ人が雑種民からなるその路居村に向かった。20里で湖畔。潮音寺付記に二重楼があり、龍神をまつ。旬苴にたつ。関帝廟の祭日にあたる。「この辺は羅猱の巢窟であって、もと寧州に属して居たのを明の代に至って、明人はこれを征服して帰服せしめた」〔鳥居1926:350〕。路居村につく。行程60里。

12/08 夜明け前に出発。山道を越え、**セタンム村**に向かう。村内に廟をみて、路居村にもどる。

12/09 路居村から、数個の村落をへて、**撫川湖畔**に出る。海門楼にたつ。廟があり、明の天順5年(1461)の石碑が立つ。フランス商人一行に会う。14里で**江川县城**につく。

12/10 7時江川県を出発。**茨相堡塘**から関索嶺を越え、**花落村**に到着。一泊する。

12/11 早朝発。10里で**フージャンツン**村(6、70戸)にいたる。ある村は島田髻のような結び方で、辮髪にして後ろに垂れる髪を結う未婚の女性を見る。東に50里すすみ、湖畔にたつする。**滇池**である。日没ごろ**呈貢**県城につく。雲南南遊の第一夜に宿泊したところ。十数日目にもどる。

12/12 午後2時に**雲南府**に帰着。

12/13~12/18 雲南府から10里の**小偏橋**村で、「一人の土人を雇って、獼猴の言葉を練習すること四日間、ほぼ日用の語に通ずることが出来た」〔鳥居1926:353〕。四川省へは二方面の路がある。一は寧遠路を経て成都にでるもの、一は曲靖・東川・昭通を経て叙州に出て、岷江を遡って成都に入るもの。後者マルコポロの取った路で、旅行には安全であるが、前者の路を選ぶ。

12/19 雲南府総督衛門洋務局は2名の兵士をつける。9時に騎馬で出発。木炭を背負って来る獼猴に出会う。富民県城附近の人で、沙獼猴と称する。10里で**土家橋**をへて、午後4時**二村**につく。宿泊。沙獼猴はシナ化されている。木炭・麻・野菜・鶏などを雲南府に市街に持って行き、販売する。ものの運び方は、枷のような木板を首に掛け、結びつけて行く。

12/20 二村を出発。**利漢関**をへて、**砂鍋**村につき、投宿。**利漢関**は雲南府と寧遠の関所。武定県のサイツ附近から来た黒獼猴に会う。シナ人は黒夷とよび、ナスブと自称する。1 (yim m)、2 (nimm)、3 (samm)、4 (simm)、5 (u m)、6 (chó mm)、7 (sí m)、8 (hí m)、9 (ku m)、10 (che m)。

12/21 **砂鍋**村を發して、北にむかう。**西一村**に到着。5里で**富民**県につく。戸数三、四百。数個の寒村をへて、午後3時**者北街**に到着。一泊する。戸数50~60戸、旅館4~5軒。四川省の名を記していて、省の近いことをおもわせる。揚子江の上流、金沙江まで二日路の地点。

12/21 「一二月廿一日……武定縣に向つて出發した」〔鳥居1926原書:338〕。**鷄街**にたつする。護衛の兵卒が引き返す。ここから「土地の習慣に従って、村の壮丁を備って村から村へと伝達護送されることになった」〔鳥居1926:355〕。武装した壮丁に護衛され、10里で小店につく。戸数約40戸。**冷飯橋**にいたる。獼猴とシナ人と雑種の村落。午前10時**冷飯橋**をでて、**碗水峠**を登る。狼煙台がある。「二、三の旅客に遇ったが、いずれも槍及び火繩銃を携えて居った」〔鳥居1926:356〕。**小山舖**で、リス(Li'su)の女子に会う。タルンタン生まれ。リスはチベット民族の一分派に属し、その風俗はシナ婦人のものと同じであるが、袖先や裾などに刺繍を施し、身体は矮小にして顔まろく、皮膚は褐色を帯びているという。雲南省と四川省の分水嶺(最高所は1950m)を越え、**武定**県に到着する。開市の日で、人出がおおく、ミチャーとリスの二つの蛮族をみる。ミチャーの体格・風俗はリスと同じで、獼猴をアツカー、シナ人をハポーとよぶ。また苗族(花苗)を見る。カンポ(戸数11)やイナチャンに居住する。自らモンと称し、獼猴をマンという。武定県城は戸数300。知州から大鶏1羽、武官から鶏2羽、梨数個の・牛肉などの寄贈される。行程75里。旅店で、ミチャーの2人呼び寄せ調査する。2人の直立写真をとる。「麻布の服を着し、一人は台湾のツァリセン蕃と同一の頭髪で、他の一人は安順の花苗女子と同一の結い方をして居る。ただし頭の周囲はシナ風に剃髪して居る」〔鳥

居1926 : 358]。リスの単語は、1 (chim)、2 (nim)、3 (sul)、4 (lil)、5 (gul)、6 (chol)、7 (sil)、8 (hel)、9 (kul)、10 (tsum) ほか。

12/22 午前6時**武定県城**を出発。保護兵4名随行。5里で**西村**(戸数百以上)を右にみる。15里で**烏龍洞**(標高1550m)にたつする。戸数20。茶店が2~3戸。上流2~3町にリスのフスブ村(シナ人はホエトチングとよぶ)があるという。**石將軍**(戸数数軒)、**シャクベ**村落(30戸)をすぎ、午前10時15分**湯巴哨**につく。10里で**鷄鶯小村**にたつする。戸数5~6戸。手杵で米を搗くのをみる。15里で午後3時**花橋**(標高1870m)にいたる。戸数40。ある人家で宿泊。行程60里。本日見た村落は**羅猓**で**甲状腺腫**のものが多い。分水嶺から下る途中に出会った**羅猓**4人の男子はkaLoLoという。乾羅猓という意味。烏龍洞のリスは村内婚、女子は辮髪で、黒布を巻く。耳朵に銀の耳環を嵌める。

12/23 午前7時出発。5里で**ペンボ**(戸数30)、5里で**へツツイ**、**ルスベ**(戸数4,50)、5里で**馬案山**(戸数15~16)にたつする。朝食をとる。**ロロム**村の白羅猓にあう。「今日はシナの冬至の季節に当たり、その祝として各戸に米の分で小さい団子をこしらえて居った。余はその団子を乞うて湯煮えとなし、砂糖を掛けて食した」[鳥居1926 : 362]。**馬案山**をでて、羅猓の男女に遇う。西30里の黒夷の**シオホテン**村のもので、「その風俗がいかにも面白かったから、右の女子四人を直立せしめて、一枚の撮影をした」[鳥居1926 : 362]。15里で**石槽場**(標高2020m)にたつする。戸数30。15里で**クワンブ**(標高2300m)に。人家1戸のみ。10里で**ケチンサウ**(標高2320m)にいたる。番兵の家があり、松の木で柵をつくる。烽火台がある。武定県からの**警護兵**は帰り、番兵の中から交代兵を出す。西10里の**エンヤンボ**の黒夷に出会い、さらに**霊仁**(戸数5,6軒)にいたり、宿泊する。家屋の壁に水瓶1、土器1、木盆2、茶碗数個、杓子2~3本、釜2(シナ風)、多少の鉄器類の日用品が立てかけられている。奥の台所に神棚がある。棚の上に底のない箱を置き、中に赤布に藤切れで刺したもの二つを木の上に差し置く。藤切れに刺した二つは男女で、父・母の霊に象ったものである。この附近に白夷と黒夷が居住していた。石槽場出会った花苗は武定に帰るものであった。「一人は年齢四十五、六、白布を以て頭に巻き、麻布の袖ある半体衣を着し、足に麻布の股引を穿いて居る。他の一人は男の年齢二十五、六、その頭は、一昨日撮影した所の散髪でない男と同一頭髪で、服に麻布製のものを着て居る」[鳥居1926 : 364]。白羅猓の単語は1 (ch'yo)、2 (n'yo)、3 (su'yo)、4 (syo)、5 (gyo)、6 (chyoy)、7 (-)、8 (hyo)、9 (k'yo)、10 (che'yo) など。

12/24 午前7時出発。「今日は四十五里も行かねば朝食を取る所が無いというので、此処で食事の支度をして喫飯後出発した」[鳥居1926 : 365]。ここから**護衛兵**3名が随行。15里で**ホツパ**にいたる。戸数10軒ばかり。標高1979m。住民は羅猓で、風俗は漢・羅混合。途中で出会った羅猓はいずれも黒夷で、**イチーヤン**(西方14里)・**ピチー**(西方20里)のもの。15里で**茶房**(5戸)にいたる。康熙三十四年の石碑がのこる。15里下り、午前11時、**元謀県馬頭山**(戸数20、標高1300m)にたつする。下馬して昼食。霊仁から45里。12時出発。**中屯**(20戸)につく。茶店で喫茶小憩。5里で午後3時**馬街**に到着。300戸、土城を四方にめぐらす。旅店に投宿。行程75里。**エイチャンツー**(西方20里)、**チョロマ**(同14里)、**ピチー**(同20里)らの黒夷に出会う。この附近の羅猓は黒夷(元謀県東45里、凡州土司管下)と白夷(同じく凡州土司の

管轄) とからなる。花苗が元謀県城の周囲約3、40里に点在する。

12/25 7時半、**馬街**を出発する。護衛兵5名随行する。西北80里のボロテヤ70里のアクの白夷に会う。5里で**シグンオン**(無人)にたつする。10里で**牛街**(2、30戸、標高900m)。下馬して朝食。10里で**羅傑**の**タフオンファヤン**村(14、5戸、標高900m)に到着。5里で**黄瓜園**(17~18戸)につく。10里で**ヘル**(10戸)、3里で**パスメ**(6戸)、5里で**テナビ**(15、6戸)、5里で**斑邁**(27戸)、5里で**ラチン**(3、4戸、850m)にいたる。金沙江がよこたわる。午後2時半**金沙江**司に着き、泊。行程75里。金沙江司は戸数5、60戸、標高800m。半漢・半羅。途中で出会った羅傑はすべて白夷で、ラテバン(西北80里)、アカニ(70里)、江駅(金沙江の対岸)であった。12月19日雲南府を出発して7日、金沙江を渡り、蜀の地、四川省に入ることになった。

チベットの国境に近い極めて僻陋の土地であって、加うるに千山万壑重疊し、いわゆる熊怪鳥路の險を冒すのと同時に、昔から蛮族の跳梁する巢窟であって、少なくとも大渡河の附近までは、漢人の容易に入れなかった所である。殊にその蛮族は最も凶暴を以て伝えられて居る羅傑族が主であって、漢人が彼らのために危害を加えられることは、近来といえども珍しくない。余はこれからその漢に向かって進むのである。蛮族調査の興味最も深きと共に、その困難は頗る想像するに余りがある。殊に季節はいよいよ歳末に迫り、山地の寒気ますます激しからんとするの時である。余は奮励一番、更に通気を鼓して今回の調査の目的を達せんことを期する〔鳥居1926:369〕。

12/26 午前8時出発。金沙江の軍服を着した兵卒7名随行することになる。金沙江岸に出て、渡船場につく。50戸ばかりの人家。金沙江の河幅は8町ぐらいで、水涸れ時で処によって5町ぐらい。渡船は櫓こぎ。船子は3人。船は流れに順って下流へと漕ぐ。5分ほどでつく。馬は船に乗せていない。15里で梨の実を賣る少女に出会う。大梨5文。5里で午前11時10分、**ポーチン**(4戸)につく。下馬して朝食。東15里で白夷の村落。金沙江を渡り、東北30里に黒夷の村落。金沙江の東40里のウハタン村から、土器を籠に入れて肩に担った来た男に会う。皆握り飯1個を持っている。棒を持って肩に担ぐ。花橋付近の白夷などのような木板を用いない。午前11時半出発。8里で**火焰山**(4戸)につく。午後2時**姜駅**につく。雲南・四川省接合の地点。戸数60。廟がある。康熙37年の石碑。

12/27 午前7時出発。**姜駅**から3名の護衛兵が随行。10里で白羅傑の**アライ**(百戸)にたつする。家屋、居民の風俗を調査。麻布を織り、衣服を自給している。白羅傑族の数詞は、1 (te)、2 (nu)、3 (sa)、4 (li)、5 (go)、6 (ku)、7 (si)、8 (he)、9 (ku)、10 (tim)。身体測定を終え、進む。5里で雲南・四川の境界にたつする(1800m)。廟がのこる。戸数は7、8戸、家屋は漢・羅傑雑種の。羅傑の家は1~2軒。午前11時、下馬して朝食。5里で**大石頭**(5、6戸)にたつする。小憩して、米団子に砂糖をかけて一喫した。10里で**松坪関**(約百戸)。10里で**リンワン**(10戸)。午後3時、**河口駅**に到着。戸数三百弱。西南に**白杏山**とよぶ山がある。市街から数町に石公廟がある。行程60里。ヤラン(姜駅より東15里)、アライ(姜駅より北5里)、左塞(緑水河の東50里)の白夷について調査した。アライの男子は辮髪、衣服はシナ仕立ての麻府。各戸ごとに織機があり、麻布を織る。物を担ぐさい、両肩より脇の下

に縄をかけ、額に端をあてる。

12/28 午前7時に出発。護衛として兵卒1名、人壮2名。5里で**アルピン**（百戸以上）にいたる**小河通**村落（30戸）を過ぎ、**ロボ**（30戸）につく。**ヤンヒー**（百戸）、5里で**小屯**。下馬して朝食。10里で**ブピン**、10里で**小関河**にいたる。**シーテンブー**から5里で**大橋**。5里で**川心店**（戸数百戸以上）にたつする。五里河のリスと会う。7、8戸で、男は辮髪で麻のシナ服、羊毛皮の半体衣を着る。女子はシナ服で、頭に阿者獼猴と同じ赤い切れで銀を鑲めた飾りをなし、耳環をはめている。頭髪はシナ婦人と同様に巻く。武定附近のリスと阿者獼猴との風俗を折衷したものとする。午後5時すぎに**鳳山營**に到着。行程80里。

12/29 午前7時10分出发。3名の護衛兵が随行。**クワンインチン**（戸数10戸）。5里に**沙河舖**（24、5戸）。下馬して朝食をとる。午前9時前。**ベセブ**（7、8戸）、**センサンエン**（10戸）、**シヨハンサン**（7、8戸）を過ぎ、**落沙廠**（戸数二百以上）にいたる。廟がある。茶店で休憩。**トータン**（40戸、1640m）、5里で**タチアントン**（8戸、1630m）、**チアンサンシアンツー**（1620m）を過ぎる。七重塔、会理州城がみえる。15里で**会理州城門**につく（午後2時半）。知州・武官を訪問。行程60里。会理州城は四角の城壁でかこまれる。戸数は五千ほどといわれる。住民はシナ人のみ。

12/30 7時30分出发、羅州山に向かう。知州から吏員2名、兵卒数名をつけてくれる。1疋の馬を供する。すべての費用は知州がもつ。5里で**サエンチヨ**（3、40戸、標高1600m）にたつする。5里で**五里駅**（5、6戸）にいたる。**ペウインガン**（人家30戸、標高1600m）、5里で、午前9時30分**白雲庵**にいたる。10里で**塘湾**につく。5里で標高2200mの高所の黒獼猴の村落（7、8戸）に午後2時半ごろ到着した。女子のみ在村、麻布を織っている所と、女子数人の直立している所を各々1枚ずつ撮影した。

12/31 昨夜は蛮社の囲炉裡が暖かったため、一行熟睡し、日高く山の上に昇るまで起き出なかった。洗面をおわるや、頭目その他2、3人の男子、2人の女子を直立させて撮影。途中**ウインガン**で小憩して朝食、午後2時に帰城した。雲南の総督衙門洋務局からの護衛兵2名は任務を終え、帰路につくことになった。労苦を謝し、坪井先生、拙宅に送る書簡を託し、上海の樂善堂宛の包み物を送ってもらうことにした。

01/01 午前6時、**会理州城**を出発。城門から数町のところに聖宮寺がある。10里で**ペインガン**に到着。朝食。10里で**白雲庵**にたつする。白夷の**ペイヴァ**村（15戸）に行く。5里で**タペイ**につく。5里で**油菜地**にたつする。午前12時。最高2000mの地点を過ぎ、**ニンフタン**にたつする。夷門（60戸）。武官1人が駐在。会理州城の兵卒と交代。この附近の獼猴は白夷。**ソモキ**（西方3、40里）、**シオランタン**（東方40里）に居住する。2000mの頂上に茶店1戸があり、チマキの餅を売る。5里で**白菜湾**（5、60戸、標高1800m）にいたる。午後4時半。宿泊。行程60里。

01/02 「余は昨夜よき夢を見た。昔余の家に勤めて居った八百屋町のおしげ夫婦が、数多の細長い紙に、余を黒龍に喩えて賛文を書いて贈った夢である。新年の吉夢、幸先宣かるべしと一笑した」〔鳥居1926：387〕。午前6時出发する。10里で**モモエン**につく。観音廟を見る。5里で**半辺衛**にたつする、朝飯。5里で**分水嶺**村落。観音廟がある。5里で**巴松**（3、40戸）。

衛門があり、兵卒は交代。5里で**摩麼營**（人家300）にいたる。市街に烏王廟がある。10里で**旬秒関**（6,70戸、1270m）。5里で**フピユーク**にたつする。5里で午後5時**安寧河畔の公母營**（百戸以上）に到着、宿泊。行程5,60里。

01/03 午前6時出発。兵卒2名随行。20里で**錦川橋**（人家2,30戸）にいたる。10里で**鉄人房**（人家4,50戸）にたつする。10里で**落腰場**（20戸）にくる。10里で**半站營**につく。午後5時**小高橋**到着、宿泊。行程60里。人家数十戸。入り口に三層塔。**ワンタンビン**（鉄人房の東15里）の黒獼猴を調査。安寧河沿岸で甲状腺腫のある人を見る。「此処の獼猴は人を奪い去る風があるというので、四名の兵卒が来て余の旅店で夜番をした」。

01/04 午前6時に出発する。民壯4名随行。**安寧河**の右岸を北に進む。10里で一傘、下馬して朝食。10里で**徳昌**を過ぎる。鉄の吊り橋（鳳凰橋）が架かる。15里で**雨露口**に到着。大高橋（石橋）を渡る。5里で**大蘆栗塞**（人家30戸）。20里で**黄水塘**に到着、宿泊。戸数300戸。20人ほどの獼猴に出会う。黒夷で、東方百里の黄水溝村落のもの。各々銃砲刀槍を携えている。火縄銃、槍は2間の長兵、穂先は三つがま。行程60里。夕暮れ、徳昌から兵卒2名が来て護衛。

01/05 午前6時**黄水塘**を出発。兵卒2名と徳昌の2名の4名。15里で**黄連城**にたつする。下馬して朝食。15里で**崩土坎**（7,80戸）、15里で**馬道子**（5,60戸）。5、6町で西蕃数名に出会う。八日路の東方、錦江畔の左塞の住民。辮髪でタルバン的に巻く。頭のまわりは剃髪しない。衣服は麻、苗人と等しく襟を右に合わせる。白麻で、襟のみは褐色と黒の線様のものを画く。シナ脚絆を穿く。黒羊の皮服を着るものがある。10里で**遙山橋**（百戸以上）にいたる。午後4時半、**寧遠府城**につく。知府を訪問。戸数二、三千戸。

01/06 **寧遠府**滞在。旅宿の前を通行した夷人3名の調査。白夷で、女子は大黒頭巾を被り、耳環、衣服は褐色で染めた羊毛の織物、腰巻をつける。単語の聞き取り。1 (tum)、2 (nim)、3 (som)、4 (fum lim)、5 (singum)、6 (fum)、7 (sim)、8 (lim)、9 (kum)、10 (tuj)。旅宿の前を通行した西蕃・チベット人男子3人の調査。撮影。2人が固有の風俗をなす。身長大、皮膚は褐色、顔形は長く、鼻高く、下肢は長い。衣服は襟を左右に合わせ、襟に青で十字形を続き織りにする。袖は太く長く、脚に袴様のものを膝まで穿く。羊皮の長靴をはく。二つの筒を腰につける。3人の直立写真をとる。言葉の調査。一廟宇で、雲南省の古猿（チベット民族の群派）の調査。旅舎に、寧遠府から2人の夷人通事が黒夷6名が連れてくる。直立写真を2枚撮影。

01/07 6時半出発。一行3人のほか、兵卒4名随行。15里で小廟につく。朝飯。15里で**通街樑**（3,400戸）に来た。市日にあたり、昨日撮影した白夷の男女とも会う。チベット人のラマ僧に出会う。**イヴォスー**にいたる。25里で**札州城**の城門につく。戸数一千ばかり。行程55里。知州を訪問。中に西蕃を招き入れ、衛門で撮影。その西蕃の夫婦は西方15里の抛琅の住民で、24,5才。男は辮髪で、布をまき、衣服は前で襟を合わせる。女子は頭に南京玉を繫いだもので巻き、その上を布でまく。耳朵に耳飾りをつける。袖は太く長い。襟は前で右に合わせる。

01/08 午前6時半、**札州城**を出発。兵卒4名随行。寧遠府へ帰る兵卒に託し、成都の武備学堂に送る書簡、坪井先生と拙宅に送る書簡を同府知府に依頼、発送することにする。同府から別仕立ての飛脚に昼夜兼行に成都へ郵送すると8日目に到着する。15里で**龍溪汎**（60戸）に

つく。下馬して朝飯。村内に古東林寺が建ち、咸豊年間(1851~1861)の重修碑がのこる。15里で松林汎(人家三百戸ばかり)にいたる。2人の男女が耕作みる。かれらは自ら「ⁿne」と称し、シナ人は「水田^{スイデン}」とよぶという。直立写真をとる。男子は辮髪で、シナ服を着る。女子は白布でタルバン形に巻き、襟に赤い布に銀を鏤めたカラーをつける。衣服はシナ服。10里で**滴水湾**。標高1450m、人家30戸。水田耕作をしている。5里で湖畔の**シュイワンイン**集落(3,40戸)にたつする。盧跛駐在の武官からの紅紙(手紙)をもった一兵卒が待つ。武官は夷人鎮圧として知府から派遣されている。兵卒は復命のためもどり、やがて30名の銃を肩にした兵卒を従えた武官が迎えにくる。山上に堡哨小舎があり、歓迎のための祝砲を発する。5里で堡哨小舎があり、祝砲。**シタワング**村(4,50戸)をすぎる。その15戸が水田(族)。**チェーエンブー**(70戸)にいたる。半分は水田族。午後5時**盧跛**につく。行程70里。駐在武官から招待。武官は防夷のため、3年前から駐在している。

01/09 6時出発。武官は兵卒20名を従えて随行。5里で観音閣がみえる。さらに5里で一村落(戸数10)。25里進んだところで、盧跛からの武官一行とわかる。5里で**太平塘**にいたる。菟山の官衙から派遣された武官が十数名の兵卒を従えて待つ。15里で観音閣を過ぎ、**興橋**村(人家20戸)にいたる。午前11時半、5里で**菟山**につく。撫蕃分県で、戸数一千戸以上。**深溝**で菟山からの登象營から特派された兵卒二十余名に護衛される。黒夷の**ロロファン**(10戸)村で調査。楽心汎にたつする。シナ人の村、10戸ばかり。午後4時、20里で**登象營**(百戸以上)につく。行程一百里で、黒獏猓・白獏猓を観察する。

今日通過した地方は、全く獏猓の巢窟であって、多少シナ人の居住する者もあるけれども、皆堅固に小城塞的の防備をなし、夷人の襲来に留意し、又官では随所の要地に堡哨を設け、二、三カ所に別堡を置いてこれを統轄し、極力蕃夷の蠢動に向けて備えて居る。いかに蕃族がこのあたりに出沒して、その蛮性を發揮しつつあるかがわかる〔鳥居1926:409~410〕。

01/10 午前6時15分出発。馬丁兵卒4名随行。雪道。兵卒十数名が旗を立てて待機していた。5里で**白石營**にたつする。人家なく、軍營のみ。20里で**チンパイン**。シナ村落(20戸)。石敢当がたつ。白夷の村(20余戸)で、2枚撮影。10里でシナ人の村落、**シャンピイン**(15,6戸)に達する。10里で龍潭汎(10戸、シナ人村落)、10里で**シャニヂン**。城壁内に15戸。シナ人の村で、獏猓の男女がきえている。村の門外に咸豊年間に立てた「威鎮夷服」の石刻がたつ。大吹雪のなか、13里で**草坪**にたつした。軍隊のみ駐在。15里で**小哨汎**につく。人家5,60戸の村を過ぎ、**前哨大營**(10戸)にいたる。近くに夷人の村(5,60戸)がある。**パンファイガン**の白夷村落から、5里で**白泥湾**に来る。小城壁内に25,6戸。夷人も多く来ている。**ペジワン**、**ナンチヤン**の白夷・黒夷の村を過ぎる。5里で**抄米関**(15,6戸)、につく。**ツオミクワン**村を遠望しながら、10里で**中哨把**(戸数3,400)の城村に達する。5時半、**越嵩城**にいたる。知府を訪問。行程115里。本日の調査で特記すべきは、未婚女が大黒頭巾を冠らない。白夷の風俗のなかで、7、8歳から16,7歳までの間に婦女の甲に入れ墨を施すことであった。

01/11 **越嵩城**に滞在。周囲5、6里の城壁で圍繞、戸数一千以上。午前10時衛門に行く。衛門には人質として獏猓六十余人、大人と子供とを合わせて入監してあった。もし代わり

のものが来れば在監のものは帰すということになって居るとのことである。余はその中より大人六名、小児二名、少女四名を撮影し、後に大人四名の身体を測定した〔鳥居1926：414〕。

01/12 午前7時越嶲城を出発。知府から清溪まで兵卒3名、馬夫3名をつけ、馬1匹が騎馬用として贈られる。10里で**天皇嶺**（10戸）、10里で**王家屯**（100戸以上）にいたる。15里、**獼猴**の村落を調査しつつ、**板橋河**（20戸）につく。5里で**青崗関**（50戸）、関頂（30戸）、5里で**溝東汎**（30戸）。溝東汎近辺の西蕃**ガフプセ**村落（20戸）の調査をおこなう。5里で**新場**（30戸、衛門）、5里で**利済汎**（衛門）をへて、午後4時ごろ**保安**（200戸）に到着し泊る。行程70余里。

01/13 早朝出発。白夷の村をみながら、10里で**梅子營**（2,30戸）につく。城壁で囲まれた屯營。10里で**腊関頂**（10戸、標高1630m）。**策葉坪**（40戸）、**腊梅營**（25,6戸）の城村。西蕃の**ファミマ**（17戸）。**征夷汎**（20戸、標高2150m）、**老卡汎**（10戸、標高2100m）、**新安汎**（24,5戸）、**鎮西関**。三層楼の橋を渡り、**海裳**（200戸以上）に到着。午後4時半、旅店に投宿。行程85里。経過した地方は「獼猴征服に関係しないものが無い」〔鳥居1926：422〕。

01/14 野山一面に白雪（3寸余）。シナ旅行中はじめて。午前7時出発。兵卒3名随行。山麓に「漢夷平服」の石碑。10里で**陡坡頂**（6戸、標高2050m）。20里で分水嶺（2100m）に達する。5里で**双馬槽**につく。戸数は10戸で、すべて飲食店。5里で**ヤウクン**（50戸）。5里で**五里碑**（30戸）、家は小舎掛けのみ。山上に西蕃（3戸）と白夷（10戸）の村落がみえる。10里で**平俱汎**（140戸）、衛門も設けられ、護衛の兵卒が入れかわる。10里で**観音廟**、さらに5里に**観音廟**、10里で**大灣營**（40戸、標高1450m）。下馬してナンバキビをひき餅としてもものを買って喫する。10里で**夷堡**（60戸）。10里で**八里堡**（15戸）。10里で**河南站**（100戸以上）に着き、旅店に投じる。午後5時。行程106里。

01/15 午前7時半出発。5里で**白馬堡**（5,6戸、標高950m）。10里で**晒経関**（35,6戸、標高1250m）。要害の関門。10里で**李子坪**（10戸、標高850m）、10里で**大樹堡**（600戸以上）。**大渡河**にいたる。河幅15,6町。渡し船。大渡河は四川省の大雪山から流れ、東流して峨眉山を過ぎ、岷江に合流する。2里で**ウーアイン**（6,70戸）。**富林場**の市街。城門があり、武廟・城隍廟がある。5里で**黒石河**（10戸）にいたる。5里で**藍家營**（10戸）、5里で**タチツオー**（30戸）。**龍堂營**（3,40戸）。5里で**小関子**。5里で**洪水營**（30戸）で、山上に水田がみられる。午後5時半、**唐家塘**（3,400戸）につく。宿泊。行程85里。「獼猴その他蛮夷の棲息地の分界線として、最も関係の深い大渡河（古の瀘河）の河畔」〔鳥居1926：429〕に来た。

01/16 7時半出発。**勾家營・黎家坎・甘俱**等の諸村を通過し、**クワチュペ**に来る。15里で**漢源場**（約500戸、標高750m）に達する。同地をでて、山上に四角の塔を見る。**ツアツミン、タムス、フミンツ**などの諸村を通過。**白鷄関**にいたる。**ミオベ**（標高1250m）を過ぎ、**清溪県城**に午後2時到着。宿泊。清溪県は明の黎州。周囲6、7里の城壁に囲まれる。城隍廟と仏寺（永興寺）がある。

01/17 午前7時出発。**大相嶺**に向かう。5里で**羊捲門**（十数戸）にたつする。ナンバキビの餅を売る。雪路を5里すすみ**盤脚**につく。5里上り、**草鞋坪**（標高2500m）。饅頭粉で一種

の餅をつくり、油に揚げたものを売る。標高1870mの漫坡子、5里で板房、さらに5里で大関山(1650m)にいたる。5里で木溝、5里で小関山(1260m)を過ぎ、二臺子にたつする。人家はみな草小舎。木細工の名所で、男女が轆轤を使用して製作している。「二臺子には、本溪に注ぐ支流がある。これに鉄の釣り橋が架かって居る。この橋は我が郷里の阿波の桂橋と同一である。ただ異なる所は桂と鉄の相違のある点である」〔鳥居1926:432〕。5里すすみ、鉄の釣り橋がり、渡ってサンパサに達する。5里で黄泥堡(百戸内外、標高1000m)にいたる。市中に黄泥堡汎の衙門がある。宿泊。行程60里。

01/18 午前7時出発。5里で接止堡を過ぎる。15里で安箐項につく。箐口站(約700m)、富林俱(約650m)、鹿背項(700m)、水地堡(600)、鹿骨項(600m)を通過する。四川の茶、塩、木綿等を担っている苦力に出会う。チベット方面に運ばれる。古城(600m)にいたる。土器を製作して売っているものが多い。45里で蒙経県城に達する。戸数約二千。鶴田寺を過ぎ、大屯坝にいたる。七重塔が立つ。新添站(550m)、石橋堡(550m)等の諸駅を通過し、午後5時にある村落に到着。宿泊する。行程60里。

01/19 7時半出発。5里で高橋。5里で涼関につく。5里でマーリンマンにいたる。飛龍閣附近から婦人の習俗がかわってくる。耳環がおおきくなり、頭髮の島田髷のような結い方をしている。八僅岩(標高570m)につく。紫石里に到着。55里来る。元街子、対岩をへて、夕方雅州城に到着。周囲12里、塼積城壁がめぐる。旧正月がちかいので、市況は賑やか。行程約75里。溪水に沿って至るが、溪水は大相嶺に発源する。大相嶺は、漢・夷の分界線で、「蛮界」と「漢人の界」である。峨眉山脈の前後に漢人と夷人がいる。四川省を横断する岷江こそ、漢・夷両族の区劃〔鳥居1926:437〕となっている。

01/20 (月) 午前7時雅州を出発。雅河にでる。10里で柏梓林、5里で北姚、10里で金鷄関に達する。水碾坎(標高430m)、火烧橋(430m)、名山県(約五百戸)に達する。明の石門がのこる。一枚撮影。五里口(550m)、和尚坎(620m)、新店子(約600m)、洗馬池を經由して、午後6時百丈駅に到着、宿泊。行程80里。荷物の担ぎ方にちがいがあ。大きな棒を肩に乗せて前後に荷物を担ぐ。

01/21 6時半出発。切刀坡(480m)をへて、15里で黒竹関にたつする。「武蔵野の片田舎を歩いて居るような心持ちがする」〔鳥居1926:441〕。日法舗(百戸以上)、大塘舗(百戸、標高約400m)に到着。新街舗、卧龍関にいたる。陳店子(370m)、土地坡(360m)を通過。丘上に七重の塼塔をみる。蘭橋(400戸、標高330m)、新津から7時に邛州城。戸数約八千。城隍廟を見学。旅舎。行程80里。

01/22 午前6時半出発。州の衙門は護衛のため親兵10名を派遣。18里で東嶽廟、20里で太平站、7里で坝泉水橋(300m)、楊場、界牌、天仙橋を過ぎる。太平橋(戸数五百戸)、5里で、午後4時新津県(戸数3,400)につく。県の衙門がある。宿泊。行程90里。

01/23 午前6時半、濃霧のなか新津県を出発。15里で花橋墩をすぎ。下馬して朝食。李店子(300m)、関家場、紅紹店、串頭舗、花園場を通過。餅子店、草水舗にいたる。板橋梓を経て、塔子塘につく。十三重の尖塔がたつ。双流県(戸数二千ばかり)、到流水、接待寺、順江場。金華橋をへて、七里湾、鶴橋場(一千戸以上)をすぎ。紅牌楼をへて、成都城に到着。

成都城は磚築の城壁。周囲二十二シナ里、門は四つ。明の洪武初に増築、清の康熙年間に重修。南門から入城。城内の四川武備学堂に、松浦寛威氏が招聘されて教務をとる。宿舎に泊る。行程95里。

「余は明治三十七年一月二十三日、西南シナの人種調査を終わって、四川省の首府成都に到着した」〔鳥居1926：446〕。「旧正月に近い歳末で、一月二十六日が大晦日、翌日二十七日が正月の元旦である」〔鳥居1926：447〕。西に満州城がある。満州兵が駐屯し、満州將軍が四川全省を鎮撫。『漢書』地理志に南方は貴州・雲南等を交易し、西方はチベット方面の牛馬を牧する蕃民と往来する。シナ人の風俗習慣について調査。『華陽國志』などの書物を買求めた。25日に、詩人杜子美の遺跡の草堂、浣花祠、蜀の後主劉玄德を祀った昭烈皇帝廟、および諸葛孔明を祀った熙相祠堂など巡覧する。昭烈皇帝と熙相諸葛孔明を合祀する武侯祠は錦官城の西八シナ里のところにある。昭烈廟の左に孔明の銅鼓という物が二個置かれている。

01/23～01/29 成都ですごす。

01/30 「余は憧憬の蜀の都、成都城を出発することとなった」。「用意の旅費はほとんど使い果たしてしまい、これから舟に乗って重慶まで下るにしても、相当の費用を要するので困って居ると、折よく重慶の領事徳丸氏が成都に来て居って、用を終えて帰任するために、舟を一艘雇い切りにするから、便乗してはどうかという親切的な勧めがあった」〔鳥居1926：452〕。錦江に停泊中の舟にのる。

01/31 早朝出発。14町で風神・雷神の廟がみえる。40里下って**鐘和場**に到着し、停泊する。

02/01 早朝出航。**クーサンガイ**にくる。穴居（蛮子洞）をみる。

02/02 早朝出航。午後4時ごろ47里の**河口**（戸数三百余）で停泊。

02/03 早朝出航。眉州城を右にのぞみながらすすむ。午後6時半ごろ、**漢陽壩**に到着する。航程150里。

02/04 13,4町下った**ケーチアーツ**に蛮子洞がある。午後2時に**嘉定**に到着。錦江と大渡河、雅河の合流地点。丁字河と称する。戸数五千以上。左岸に東坡廟がある。蛮子洞は穴居でなく、漢代の墓とみる。嘉定大仏像（樂山大仏）が見学せず。午後7時ごろ**竹根灘**に着き、停泊する。行程110里。

02/05 岷江を下り、**挿魚灘**を通過。12,3の蛮子洞を見る。航程約200里。枯柏場に停泊。

02/06 午後2時**叙州**に到着。蛮子洞多く存在する。上陸して**叙州城**を散歩。州の衙門から『叙州府志』を借用し、必要資料を抜粋する。航程150里。雲南省路居村でもらった子犬が船中で亡くなる。

02/07 金沙江と岷江と合流して揚子江となる。240里下って**大渡口**につく。停泊。

02/08 早朝出発し、12時ごろ**瀘州**につく。航程70里。日本人の教員がいる。江戸川大尉が滞在、置き手紙をして雲南方面へ旅立つ。貴州省を旅行中、重慶で再会の約束をした。**新路口**につき、停泊。

02/09 早朝出航。230里で**新沙場**に到着。舟子ら2時間ばかり休憩して夜航する。

02/10 午前2時ごろ**重慶**に到着する。徳丸領事等とわかれて、日本領事館を訪問。

02/11 **重慶**に滞在。「この日は紀元節であるから、領事館で式を挙げられ、館員一同およ

び居陞留民も皆これに参加し、余も亦末席に列した。…卓上講話を望まれ、余は「世界人種談」を試みた」〔鳥居1926：463〕。フオンサチの蛮子洞を見学。日本の横穴と比較する。これまで伴って来た貴州省貴陽以来の料理人の王福、苦力老王も此処で暇をやる」〔鳥居1926：463〕。

02/12 早朝重慶を出発。30里で**唐家沱**につく。税関船で検査をうける。平善覇に設置され、宜昌と重慶間の船舶を検査する。重慶からはシナ船に乗る。米人所有の運送船で、羊毛を積む。船員は30余人で櫓こぎ。210里で**石家渡**に到着、停泊。

02/13 早朝出航。90里で**涪州**にいたる。6, 7万。高野鎮で停泊。航程290里。

02/14 午前8時ごろ忠州城を左岸にのぞむ。75里で**石宝寨**にいたる。小狐灘で停泊する。航程340里。

02/15 早朝発。船は激流のなかを漕いでいく。雲陽県を通過。午後7時ごろ東洋子に到着。停泊。航程210里。

02/16 航程25里で**夔州城**にいたる。税関検査。船着き場に妓船。

02/17 130里で**巫山**にいたる。90里で巫山十二峰を望む所にくる。105里で湖北省の**万流**。65里で巴東県。数層の木塔が見える。さらに左岸に七層塔。牛口灘に到着、停泊。航程300里。

02/18 **老関廟**をへて**白洞子**にいたり、停泊。航程165里。

02/19 黄牛峡をすぎ、**南津関**につく。15里で**宜昌**。

02/20 **宜昌**に滞在。

02/21 午後4時、「洞庭」号にのる。経営者は太沽洋行。通事とともに上等室に乗る。

02/22 午前4時出発。午後1時**沙市**に到着。

02/23 午後4時ごろ**岳州**につく。税関の前に停泊。

02/24 午前5時出発。午後4時**漢口**に到着。上陸して、昨年宿泊した旅館高陞号にいたり宿泊。領事館を訪問、館員不在で、午後11時ごろ帰宿。

02/25 12時乗船。大阪商船会社の大貞丸。領事代理が来船、注文していた『湖南圖説』が買い求めて送り届けられる。午後2時出発。午後10時停泊。領事館から書簡などを受け取る。

02/26 早朝出発。午後3時、**九江**に到着。終夜航行。

02/27 午後、**蕪湖**で停船。

02/28 夜、**上海**に着き、**豊陽館**に投宿。

03/01 **上海**に滞在。

03/02 **上海**に滞在（6日まで）。

昨年から今日までの調査の或る目的を達したから、遂に余は日本郵船会社の西京丸に乗じ七日上海を出発し、我が日本に向かって帰国の途について、十三日に東京に到着した。かくして西南シナ行はここに無事終了したのである〔鳥居1926：485-486〕。

03/13 東京に到着。

Ⅱ 鳥居龍蔵の西南中国踏査と現在

2008年2月15日～2月29日、鳥居龍蔵の西南中国調査の跡をたどった。

鳥居龍蔵は、1902（明治35）7月30日、横浜を出港し、8月6日に上海をへて、長江をさかのぼり、同15日漢口（湖北省武漢）に着いた。貴州へは湖北から四川省重慶をへる北道でなく、長江から洞庭湖を渡り、岳陽へ、そこから沅江（長江支流）を上る湖南路をとった。漢口からは、「麻陽船」とよばれる湖南麻陽県人の貨物旅客運搬船に乗る。途中常德府のはからいで「砲艦」（艦長と水夫12人）に護衛されている。「艦の形は純然たる演劇気分の三国志式」で、海賊から守護するという。上流では岩礁のため船曳人夫も雇った。10月1日黔陽（湖南省）に到着した。水行2ヶ月であった。翌2日から陸行にはいる。貴州鎮遠府の樓閣石橋、貴定、貴陽南方の青岩や恵水八蕃、安順、朗岱の苗族・布依族の寨（村）、黄果樹の滝、雲南省板橋の獼猴（彝）族、雲南昆明から四川省成都へ、金沙江をさかのぼり、成都にいたる。途中、西昌（寧遠）で彝族やチベット族の村々をたずね、人々と出会い、調査した。成都から再び、船で重慶をへて、02月24日漢口までもどる。02月28日上海に、03月13日横浜に着いた。じつに9ヶ月余の調査行であった。

わたしの旅は、飛行機と列車・バスを利用した。2008年01月10日以降、大寒波が湖南、貴州、四川、広東省をおそった。02月07日の春節（旧正月）の帰省に影響。冰雪害対策、農作物、家屋の倒壊、停電、交通マヒなどの被害（『朝日新聞』2008.2.6）が報じられた。

2008/02/15 関空10:00、上海浦東空港に11:30（現地時間）に着く。さらに浦東空港15:50の予定が30分ほど遅れで、18:00ごろ武漢天河空港に着陸。18:25武漢大学珞珈山荘に到着。武漢大学歴史学院の朱海さんが出迎え。武漢大学と本学（徳島大学）は国際交流協定をむすび、教員、学生の交流が活発である。わたしも2000年4月、在外研究で1ヶ月滞在した。大学周辺もふくめ、市街地の発展はすさまじい。大型の百貨店などが立ち並ぶ。漢口の武漢客運港は閉鎖され、南京や上海への航路は廃止されていた。旧租界地は繁華街として生まれかわっていた。

02/16 午前に湖北省博物館に行く。なつかしの東湖に沿って。今年から全国の省博物館は無料（免費）となる。入館料の高い博物館もあったが、無料化されている。経営をよぎなくさされている日本の博物館をうれう。市内の電腦街で、忘れてきて、さがしてもらっていたビデオの充電器（中国製）をもとめる。新製品のビデオにかかわらず、何でもそろっている。

武昌站から17:18発の懷化行の列車（軟臥）に乗る。これも依頼していた切符である。中国では始発駅いがいで、購入するのは至難の業だ。わかっていたが、その後苦労がまっていた。18:41赤壁站を通過。22:00ごろ長沙。2000年04月、馬王堆墓や走馬楼の木簡などをみたことをおもいだす。そのとき長沙から空路、雲南省昆明まで飛んだ。陸路での旅がようやく実現した。

02/17 懷化站には予定どおり6時前に着く。早朝、ちょうど駅前で客待ちをしていた洪江

市（黔陽）行のバスに乗った。沅江支流の舞水に並行する道路を南下する。沅江と合流する黔城を江沿いに東に向かい、洪江市に至る。7時すぎに日が明けてくる。途中「東湖」といわれるダム湖をすぎる。約1時間30分でつく。

鳥居は洪江司の手前で、砂湾（沙湾）の上流付近で上陸して徒歩で「山を越え谷を渡り、又は乾燥した水田の稲の切り株が行儀よく並ぶ処などを通過」し、洪江司の対岸の渡船場にたっしている。渡船して洪江司に入る。洪江司は商業が盛んで、「湖南・貴州間に於ける物資聚散中央市場」で「商船や旅客の往来は最も頻繁で、市街はいつも繁盛を極める」〔鳥居1926：247〕。砲艦艦長らに護衛され、洪江司の役所を訪問する。

黔陽（洪江市）は鳥居が船を下り、「陸行」をはじめた地だ。洪江市（洪江司）は明清時代から栄えた商城都市で、石畳の道路や会館、商館、錢庄、煙館、寺院などの建物がよくのこる。

余は明日此处に上陸して貴州省に陸行するため人夫の傭入れ方を本司に交渉したけれども、本司は切にその無謀を戒め、又たとえ人夫を傭うとしても、彼らは途中にいかなる暴行にでるやも凶られぬ、その責任は本司に於いて引き受けられないということであった〔鳥居1926：248〕。

けっきょく船で黔州（黔城）まで行くことになる。本司の勧めでもう一日滞在した。洪江司を離れるとき、岸辺の丘陵に「各省の公館が処々に建てられている」のをみている。城市の全貌がみわたせたにちがいない。翌日黔陽に到着している。

ここで通事のための山駕籠をつくり、3人の人夫が担いだ。途中から便乗した楊氏（雲南知県の候補という）とその従者をふくめ、7人からなる。わたしは来た道の黔城をふたたび通り、懐化にもどった。懐化市内の賓館に泊まる。

02/18 懐化（沅州）から高速バスで貴州省凱里にはいった。貴陽までの長距離バスは高速道路経由となっていて、一般道路経由のバスはあまりにも時間がかかるようである。

芷江侗族自治県の丘陵、小谷がひろがる。段々の棚田、谷水田がみえる。区画整理された水田もめにつく。新昇から玉屏（11:10）間は貴州・湖南の省境を走る。玉屏から岑鞏間で貴州省の黔东南苗族侗族自治州にはいる。玉屏を過ぎたころから、苗族の女性の衣装が目につく。

貴州との省境で車中から畑作業する苗族をみた。高速道路の眼下にして、苗族などの集落を通りすぎる。高速道路は青溪から三穗、台江をへて凱里にいたる南路に沿う。鳥居は青溪から鎮遠、施秉、黄平、重安、貴定、貴陽への道をとった。懐化から凱里まで3～4時間だ。凱里東インターから市内まで、苗族・侗族の集落がつづく。

凱里ではまず黔东南苗族侗族自治州民族博物館に行く。凱里を中心に貴州省内の諸民族の展示がなされている。苗族と侗族のコーナーにわけられ、写真パネルとともに民族衣装、装身具が展示されている。鎮遠や黄平等の写真から鳥居の踏査記をおもいおこす。

02/19 郎徳上寨（村）に行く。凱里の南10数km、雷山への道に所在。苗寨で、「全国重点文物保护单位」に指定されている。南花苗寨や朗徳寨を過ぎる。100戸以上の建物が山の傾斜地につくられている。高床式倉庫、3×4間の瓦葺きの礎石建物が建築中で、柱の骨組みがわかる。村の水くみ場、池、祭りの広場、石畳の道などを村内をめぐる。村の入り口の楼閣橋（花橋）も建設中。2層の楼閣。観光化だれ、村内に土産物店があった。水田の稲の切り株は太い。

中学生らと朗徳寨まで歩く。朗徳上寨の苗踊りは、帰国後、国立民族学博物館で開催された「深奥の中国」の特別展（2008.3.13～6.3）のビデオで流れていた。

バスに乗って、来た道すがらにあった南花苗寨に立ち寄る。凱里市街からもっとも近い苗寨という。そのあと舟溪曼洞苗寨に行く。凱里のバス乗り場から舟溪、曼洞とタクシーを乗り継いで、山谷をこえてたどりつく。曼洞では旧暦正月十三日（二月十九日にあたる）の迎春祭りの舞踊がくりひろげられていた。単調なリズムで、同じ所作がたんたんとくりかわされる。

青曼郷曼洞村では正月十二、十三日に春節蘆笙会がひらかれる。周囲の苗寨から「五千人」が集まり、跳蘆笙、踩銅鼓、賽馬、闘牛がおこなわれる〔黔东南苗族侗族自治州地方志編纂委員会編2000〕。その日は跳蘆笙のみで、銅鼓は用いられていなかった。年若い男女のみが踊る。

凱里舟溪地区では石清村、大中村、蘆笙堂で正月の蘆笙会がひらかれている。舟溪春節蘆笙会は毎年農曆正月十六日から二十日に約四、五万人の規模で举行される。凱里、丹寨、麻江、雷山の四県、黄平、台江、都勻などの族群が参集する。正月十六日正午、舟溪虎城坡の呉性寨の老人が蘆笙を背に、美酒などをたずさえ、舟溪に来て、「甘囊香」蘆笙場に堂をおこす。十七日跳蘆笙、賽馬、十八日に闘牛、賽蘆笙、十九日賽馬、闘牛と賽蘆笙、決賽、二十日堂を封じ、跳蘆笙は終わる。青年男女は最後の一日を「遊方」をはじめ。舟溪蘆笙会は「堂」と称する自然村の青年女子が一単位としている。歴史的には舟溪蘆笙会の賽馬は男子のみが参加していたが、近年、少女も賽場にくる〔黔东南苗族侗族編纂委2000〕。

曼洞の山から下った平野部に位置する鴨塘翁牙寨では老若男女が銅鼓を打ち鳴らす踊り（敲銅鼓）と跳蘆笙をみた。鴨塘寨では正月二卯に十里四方から五千人があつまり、跳蘆笙、闘牛、跑馬、敲銅鼓がとりおこなわれるという。

02/20 凱里から貴陽に。9:30発の高速バス、貴州高原を走り、約2時間30分。山の尾根頂部を走る感がある。雲貴高原なのだ。貴陽汽車站に着いたあと、貴州省博物館に行く。

博物館では運よく、「夜郎国」特別展が開催されていた。赫章可樂遺跡（黔西南布依族苗族自治州）、普安銅鼓山遺跡（同自治州）など出土の青銅器（劍・矛・鏃・鏡・鋤、銅鼓、鉄柄銅鏃）、鉄器（劍・鏃頭刀子・矛・鋏）、金銅製品、鑄型など戦国～漢の遺物が展示されていた。雲南の滇国、ベトナムの交趾国、楽浪郡、倭などとの比較研究は興味ある研究課題である。帰国後、『赫章可樂発掘調査報告書』を入手した。常設展示として貴州省内の「少数民族」の写真パネル、民俗資料が陳列されている。〈苗族郷村飯庄〉で黄虎・雜炊などの郷土料理を味わう。翌日の行程でまよう。鳥居が調査した青岩、恵水（八蕃）にいくべきかどうか。断念して安順に向かうことにする。

02/21 9時すぎのバスで、霧のなかを安順へ進む。11時30分到着。昆明までのバスの運行状況を確認する。昼間はなく、17時発の夜行便があるのみ。安順に行く。切符をもとめての行列。翌日（23日）23:00の軟臥がとれる。雲南への省境はバスで越えたかったがやむをえない。高速バスは安順から関嶺までは開通している。雲南省の富源までは未開通。貴州省内の開発状況、進んでいるとはいえない。凱里の交通網整備についてのテレビのコマーシャル（バス内）は近代都市をおもわせるほどにすさまじい。小雨のなか火車站から〈民族飯店〉に行く。

午後、13:40発の黄果樹行のバスに乗る。1時間30分で黄果樹瀑布公園前に着く。見学は2

時間かかるときき急ぐ。滝の近くまで行き、16:00ごろ公園入り口までもどる。安順行のバスはなし。鎮寧行の最終バスにかろうじて間に合う。鎮寧に降り立ったことはさいわい、街の様子がわかる。鳥居はここで一泊している。春節明けの少ない便数のなか、安順までもどる。

02/22 安順南駅から9:00のバスで天龍鎮に行く。約40分。停留所から歩いて15~20分で天龍屯堡にいたる。山の南麓に村落が形成されている。明代につくられた屯田兵の村落である。城牆、城門、民居、街巷、軍事教練所、学堂などの施設がのこる。

鳥居は貴陽から清鎮県で一泊、安平で一泊して、飯籠塘にいたる。そこが屯堡附近のようである。「戸数五、六十戸ばかりのシナ人の一小市街」で苗族と雑居している。鳳頭鷄フオンデツチと称する民、明代の苗族征伐に屯田兵として派遣、移住した漢族の末裔がいることを記す。明代における苗族征伐、苗族の抵抗、派遣された兵の境遇など支配、被支配側の両面からみている。鳥居は「蛮族」という言葉をつかうが、清朝末期の政治情勢と無関係でない。

天龍鎮の屯堡人は「頭の後部で円形の髻を結び、結び目を玉か銀の笄でとめる。その上から白色のターバンを巻く。上着の色は青色が主体で、その丈が長く踵の近くまでである。襟は身体の向かって右側で会わせる。さらに黒いエブロンを着け、腰帯をその上から巻き、身体の後ろで腰帯を結ぶ」[塚田誠之2001]。安平の鳳頭鷄も右衽[伊東忠太1990]である。朗岱の「里民子」も右衽である。安順や貴定の花苗も右衽であった。黔东南苗族侗族自治州の苗族の女子は右衽上衣か円領であるが、男子は左衽上衣と対襟上衣、左衽長衫で、対襟上衣が一般的である[黔东南編纂委2000]。服飾の変容上、衽の形態について注目される。

天龍鎮から旧道を走るマイクロバスに乗り、安順に向かう。七眼橋鎮など鳥居が通ったであろう道である。安順から再び黄果树瀑布行のバスにのり、その手前の石頭寨(鎮寧布依族苗族自治州)に行く。布依族の村である。その日、春節の祭りがあり、村々から人々が集ってきていた。建物はすべて片岩を用いた石造り。村内に祭壇が設けられて、村の内外に円形切石積みの墓がつくられている。女子の服装は右衽の長衫に長裙に青色の太い帯をまく。襟口や袖に蠟纈染めによる紋様をほどこす。老人はこぞって青色の無袖の上衣を着ける。寨の周辺は谷平野がひろがり、耕地面積はひろい。一面は菜の花畑であった。水車による灌漑がいまもおこなわれている。民族飯店のロビーで23時34分発の昆明行の列車を待つ。

02/23 7時ごろ雲南の曲靖で目が覚める。9時すぎに昆明站に着く。同室の若い家族は昆明の西の安寧の人。鳥居が調査した地点だ。昆明からミャンマーとの国境、瑞麗へ行く予定にしていたが、バスで16時間、大理から10時間ときき、断念し麗江に行くことにする。それでも8時間。寝台バスに乗る(11:30発)。はじめてのことだ。ミャンマーとの国境の山並みを見ることにした。昆明から高速バスで大理(約5時間)、16:25大理インターをすぎる。大理から麗江まで一般道路で3時間を要した。途中で、白族の村々が点在する。

02/24 08:15賓館をでて麗江古城(世界遺産)の見学。昨夜は歓楽街と化していた。土産物店がつづく。10:10発のバスで昆明にもどる。19時ごろ到着。昆明站で1時間ほど並んで、翌日の成都行の切符を買う。2000年に滞在した雲南大学賓館で宿泊。

02/25 午前中、雲南大学博物館は工事のため、閉館。昆明から12時23分発の列車で、金沙江を北上し、成都に向かう。鳥居の通った百年前の道に沿い、鉄道が敷設されている。16:1

8沅謀站をすぎる。鳥居は武帝から姜駅に行くが、この元謀站の東側を通りすぎたはずだ。宿泊もしている。列車は龍川江に沿って北上する。19:30徳昌附近、20:30寧遠（西昌）を通過。

02/26 成都06:30に着く。永陵博物館、王建墓、金沙博物館をめぐる。

02/27 武侯祠博物館、青洋宮をまわって、成都站到。14:39発の武昌行に乗る。

02/28 朝8時すぎに到着。武漢市博物館に行く。武漢大学の凍国棟さん、徳島大学に留学中の魏斌さんに会う。

02/29 午前中に再度湖北省博物館に行く。武漢138号墓の十二支坐像などを観察する。東湖ではこの寒中に泳ぐ老人たちがいた。13:30発の便で上海、18:00の関空行に乗り、21:00関空に到着。15日間の鳥居龍蔵踏査行の旅をおえる。

鳥居龍蔵は踏査型、探検型の調査をおこなった〔江上波夫1976、中茵英助1995、田畑久夫1997〕。1日20～30kmを、朝7時ごろから夕方まで、乗馬による踏査であった。同行者は通事（通訳）と人夫2～3人。ところどころで数時間から数日、滞在しながら、言語、風俗、集落調査をおこなった。その記述は、陳寿編纂の『三国志』魏書東夷伝を彷彿させる。赤壁の戦いの地を船でとおった。古道もだどりながら進んだ。今日は国道がとおり、高速道路もつくられている。急激な人口増により、沿道の村は変貌している。貴州高原は平坦で、奇岩・鳥帽子形の山がつつく、山頂近くまで開墾され、貴州の風景をかもしだす。

貴州・雲南の50余枚の乾板写真。黄才貴『ガラス版に映し出された文化—鳥居龍蔵博士の貴州人類学の研究』（貴州民族出版社、2000年）は貴州最初の民族写真と評価している。黄才貴さんは1998年2月に鳥居記念博物館を訪れている。

鳥居の民族学的調査はなによりも先駆けであった。1907年の『苗族調査報告書』、1926年の『人類学上より見たる西南支那』は1902～1903年の諸民族の記録として基本文献だ。後者の本の末尾に福建・広東・広西などからインドネシアにかけての調査の必要性を説き、「未だ暗黒界裡にある西南蛮夷」に光明をあてたいという。しかしながらその後、台湾や西南中国から蒙古・朝鮮・樺太・シベリヤ・中国東北へ調査をすすめた。鳥居の主眼、問題意識はアジア全域にひろがってゆく。未知の世界への探検であった。そして晩年の10年は遼の研究についやした。

余はなお調べ残りの福建・広東・広西等から印度支那等の調査も試みて見たい考えである。余は以上の苗知から帰京して直ちにこれら地方に赴く考えであったが、ある人に防止せられて今日まで経過してきたのである。余はなおこれらの地方を調査旅行して見たい。そして未だ暗黒界裡にある西南蛮夷に就いていささかでも光明に導きたい〔鳥居1926：521〕。

余はこの調査・旅行に就いて、余の通事はなかなかよく勉強し、助手をしてくれた。彼は実に稀に見る人物で、ここにこれを賞賛したい。また湖南・貴州・雲南・四川各省のシナ官憲はよく余の途中の保護や調査に就いて心から絶対の便利を何くれと与えられ……余の旅行・調査の無事に出来たのは、少なくともこれらシナ官私人の賜であるといつてよい。今や多くの金銭をもって日・支文化事業をせんと我が当路者は奔走して居るようであるが、余の西南シナの調査は物質的なものでなく、全く精神的に日・支學術事業をなしたのある。我が当路者は願わくばこれを一参考資料とせらるれば幸いである〔鳥居1926：521〕。

Ⅲ 黒龍江（アムール）・大興安嶺

－1919年6月8日～1919年12月13日－

1919（大正8）年6月8日～12月13日（鳥居龍蔵1922『北満州及び東部西伯利亚調査報告』『朝鮮総督府古蹟調査特別報告』2、大正11年3月、全集8；261～280）〔鳥居龍蔵1924：209～258〕、鳥居龍蔵1924『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』大正13年7月、岡書院、全集8；1～258）

朝鮮総督府の調査事業として、大興安嶺から黒龍江流域、東部シベリヤを踏査した。鳥居の問題意識は序文に示されている。

東部シベリヤは一方朝鮮に於て我が日本と接壤し、一方一衣帯水の日本海を隔てて我が本州、北海道、樺太等を相望み、地域最も接近せるを以て、政治上、経済上其の他各般の方面に於て、彼我の關係最も密接なものあり。

欧州大戦の爲、ロシア帝国の瓦解、過激派の勃興等種々の原因に由りて、シベリヤの情勢は大いに曩日と趣を異にし、殊に我が政府がチョックスロヴァック兵の援助並びに東部シベリヤの治安維持の目的を以て出兵するに及び、該方面の要地は概ね我が陸海軍隊の駐屯する所となりて、頗る我が邦人の旅行に便宜を得るに至れり。苟くも我が邦人にして此の地方に事を為さんと欲せば、実に逸すべからず絶好の機会にして、正にこれ空前にして或いは絶後なるやも知るべからず。

東部シベリヤ旅行の目的は、人類学、考古学等の各方面より該地方の實際を調査することにあるにありて、予め五ヶの条件に依りて之を逐行せんこと期せり。即ち第一は其の土地を實際に踏査したきこと、第二は博物館に蒐集せる標本に就きて精しく調査したきこと、第三は図書館に就きて該地方に関する図書を調査したきこと、第四は成るべく学会及び学者を訪問して知識を交換し、且つ將來の聯絡を図りたきこと、第五は該地方に関する図書を購求したきこと、此の五条件は余が希望の主たる点なりしなり〔鳥居1922；261〕。

1919/06/08 東京を出発。

06/11 敦賀港から汽船（御用船台中丸）でウラジオストックに向けて出港。

06/13 ウラジオストックに到着。6月31日まで滞在。東洋学院訪問、博物館で調査。学者との会談。船でアムールスキー湾のヤンコフスキー半島に渡り、貝塚調査。ウラジオストックにもどる。

07/01 ウスリー鉄道で、アムール本流に向かう予定であったが、「過激派ウスリー線を脅かして線路を破壊する等の変があり」〔鳥居1922：262〕。日本軍司令部・高柳参謀長、（頭本衆議院議員）に同行して、汽車でオムスクに向かう。ウラジオから東清鉄道で北満州（07/02 早朝吉林省穆林河上流、牡丹江流域）に入り、哈爾濱（07/03、0：30）、満州里等を経過して

ザバイカル州に転じ、6日チタに到着。

07/06 チタで、セメイフ將軍と交渉し、我が駐屯師団司令部及び特別機関等を訪れる。

07/07 汽車で、ウエルフネウジンスクからバイカル湖に沿って、9日イルクーツクに到着。博物館ではエニセイ河上流の遺物、イルクーツク県、ザバイカル州などの現住せる土民の風俗習慣に関する諸品が陳列されていた。

07/12 イルクーツクを出発する。

07/14 チタに帰着。高柳一行はトムスクに向かう。チタはコサック軍団本部（セメノフ將軍）の所在地。プリヤート族の調査。

07/17 チタを出発。オーノン河の鉄橋を渡り、東清線で南走する。ダウリヤ駅下車。内蒙古人・プリヤート蒙古人・ダウリヤ人などの生体測定。

満州里は「ロシア人、シナ人の土入多く、蒙古人も亦來集しつゝあり。商業上將來注目すべき要地なり」。さらに海拉爾に往く。この地はシベリヤ、満州、蒙古の三方面に於ける各民族の集合場で、バラカ蒙古、ソロン人、ダウル人、附近にオロチョン人が居住するという。清朝に衙門を設け、満人の官吏を常に駐させ、近時海拉爾附近に呼倫貝爾政庁を設け、「シナ政府の手を離れて自立独立の国をなしたり」。

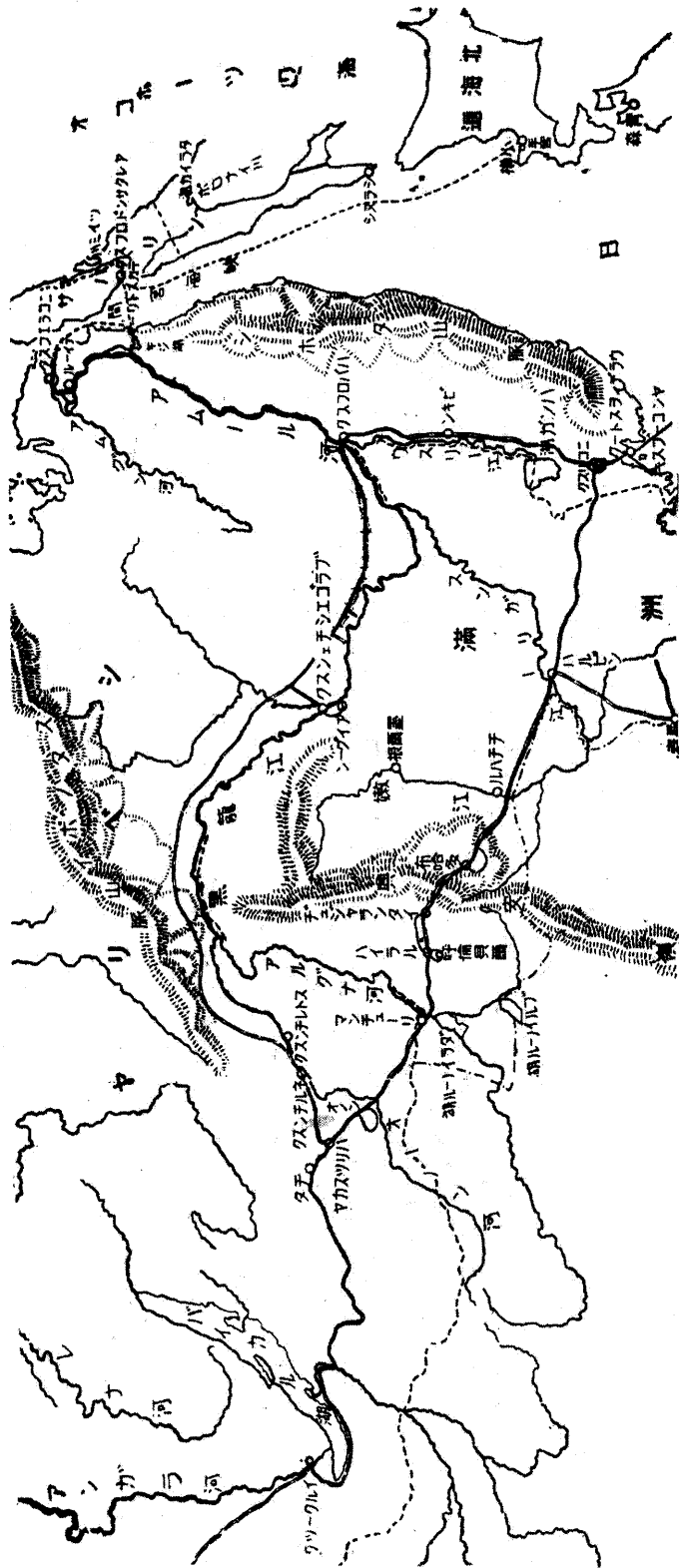
此の独立には、背後にロシア操縦の手潜みしが如きも、兎に角シナより独立したるが事実なり。而して政庁に属する民族は、ダウル人、ソロン人、バラカ人、オロチョン人其の他なほ種々あり。

人口一万人余を算す。而して政庁は独立権を以て紙幣を発行し、布令布達をなし、租税の徴収をも執行す。在留のシナ商人も、甘んじて租税を納附するの狀態なり。興安嶺の西、海拉爾を中心とせる一郭に於て、斯かる政庁の存在することは頗る注意すべきものとす。而して政庁を組織する人々は、固よりシナ人に非ず、又ロシア人に非ず、一種特別なる民族の結合に依るもの、亦興味ある事実と謂ふべし〔鳥居龍藏1922；265〕。

この「極東共和国」は日本軍のシベリヤ撤兵の20日後にソビエトロシアに吸収され、滅びた。極東共和国は1920年11月に日本軍の支援したセミョーフ軍がソビエテ・ロシアがチタから撤退した後を襲って、クラスノチョコフを首班として成立した。これは、バイカル湖以東の日本軍とソビエト・ロシアとの直接対決を避ける緩衝国家として、ボリシェヴィキが巧みに考えついた側面が強い〔山内昌之1999；50〕。

ソロン人などの調査を終え、再び海拉爾に帰り、汽車で興安嶺に向い、布哈多で下車。オロチョンをもとめて三日間山中を「彷徨」する。「彼等の一人にも逢うふことが能はざりき」であった。しかしオロチョンのキャンプ地を発見している。

彼等の居住せし家は各所に発見せられたり。其の構造を見るに、一本の丸太を棟として、之に支え木をなし、其の上に萱の類を蔽ひしものにして、極めて粗造なる小屋なり。而して焚火をなせし跡、或いは石を立てゝ籠となせし跡を存す。余は小屋の附近より彼等が靴の中に入るゝウラ草の残り物及び樺の皮等を收拾せり。此の付記のオロチョンは、夏期黒龍江の本流地方に往き、冬季に及んで此の山中の小屋に帰り、それより野獸を獵するを以て例となす。彼等が当時不在なりしはこれが為なり〔鳥居1922；266〕。



自大正八年至昭和三年著者東部シベリヤ及び北樺太調査旅行地圖
 ———— 大正八年東部シベリヤ及北滿洲調査
 大正十年北樺太及第二回黒龍江調査
 ~~~~~ 昭和三年東部シベリヤ調査

図7 東部シベリヤ・樺太調査ルート (鳥居龍藏 1922)

山中で石器時代の遺跡を確認し、「興安嶺一帯に亘りて昔より人の居住せしことあるを考ふるに足るなり」〔鳥居1922 ; 266〕という。

興安嶺の調査のあと、嫩江に沿って南下し、**齊齊哈爾**に至る。満州人とダウル人の調査をおこなっている。齊齊哈爾から嫩江を下り、伯都訥を経て哈爾濱に行く予定であったが、旱天のため、嫩江の水量が減ったため、汽車で哈爾濱に向かった。

08/06 **哈爾濱**に到着。

08/07~08/10 哈爾濱。鉄道従業員のストライキ。コレラ病が流行。多くの図書と研究材料品を購入。「北満州の調査は之を以て一段落」ついたという。

08/11 **哈爾濱**から三たびチタに向かう。

08/13 **満州里**駅に下車して一泊。

08/14 **ブリヤート**を経由。

08/15 **チタ**に到着。「此の行堀井中尉の同伴せられたるを感謝する」。チタ附近の調査。チタ博物館にブリヤート、オロチョン等の民俗資料、オーノン河流域の発掘採集資料。「本館長は元三月党なる国事犯者にして、流罪として此の地に配せられたるなり」。

08/19 **チタ**を出発。ブリヤートの部落の探検。「一行は第三師団の鈴江大尉、余の従卒、及びセメノフ將軍の好意を以て派遣せられたる嚮導者コサック兵との四人なり」。**マゴアツイ**駅に至る。停車場内で雑臥。

08/20 **アギンスコエ**に着く。ブリヤート人のほか、少数のロシア人とブリヤートの雑種。ここで宿泊する。

08/21 オーノン河支流アガ河流域において、ブリヤートの調査。アガ河でクルガンを発見。

此の附近の墳墓の形式は、長方形の塚を設け、石を柱の如くに立てて其の四周を囲めり。而して此の墓は多数群をなして存在するのを常とす。此等は蒙古人が未だ此の地に入り來らざる以前に、トルコ民族の遺せるものなり。此の附近に蒙古人の入り來れるは元朝の頃にして、隋・唐の頃は全く突厥民族の占居せる所とす。故に此等の墓は、当時突厥民族の遺せるものと見るべきなり。此の処より出づる遺物に、鉄器、銅器其の他種々あり〔鳥居1922 ; 270〕。

**オーロンナヤ**駅から汽車で、**カルイムスカヤ**駅に着く。東清線と黒龍線が接合する所。ネルチンスクは其のやや下流にある。

カルイムスカヤから黒龍線に転乗して、**スレーテンスク**に到着する。シルカ河沿岸にあり、アムール汽船が発着する。水路の要衝地で、人口一万人。シルカ河は幅員200mで水量増加する。渡船場がある。数日滞在して、石器時代遺跡の調査。

09/01 **アムール川**を下る。外輪蒸気船（薪燃料）（アドミラルマカロフ号）。汽船泊。

09/02 **アルグン河**の合流点にたつする。合流後、黒龍江の水量が増し、興安嶺の山脚を流れる。

09/06 **ブラゴウェシチェンスク**に到着し、上陸する。スレーテンスクから船運5日。ブラゴウェシチェンスクは露領黒龍州の首府。ゼーヤの金鉱に近い商業都市。博物館にダウル族の土俗品、ヤプロノイ山脈の北方のヤクート族の土俗品が蒐集されている。対岸は愛琿。戸数約



ヤクート州居住ツングース人



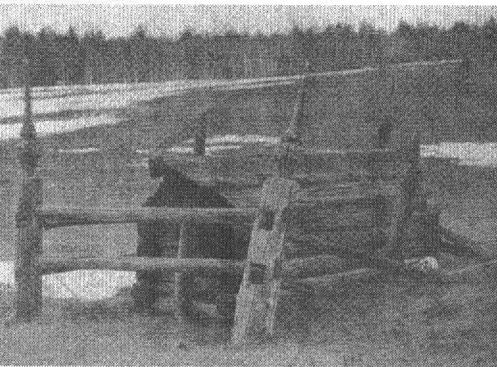
西比利亜ヤクート州に於けるヤクート人



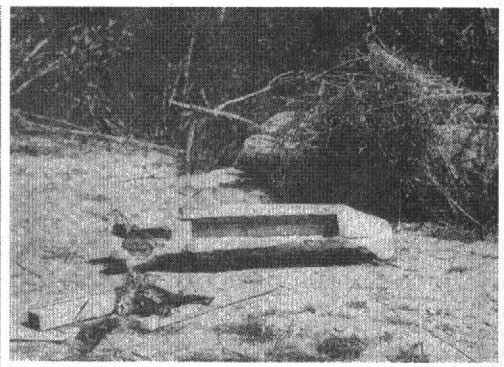
ヤクート人の風俗を示したるものなり



ツングース人の巫人



ヤクート人の墳墓なり



ヤクート人の死者を葬る木棺と其のまつる副葬品なり

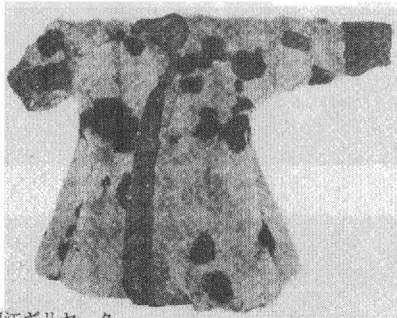
図8 黒龍江・アムール・大興安嶺〔鳥居龍蔵1922〕



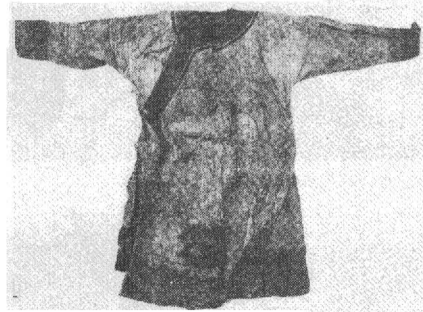


黒龍江ギリヤーク

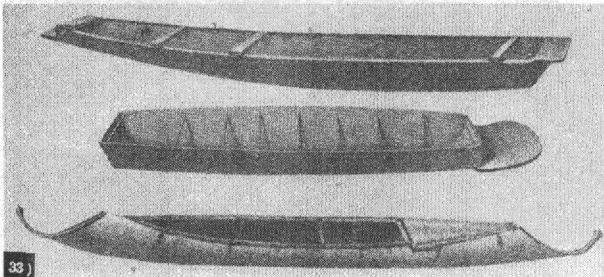
シャーマン



黒龍江ギリヤーク



黒龍江ゴリド



33)

黒龍江ギリヤーク



(10)

黒龍江ゴリド

図9 黒龍江のギリヤーク・ゴリド〔鳥居龍蔵 1922〕





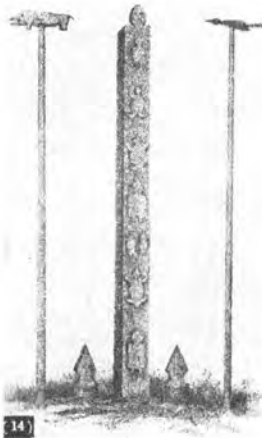
(21)

松花江流域のゴリド人のシャーマン



(20)

松花江流域のゴリド人の巫女



(14)



冬の住居

神桿

松花江流域ゴリド人



マンゲーン人の枝倉式高倉



(19)

吉林省琿春河上流の満州人と家屋



(6)

マンゲーン人の家屋

図10 松花江流域のゴリド〔鳥居龍蔵1922・1924〕

四千、人口八千人許り。愛琿の上流7、8里にブラゴウェシチェンスクと相對して黒河が勃興し、繁榮している。

09/14 ブラゴウェシチェンスクから船でハバロフスクに向かう。ニコリスカヤ、インノゲンチェフスカヤ等を経てピシコーに到着。松花江の合流点に至る。さらにミハイルセメノフスカ到着。シナ化されたゴリド部落を見る。

09/17 ハバロフスクに到着。図書館、博物館で調査。シベリヤ派遣軍第14師団の司令部、海軍基地、領事館もある。「古代民族の遺蹟は市街の前又は丘陵の崖等に処々せり」。

09/28 アムール下流の調査。ツングース族のゴリドが居住。ソフィースク辺に至る。この附近からギリヤーク族の村落があらわれる。アムグン河の合流地点にネグダ人が住む。その黒龍江に合する地点をチールという。

アングン河と黒龍江との合流地点に、一つの小丘ありて突角をなす。もと其の上に有名なる永寧寺の碑石二基ありしが、前年ロシア人之を取り去りて、今はウラジオストックの博物館に蔵せり。即ち其の一基は明の永樂年中に、他の一基は同代の宣徳年中に建立せしものなり。

此の地は又明の奴兒干都司のありし所にして、当時明朝は此処に役所を設け、此の附近一帯の土人を綏撫したるなり〔鳥居1922：275〕。

10/03 黒龍江の全流を航してニコラエフスクに到着。領事館も設置されていた。

此の地に於ける考古学上の調査としては、石器時代の堅穴甚だ多数に存在せるに依り、主として之が調査をなし、又学者、学校等を訪問して種々斯学上の意見を交換したり。当時我がシベリヤ出征軍の派遣軍一大隊許り、此の地を守備せるに依り、其の警備船を借用して黒龍江を遡り、彼のチール附近を処々回航して、ギリヤーク、ネグダ等の調査及び永寧寺の古跡探検等をなしたり〔鳥居1922：275〕。

シベリヤ出兵は1918年（大正7）、その撤兵は1922年6月。『北満州及び東部西伯利亞調査報告』は大正11（1922）年3月であった。奥付の日付はともかく、シベリヤ撤兵の情勢を把握したように見える。「当時我がシベリヤ出征軍の派遣軍一大隊」とか、本書の前言の「苟くも我が邦人にして此の地方に事を為さんと欲せば、実に逸すべからず絶好の機会にして、正にこれ空前にして或いは絶後なるやも知るべからず」〔鳥居1922：261〕と記している。

黒龍江畔のギリヤークも全くこれと同じく、アジア諸民族中に於て最も古風なる風俗習慣を有せり。頭髮は散髪にするものなく、家屋は校倉式多く、其の古きものは百年以前の建築なほ存在せり。老臣も多く、七、八十歳の老翁に遇つて其の語る所を聞くに、我が父の代には、一年日本に行き、一年満州に行き、隔年毎に両地と往來して物質の交換をなしたりといへり。彼等は樺太を以て日本と見做し、樺太に行くといふをシザムに行くといへり。シザムは即ち日本の意味なり。以て彼等の祖父と我が日本を交通交易の關係ありしことを知るに足れり。彼等が樺太に往來すると共に、樺太に於けるギリヤークも満州に往來し、互ひに交通を密にせしは言ふまでもなし。此等は日本人の最も注意を要点と謂うべし〔鳥居1922：276〕。

間宮林蔵が訪れたデレンはソフィースクの上流にあり、1681年出版のラベンスタインの『ア

ムールのロシア人』によると、東経138度3分の2（66分7秒）、北緯51度4分の1（25分）の位置にある。

10/21 ニコラエフスクを発船。黒龍江をさかのぼり、ハバロフスクに向かう。

帰航の途中も船の寄港を利用して各所に上陸し、考古学及び土俗学上の調査を試みた。「ハバロフスクに近づくや、「過激起こて通行の汽船を襲撃するとの報あり。船内俄に動揺し、護衛兵は武装を厳にして警戒する所ありしが、幸ひに事無く、警報は一つの風声唳に過ぎざりき」〔鳥居1922：277〕。

10/27 ハバロフスクに到着。博物館でスケッチ、撮影、図書館で図書を翻閱、学者と意見交換、書籍・論文などの蒐集、買い入れ。石器時代の遺跡を踏査。

11/25 ハバロフスクを出発。ウスリー線の汽車でウラジオストックに向かう。

ウスリー河に流域は斯学調査上最も大切なる所なるも、時既に降雪期に入りて、山野雪に蔽はれ、地上の物を調査するに便ならず。かつ過激派蜂起して鉄道、橋梁を破壊し、或いは汽車を顛覆する等、危険状態刻々に迫りつゝあるが故に、到底途中下車して調査なす能はず。依って此の方向の調査も之を他日に期し、直行ウラジオに向ふこととされるなり。…ハバロフスクよりウラジオストックまで平時一日を要せざるの間を、約四日間を費して十一月廿八日午後九時頃わづかに到着するを得たり。当時ウスリー方面が如何に危険状態に置かれしか之に由って知るべきなり〔鳥居1922：278〕。

11/28 ウラジオストックに到着。周辺の調査。

12/04 ウラジオストック西のニコリスクの調査。

午後二時頃到着するや、直ちに陸軍用自動車借りて其の附近の調査をなし、其の翌日ヒュードル氏の案内にて再び自動車を駆りて附近の調査をなし、其の翌日亦之を続行したり〔鳥居1922：278〕。

ニコリスクは綏芬河流域にあつて、盆地を形成し、沿海州、北満州交通の要衝である、旧ロシア政府も「此処に一軍団の兵を駐屯せしめて緩急に備へ、所謂武装したる市街として存在したり」、「渤海の起りし時も、金の覇を称せし時も、此の地を以て東方の一中心となしたるなり」という。

「シナ人がニコリスクを雙城子」とよぶことに注目し、ニコリスク市街の東城と荒野の西城があり、二城を中心に、古碑、その基石、仏像、石人、石獸等が発見されている。さらに「二城の外、綏芬河を隔てゝ前岸の丘陵上に、地形を利用して築城せる山城式の故跡あり。之を算すれば雙城に非ずして三城なり」。三城のもっとも古いものを渤海、それに次ぐものを金朝時代とみる。ヒュードルの論文の紹介し、東城は渤海で、西城は金時代、山上の土城は金代で、「退却の時此に抛らんがため後に設けしものならん」〔鳥居1922：278-279〕という。

東城はユジノウスリスカヤ城、西城はクラスノヤールスカヤ城、綏芬河の山城はシェレニコボ城にあたる。東京龍原府について、鳥山喜一は『渤海考』において鳥居の清津北方説、那珂通世説のウラジオストック附近説を批判して瑯春附近説をだす。鳥居は那珂通世説をもとにニコリスクをあてる。

日本道にして、此の地より舟にて綏芬河を下り、更に其の河口たるアムールスキー湾より

海舶にて日本に往來せしものなるべし。又我が日本より渤海に派遣せられたるの使節も、船をアムールスキー湾に入れ、それより綏芬河を遡りて此の地に到着せしものならん。而してニコリスクより西方に走れる東清鉄道の線路にそひ、今も一条の旧道を存じて牡丹江流域に通ずるあり。これ恐らくは当時東京より寧古塔に往來せし道路ならんか。寧古塔が渤海の上京たることは争ふべからずの事実なり。然らば寧古塔の東に当れる今日のニコリスクの地は、之を東京に該当せしむこと寧ろ妥当の見解なるが如し〔鳥居1922：279〕。

今日、ユジノウスリスカヤ城にその城壁がのこる。クラスノヤースカヤ城の発掘で、オンドルを設けた建物跡などがみつまっている。シェレニコボ城も城牆、門跡が発掘された〔田村晃一2004〕。土城と見える城壁は石築であった。東京龍原府は城牆、建物の平面構造などから琿春八連城跡に比定される。

12/06 ニコリスクを立ち、翌7日早朝ウラジオストックに着く。

12/08 ウラジオストックを出港、敦賀にむかう。

12/10 敦賀入港。

12/13 東京に帰着。

其の間時日を重ねること六ヶ月以上。旅行せる区域はイルクーツク、ザバイカル州、黒龍州、沿海州、サハレン州及び北満州の黒龍江省、吉林省等なり」。人種学、考古学、歴史学上の調査であったが、「政治、経済、商工業の方面にも関係し、「土人の生活状態如何、其のロシア人、シナ人との関係如何、及びシナ人がロシアの混乱に乗じて突入せる状態、朝鮮人が意表外にもウスリー、黒龍江方面に雄飛せる状態等は勿論、各地方に於ける天産物の利用、物資需給の関係、及び一般の経済状態に就いても、我が国は大いに注意するの必要ありと信ず〔鳥居1922：280〕。



SACHIKO  
〔鳥居龍藏・君子・幸子・縁子1929〕

## IV 黒龍江（アムール）流域から樺太（サハリン）

—1921年6月24日～1921年8月3日—

1921年（大正10）6月24日～8月3日調査〔鳥居龍蔵1924：209～258〕（『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』大正13年7月、岡書院）

1921/06/24 10時10分、東京上野駅を出る。人類学選科生の宮坂光次と同行。

06/25 午後3時15分青森駅に到着。午後5時の汽船で津軽海峡をわたり、午後9時15分に函館に着く。午後10時15分発の汽車で小樽まで行く。

06/26 小樽に到着。車で手宮の彫刻文字調査。小樽泊。

06/27 小樽から陸軍御用船東郷丸でアレクサンドロフスクに向かう。

06/29 朝アレクサンドロフスク（亜港）に到着。サハリン派遣軍本部自動車で出発。旅館。

06/30 朝7時、車で宮坂、仙波中尉とともに山越え。アルコーのギリヤークの村落、ツィム河上流の平野—デルピンスコエから15時に亜港にもどる。

07/01 亜港に9時ごろ行き、11時の東郷丸で出港。韃靼海峡を渡り、17時、デカストリー港につく。船内泊。

07/02 デカストリーの西14～15町のところで、ギリヤーク人の調査（キジ湖付近のマリンスク左岸ヘルマー）、竪穴調査、午後7時中華丸（東郷丸は出港）に乗船。

07/03 デカストリー。正午に出港。20時、黒龍江河口、仮泊。

07/04 早朝黒龍江を遡上。11時ニコラエスクにつく。島田氏（島田商会）宅泊。

07/05 早朝。小蒸気船。ロシアのチヌイロフ砲台付近。石器時代遺跡。正午。ニコラエスク。ギリヤーク人の調査。15時30分小蒸気船（尼港丸、ドイツ製）、16時出帆。石器時代遺跡を遠望、黒龍江を遡上。マゴ上流20哩で投錨。

07/06 2時に遡航開始。チールで永寧寺遺跡調査、碑文出土地点、ミハエル寺院。ミハイロスコエ付近、100年まえの間宮林蔵の東韃靼紀行—マリンスク約12里の河中に投錨。

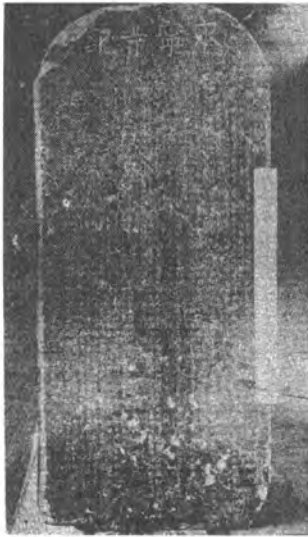
07/07 濃霧。6時に出る。7時20分ごろ尼港丸が来る。8時20分マリンスク。8時5分石油発動機船で黒龍江を遡上。ヘルマーギリヤーク村落遠望、キジ湖に着く。11時20分キジ湖をでる。ギリヤーク漁村。（日本の守備隊が駐屯。箱馬車で、デカストリーに向かう。午後4時10分「中継場所」という所（千里峠）を過ぎる。午後7時30分デカストリーに到着。キジ湖畔から約15哩。東郷丸に上船。

07/08 午後8時デカストリーを出港。

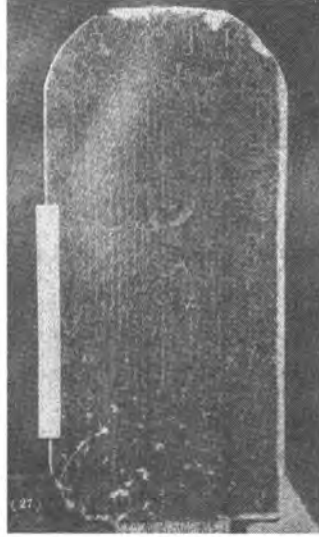
07/09 早朝、亜港着—旅館。ヤソ教会堂付近の丘陵の傍らで石器・土器採集。

07/10 石器時代遺跡調査。ツングース酋長のヤクート人ウイノコルフから聞き取り調査。—デルピンスコエ守備隊長の宿舍で昼食。農事試験場付近で調査。デルピンスコエに帰る。

07/11 7時30分、自動車で出発。ツィム河流域調査（宮坂、ヌイオ守備隊長室岡大尉、チ



永寧寺永樂の碑（表面）



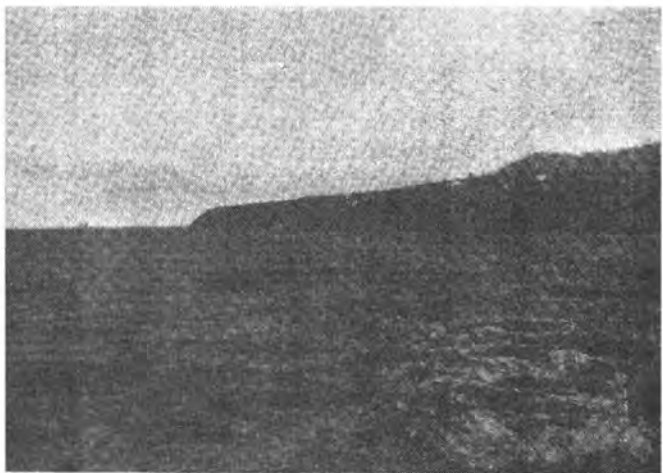
永寧寺永樂の碑（背面）



永寧寺宣徳の碑文



チールの丘の上にあった  
磚塔〔鳥居龍蔵 1929〕



アムール川河口 チール丘陵

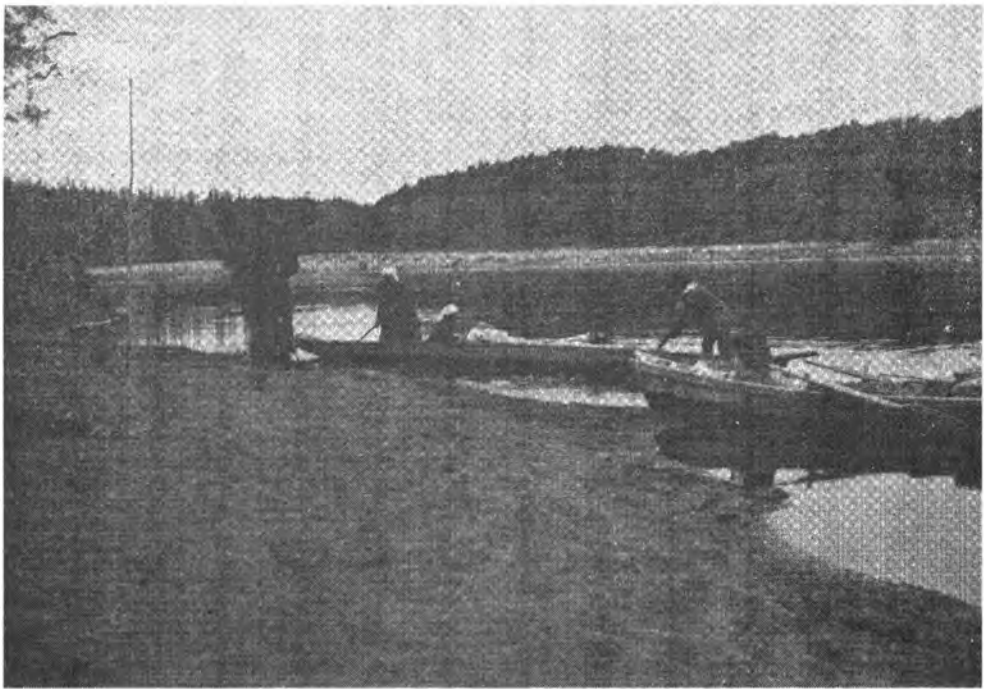


黒龍江ゴリド独木舟



デカストワン湾

図 11 アムール川下流域〔鳥居龍蔵 1943〕



ツイミ河とツングース



北樺太ギリヤーク



北樺太ギリヤーク



北樺太ギリヤーク

図 12 サハリン【鳥居龍蔵 1924】

チャイオの守備隊長太田少佐および兵卒)。第1アルコー、第2アルコーをへて、ツィム河上流  
07/12 8時出発。ツィム河沿い、森林開削地を通る。ウスクロセイトスコエ (30戸のロシア人村)、**ウスカオ** (14戸ロシア人村、燕麦栽培) をすぎる。11時5分**スラタ**・ロシア人村 (17軒)、河岸のギリヤーク村落。12時村落を過ぎ、3時に**アダツィム**到着。ロシア人村 (33戸、教会、学校)

07/13 4時30分上船。丸木船12艘、ギリヤーク土人15人で操縦。**ビルゴア**、**コムラオ**村などのギリヤーク村落。**チレオ**村 (アダツィム・ギリヤークの本拠地)。10時キリオ村とウイルキルン村の間で昼食。12時出発。ツイヌ河口のヌイオから来た陸軍軍医の乗る丸木舟にでくわす。13時30分**ウイルキルン**。アダツィムから7里。**ブーブニ**河南方1里で停船。野営。

07/14 雨。9時**ヌイン**河合流点。10時50分中州で昼食。舟子のギリヤーク人の身体測定、写真撮影。午後1時雨中を出るが止む。午後6時**パルカタ**の上流1里ばかりの砂州で晩食。

07/15 午前6時**ヌイオ** (日本の駐屯兵の営所)。兵営で風呂。朝食後、兵営から3000mの距離の堅穴 (約30基) 調査。チャシのような3段の崖、堅穴。チャシの周囲に壕。

07/16 6時40分チャイオの守備隊長とともに出発。丸木舟2艘に分乗。**ツィム**河を下る。ツンドラ地帯。守備隊の馴鹿の放牧。河口。**ヌイスキー**湾。10時30分**ヌイオ**のギリヤーク村落。北辰会の出張所。沖に日本軍艦1艘碇泊。砂州の一角にオロッコ人の村。12時30分**テクメツ**のギリヤーク村を過ぎる。**タルギー**のオロッコ村到着。午後8時**ラリオ**・ギリヤーク村落 (数軒、日本の駅舎)。泊。

07/17 4時に出発。**アスカサイ**河口丘陵のウルポー・オロッコ村 (一名アスカサイ村)。12時**チャイオ**兵営。石器時代遺跡を発掘 (堅穴、土器・石器)。

07/18 8時に**チャイオ**兵営を出て、向かい側のギリヤーク村落 (チャイオ土人の村落)。オコーツク沿岸の大村。近くにオロッコ村落 (シャーマンがいるという。チャイオ土人村の海岸に石器時代の包含層 (馴鹿の骨器)。午後5時兵舎につく。「シベリヤの民族」講話。

07/19 早朝、オロッコに馴鹿を引かせた写真撮影。帰途は丸木船2艘 (鳥居、宮坂、岡田一等卒の3人)。**チャイオー**4里半**エノワイ**駅舎→18日のオロッコ村→**ダーキー**駅舎 (陸軍の駅次、日本兵2人)。ヌイオ駅舎につく。附近のギリヤーク村で漁法をみる。

07/20 0時10分**ヌイオ**着。10時25分ツィム河遡上開始。出発前に兵舎付近の堅穴調査。3艘 (鳥居、宮坂、兵士2、漕ぎ手ギリヤーク6人→ヌイオ2人、タクラオ3人、デクムチ1人)。河口から出発。12時に**オバカイ** (ロシア人一族、父母子供6人)、砂糖を贈る。舟中でギリヤーク語の採取、風俗習慣調査。12里。午後7時**パルカタ**につく。

07/21 起床午前2時30分。4時15分出発。10時20分**ジカルン**。トルコ人ウイノコルフ氏ら、ツングース人の**パルカタ**村への道。ツングース人の一族・2人のロシア人に出会う。はじめてツングース人に会い、調査。12時10分遡江。兩岸の景色が一転、丘陵岸壁。**パルカタ**付近はツィム河の中間地帯。櫂や棹が入り用になる。午後5時30分、テントの傍らに熊の足跡。

07/22 朝4時25分発。鳥貝 (ギリヤーク語でキシック)。11時、ブーブニで上陸。結氷のときに橈道の要衝。陸軍の駅舎。ブーブニ河とツイミ河の合流地点、サケ・マスが豊富。ウイル



キルン下流約2里で上陸。

07/23 4時35分出舟。2里で**ウイルキルン**村に6時30分着。1里約2時間。ギリヤーク人は**ブイユム**イ村という。ロシア人の家1~2軒。ウイルキルン村からツィム河流域からギリヤーク村落が分布しはじめる。そこで日本陸地測量部員・鳥居鋳太郎に会う。牧畜・野菜。燕麦栽培。校倉式家屋。高倉には宗教上の用で熊祭り儀式に使う道具を納めている。ウイルキルン村で老人から「熊祭り」の聞き取り調査する。熊の頭骨(80個ほど)、弓箭、槍、熊料理用の包丁類、儀式用食器類、木器、飾り物の調査をする。午後2時、ウイルキルン村出発。ホロトーやコムラオ等の村落を船の中から眺めつつ進む。アダツィムのビリヤーク村落に到着。ギリヤークの家は冬の家と夏の家の上に区別され、冬の家は堅穴で、夏の家は校倉式である。17:00アダツィムに着く。ウイルキルン村からアダツィムまで、荒れ果てた古い村落を舟上から7カ所確認。漁撈と調理、保存食。ギリヤークの食生活。干し物。鮭・鱒は、女の手で腹を割り、臓腑を棄て、高倉の下に架け並べ乾燥させる。アダツィムでは土人学校の宿舎で宿泊。「ツィム河流域に於ける土人部落の状態及び有史以前の遺蹟に関する調査を終わった」〔鳥居1924:230〕。

07/24 早朝出発。馬車2台を傭う。宮坂同乗。**スリアンボー**を経過。2里ばかりで**ウスカオ**に到着。ロシア人の村落。鳥麦を栽培、牛馬を放牧。午後3時、**デルピンスコエ**着。守備隊長の宿舎を訪ね、宿泊。

07/25 自動貨車で**アレクサンドルスコエ**に向かう。午後7時に帰着。「余はこれでツィム河の流域からスイオ、チャイなどのツンドラ地底の調査を無事に終えた。十五日の行であった」。

07/26~07/29 **アレクサンドルスコエ**に滞在。石器時代遺蹟、土城、ギリヤーク人の調査。

このアレクサンドルスコエは「徳川時代の地図を見ると、ギリヤークの村落がある」。土城は長方形で、長さ330尺、幅180尺、高さ4~5尺。満州及び東部シベリヤの土城と似ている。沿海州のニコリスクからオリガにかけての土城が存在し、ブッセの論文(ウラジオストックの考古学者)をみている。「渤海若しくは金あたりのもの」と位置づけた。今日の沿海州一帯の渤海・金の土城の考古学的調査からみてもたいへんな見識である。このアレクサンドルスコエ土城も渤海もしくは金代で、「靺鞨族が残したもの」である。また南樺太のシラヌシ土城(白土城)については、間宮林蔵の『北蝦夷圖説』を引く。樺太において二つの土城が存在していることは「当時大陸の勢力が相当に南北樺太に及んでいた」。またアレクサンドルスコエの「ヤソ教会堂」の建つ丘陵で石器時代の遺跡を確認している。

07/30 船で**小樽**に出帆する。

08/01 朝**小樽**に到着。夜汽車で東京に向かう。

08/03 **東京**に帰着。今回の調査は、東部シベリヤの調査をあわせて、アムールスキーとサハレンの二つのギリヤークを調査し、オロッコ、ツングースの調査した。大陸の石器時代の遺蹟・遺物と樺太島のものと比較しえた。

1912年（明治45年・大正元年）7月～8月調査〔鳥居龍蔵1953：158～163〕（『ある老学徒の手記一考古学とともに六十年』、『全集』12：137～343）

第一回朝鮮の調査旅行を終つて歸京後、その年明治四十四年七月某日のことであつた。友人加藤房藏氏は樺太廳へ出張の用が出来て、私に同島の調査に行つてはどうかとすすめられたので、承諾し、同行することになった〔鳥居1953；158〕。

南樺太の調査より歸京した年も暮れて、明くれば明治四十五年（この年七月三十日明治天皇崩御）の春、私は朝鮮に渡り第二回目の調査を行つた。…朝鮮から離れ、宮崎縣に立寄つて調査した〔鳥居1953：164～165〕。

『ある老学徒の手記』では、南樺太の調査年次が明治44年とあるが、明治45年（1912）のことであつた。明治45年の春に第2回の朝鮮調査、7～8月に南樺太を調査した。

鳥居龍自身が南樺太調査年を手記の中で明治四四年としているが、これは誤記である。…「樺太日日新聞」の記事で明らかなように明治四五年七月から大正元年八月なのである〔杉浦重信2005：32〕

07/？ 7月某日、東京を出発し、北海道から船で大泊港に到着。ハバロフスク博物館員M氏も同船。大泊から豊原に来る。平岡樺太長官を訪問する。

鳥居一行は明治45年7月22日午後4時、小樽から汽船で大泊に向けて出発した。翌日午後2時、風浪のため2時間遅れで大泊に到着、午後3時上陸して初めて樺太の土を踏んだ。鳥居龍蔵はこの船で偶然にもロシアの博物館員と同船になった。…このロシア人は首都サンクトペテルブルグにあるアレクサンドル三世ロシア博物館のV・N・ヴァシーリエフである。…鳥居等は港頭の旅館北海屋で小憩しのち、午後4時2大泊発の汽車で午後6時に豊原に着き、宿舎となる北越館に投じた〔杉浦2005：33〕。

樺太に着いた翌日の7月24日、鳥居と加藤は明治天皇の重態の報が伝えられる中、樺太神社に参拝、天皇の回復を祈願している。7月25日、加藤と鳥居は枋内拓殖課長の案内で写真師1名・人夫4名を伴って、鈴谷貝塚を発掘調査している〔杉浦2005：34〕

08/07 同船した渡邊利二郎（東京帝大法学生）を助手にして、ボロナイ川口の静香に行く。成富支丁長宅に宿泊する。

08/08～ 内路の石器時代の竪穴を探り、静香に帰る。キュリ湖附近の貝塚を発掘。

ボロナイ川を遡江。土人の丸木舟を用い、渡邊氏と青森の人Sが乗船。舟人はオロッコ人とギリヤークの3名が乗る。オロッコ、ギリヤークの部落の人類学上の調査をおこなう。

08/09 遡江開始。舟のなかで土俗や説話を聞き始め、その言語を集める。9里進んで野宿。

08/10 遡江。ギリヤーク部落に一泊。酋長の家で、大木を倒し、丸木舟を造るところであつた。馴鹿も飼育している。

二日目の先は無人の境となり、川の両岸は森林地帯。夜間は浅瀬に舟を寄せ、テントと張る。朝食はせずに、昼間舟を寄せ、持参の米の飯をたべる。土人は銚で鮭を漁して食べる。

08/13 5日目にロシア国境に接する3里手前で野宿。

08/14 流木のなか、日本国境制定事務所の廢屋にたつする。国境を通過して、午後3時ご

ろ、ゴルデコボに到着する。1軒のロシア人の家屋のみ。「ここにはロシア人の警察署か兵営があり、厳重に守備していると思ったが、そんな設備はない」〔鳥居1953：全集12：269〕

08/15 舟で帰路につく。遡江とことなり、3日で静香に帰る。前後10日間で、ポロナイ川行程50余里。

静香では<sup>なよろ</sup>南路のアイヌ部落に赴き調査。「南路のアイヌは樺太のアイヌ、否、アイヌの分布として最極北の所」〔鳥居1953：160、全集12：269〕。

アイヌはこの島にどこから来たかというに、今日、学者の意見では、北海道から移って来たことと仮定している。それからオロッコはシベリヤの沿海州方面より移って来たことは確かである。アイヌは南より、オロッコは北よりこの島に到着し、両者はポロナイ川で接触衝突したのである〔鳥居1953：162、全集12：271〕。



ツイミ川上流域 ダレボ駅（北緯 50° 37' 附近）



ポロナイスク中流域 ダレボ駅・アナル駅間



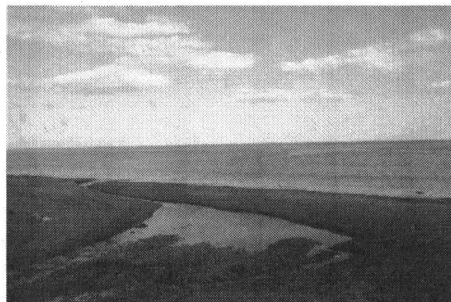
ポロナイスク中流域 ダレボ駅・アナル駅間



ポロナイスク川上流域 アナル駅（北緯 50° 12' 附近）



ポロナイスク川下流域



テルペニヤ湾 ポロナイスク

## V シベリヤから満蒙へ

—1928年4月12日～1928年7月13日—

1928年（昭和3）4月12日～7月13日調査〔鳥居龍蔵・君子・幸子・緑子1929〕（『西伯利亜から満蒙へ』昭和4年5月、大阪屋號書店）

極東シベリヤから満蒙の旅記。極東シベリヤ1ヶ月、満蒙3ヶ月の踏査であった。鳥居幸子1928「シベリヤの旅」「ハルビンから大連まで」、鳥居君子1928「奉天とまた大連」「蒙古の調べ」「ハルビンからマンチュリへ」「阿什河と金の上京」「ハルビン」から行程をみる〔鳥居君子1928：5-48、113-136、143-338、433-478〕。

04/12 東京を出発。

04/14 敦賀港から乗船。

04/16 朝、浦潮に上陸。渡邊總領事の出迎え。領事館へ。その日は復活祭。

04/18 アルセニエフ博士宅に招待される。

04/19 極東大学参観。以後、博物館に通い、永寧寺碑文、ヤンコフスキー半島、ニコリスクなどの渤海・金の古城出土の瓦の拓本、ゴリド・オルチ・ギリヤーク・コリヤーク・チクチ・サハリンアイヌ・支那人などの土俗、ニコリスク・ツイフン・オルガ・ハンカ湖などの古物をスケッチする。博物館でウラジオストックの古学者ラジン教授に会う。その日の午後3時に領事館内で、ウラジオストック居留民の茶会があり、鳥居は「渤海の遺跡」について講話する。

04/21 晩8時40分の汽車でハバロフスクに向かう。ウラジオストック大学のサビッチ教授（植物学）、ベルリン大学ハンス・クーンブ教授に乗りあわせる。

04/22 夕方の6時、ハバロフスクに着く。川角領事の出迎え。博物館で、ニコリスクの「亀台」をスケッチ。鳥居は金代の亀趺とみる。博物館の隣りに美術館がある。

04/23 總領事とともにアムール湖畔のドライブ。

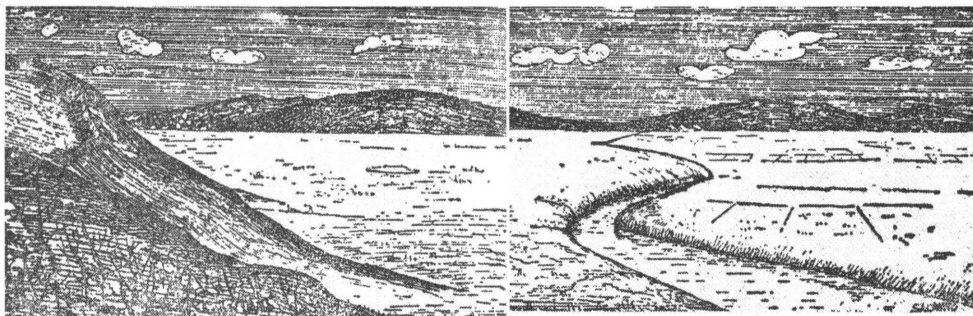
04/25 午後8時20分の寝台列車で、アルハラに向かう。ハバロフスクの外事課長ウエクスレル、通訳のニーナが同行。

04/26 午前6時にアルハラ駅に着く。雨。午前中にアルハラ小学校の博物館を見学。午後2時、2台の馬車で、吹雪のなかを進む。5時ごろ田舎屋で休憩。出発するが、吹雪のためアルハラに引き返す。鉄道宿所。

04/27 午前8時、ブラゴエ行きの列車（臨時列車）で、ブラゴエチエンスクに向かう。午後2時、ある駅で食事。夜11時、ブラゴエチエンスクに到着。平塚領事が出迎え。

04/28 博物館（ボーボフ館長）で拓本、スケッチ。10年前に案内をうけたという。アムール流域の出土遺物、シャーマン巫人の衣服などを調査。オロチョンの森林生活の模型が展示。

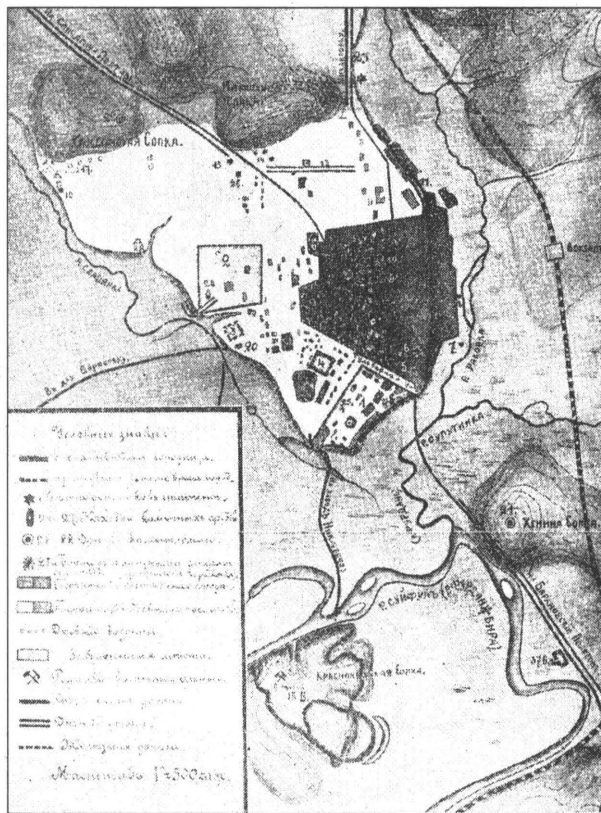
05/01 朝5時の汽車でハバロフスクに向かう。モスクワからの急行に乗れず、臨時列車の三等寝台に乗る。



古城よりスイフン河をニコリスクを望む



アルセネフ氏 幸子 フョードル氏  
ニコリスク土城と私共一行



フヨ氏作製スイフン河とニコリスク古城 (1. 2. 3. は古城)



ブラゴエスチェンスク白樺講演  
に於ける私共と平塚領事及び令夫人。令嬢

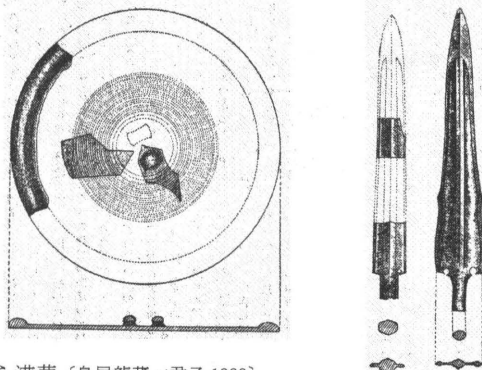
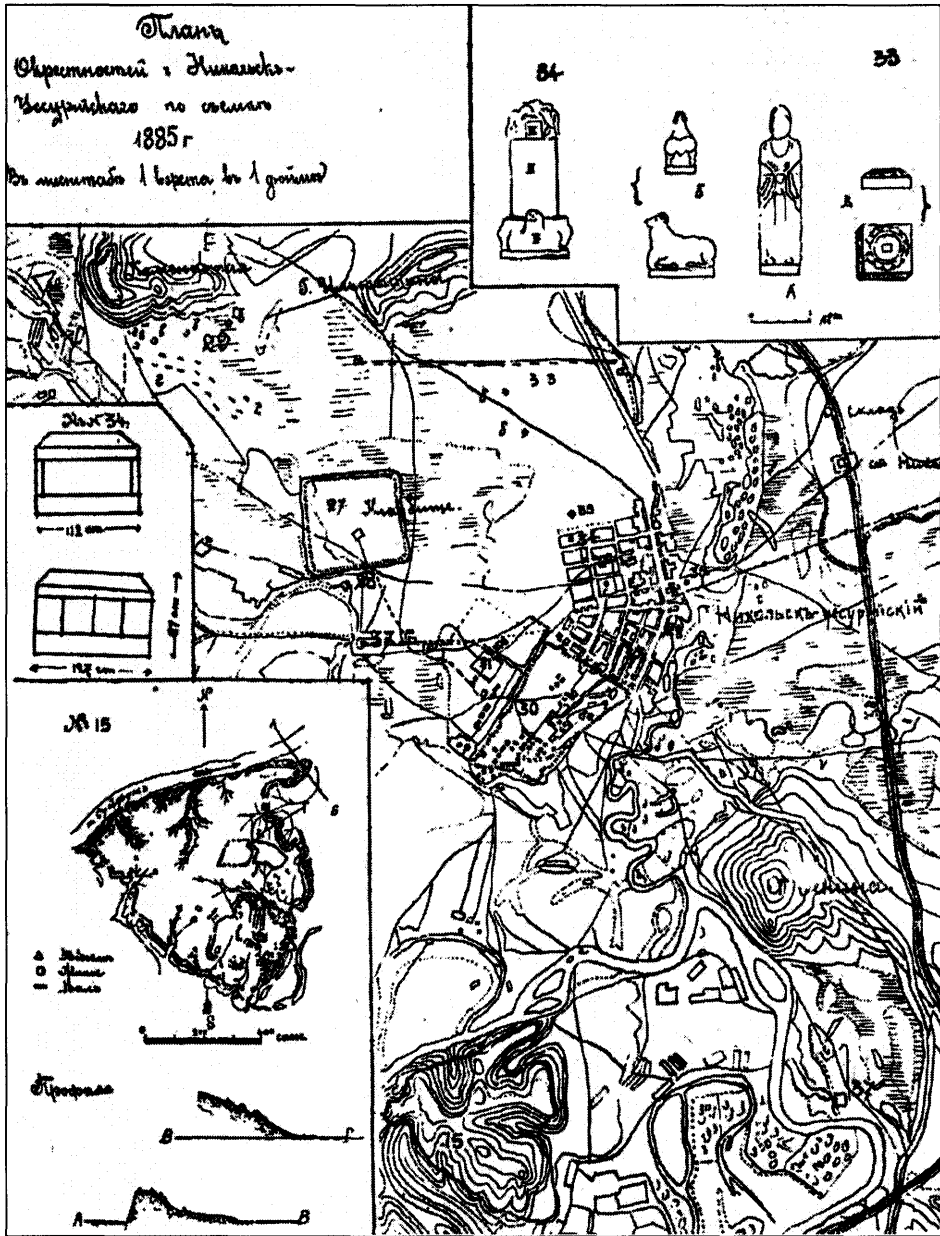


図 13 シベリヤから満蒙 (鳥居龍藏・君子 1929)



物遺のそと城古金び及海渤製作氏ブ  
 城古15—城古37・30—棺石・文碑34—羊石人石・礎柱33

図 14 ブ氏作成渤海及び金古城とその遺物〔鳥居龍蔵 1922〕

- 05/02 朝7時にハバロフスクに到着。
- 05/05 晩にウラジオに向かう。
- 05/07 正午の汽車でニコリスクに行く。アルセニフ博士同行。ニコリスクのフェオドル教授宅でアルセニフ博士らと晩餐会に招待される。
- 05/08 ニコリスクから3里ばかりの渤海古城に荷馬車で行く。クラチヨフ氏宅で晩餐。
- 05/09 午後5時の汽車でハルビンに向かう。ウスリー流域を走り、**グロデコウ**を経て、夕方の7時頃**ボクラチヤ**に着く。清溝嶺の麓にある、ロシアと支那の国境。満鉄出張所の満鉄代表の楠瀬長生氏等が出迎え。午後10時に出発。
- 05/10 松花江流域の阿什河を経て、阿城を遠く眺めつゝ、午後10時に**ハルビン**に到着する。プラットホームで考古学者のトルマチヨフ教授や満鉄の堀内竹次郎等の出迎えをうける。
- 05/11 ハルビン市街を見物。トルマチヨフ教授によると、ハルビン博物館は支那政府の管下になったという。
- 05/12 午後5時の汽車で、母（君子）が待つ、大連に向かう。**長春**で満鉄線に乗り換え、ヤマトホテルで休憩。乗車。
- 05/13 晩9時ごろ**大連**に到着。プラットホームで一ヶ月ぶりに母の顔を見る〔鳥居幸子1928：5-46、79-88〕。
- 05/14 朝8時10分の急行で**大連駅**を出発。午後3時**奉天駅**に着く。満鉄医科大学佐藤教授が出迎え。ヤマトホテルに入る。日本の総領事館を訪問、林総領事に「御目に掛り蒙古入の打合せをした」。「南北戦争の為、敗残の北軍が算を乱して、何日何時北方の何れかの方面に武器を持って乱入して来るか計られぬとの事」であった〔鳥居君子1928：103-112〕。
- 05/15 奉天で大雪。奉天神社の祭り。
- 05/16 午後1時半、大連行きの汽車に乗る。龍蔵は午前中、満鉄の医科大学病院で耳の治療をうける。車中、マンチュリの日本領事館の田中領事に会う。
- 05/17 午前8時半**大連駅**に着く。島崎氏の出迎え。ヤマトホテル。満鉄本社を訪問。「大連御滞 在の肅親王は、川島氏と共に私共を訪問された」。
- 05/18 **奉天**にもどる（大連の荷物を携えて）。熱河をへて蒙古に入るのは危険、林総領事と相談し、鄭家屯に出て肅親王の紹介のトシエツト蒙古に入り、東西チヨロツト蒙古からアルコンチン蒙古を通り、バーリン蒙古の遼の遺跡地に進むことにし、護照の手配を依頼した。
- 05/19 午後5時ごろ護照がおりる。奉天を出発して**四平街**に夜10時ごろ着く（植半旅館）。
- 05/20 満鉄支社を訪問。宇佐見顧問と会う。
- 05/21 朝7時発の汽車で**鄭家屯**に向かう。午前中に着く。午後日本領事館を訪問。領事の話によると、「大分北京方面の様子は悪く、既に在留邦人の内婦人子供の或部分は、此の街を引上げ今領事婦人も、お引上げのお支度の最中で、御目にかかる事が出来なかつた」。鄭家屯の満鉄公所長の菊竹氏が出迎え。トシエツト蒙古廻りを又中止して此処より蒙古入りの用意に取りかかる事にした。馬1頭の相場は百円位であった。車2台、馬夫2人、ボーイ2人、厨子、通訳、護衛兵数人、テント、寝具、炊事道具、二三ヶ月分の食料品などの準備を菊竹氏に依頼。菊竹氏の採集の古瓦、磚などを拓本、スケッチ。

05/22 満鉄公所を出発。三頭立の馬車2台に分乗して**ウブグン廟**に日帰りする。途中、瓦房で土城の調査。

二十二年前の昔、幸子が赤坊の時、其を抱へて夫と三人あのような砂漠の中を、風に吹かれ吹雪に追はれて、蒙古の旅を續けた事が、夢の様に脳裏に氾がき出されて感慨無量であった〔鳥居君子1928：123〕。

05/23 「不安」な情報はいはいる。菊竹の採集品を調べているが、領事館から「鳥居一行の蒙古入は見合せる様に」との通知があった。満鉄本社からも同じ通知であった。「マンチュリの方から這入ることにした」。

05/24 **鄭家屯**西南方のオボ山に行く。砂丘のなかで、遼代の古墳2基を発見。

05/25 終日、荷物の準備。

05/26 鄭家屯から四平街をへて、**長春**に向かう。ヤマトホテル泊。夜半長春発の汽車でハルビンに向かった。

05/27 朝**ハルビン**に着き、北満ホテルにはいる。博物館で陳列品の見学。トルマチョフ博士に会う。ハルビンの街は「外国人五分、支那人四分、日本人一分」であるという。外国人の多くは露国の帝政時代の人々。日本總領事館その他満鉄公所を訪問。

05/28 日曜日。カトリックの御堂に立ち寄る。

05/29 早朝、**ハルビン**駅からマンチュリに向かう。大興安嶺山中を横断する。

昔私共が親子三人で、一番苦しい旅を續けた、彼のバカラ蒙古を左方に見つゝ、汽車は大興安嶺を超えて行くのであつた。一番の高所に行く時は、落葉松や白樺の林ばかりで、興安嶺の高峰を、汽車は螺旋状に走つて居た。此處には、二三人の人家があつて、此様な無人の寒い所に、住つて居る人々に同情されるのであつた〔鳥居君子1928：150-151〕。汽車はハイラルに着いた。…興安嶺驛あたりから此邊は、鐵道沿線一帯に餘りに耕されて居ない。そして牧畜が一般に盛である。此邊は黒龍江省に属し、呼倫貝爾と云つて居る所で、バラカ蒙古人が居る〔鳥居君子1928：152〕。

ハイラルの如きも、大興安嶺から盛んに伐り出された材木によつて、材木商人も多い様である〔鳥居君子1928：153〕。

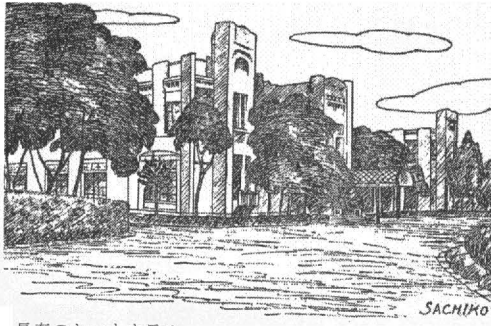
**ハイラル**から**マンチュリ**に着く。建物は露西亜風で、かなりの支那人が住んでいる。日本ホテル泊。日本食を味わう。ホテルの隣りが領事館。田中領事と会う。

領事の話によると、このあたりでは馬1頭百二三十円から四五十円くらい。田中領事から、「七日間以上の蒙古入を禁ぜられる」。「萬一の場合探しに行くのが大變だから」という。目的地にたつするまで約2週間を要するから、断念する。「明朝は早速にハルビンに引返へす事として、今夜はすつかり荷物の準備をした。之迄寝具類其他食糧品類の重荷を折角此處まで運んで來たが、もう必要ないのですつかり捨てる事にして、ホテルに残した」のであつた。

05/30 ハルビン行きの汽車に乗ることにして、発車時間まで郊外の丘にのぼる。停車場では露西亜人と支那人の税関吏が來て荷物を調べた。

私共は又先に通つて來た道をあかず眺めながらハルビンへと向つた。道すがら停車の時間が少し長いと、夫や島崎さんは一寸飛び下りて植物を採集して下さる。興安嶺の驛で

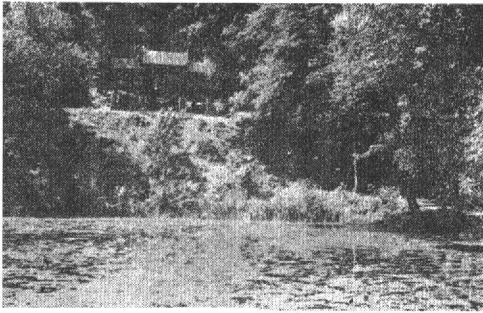




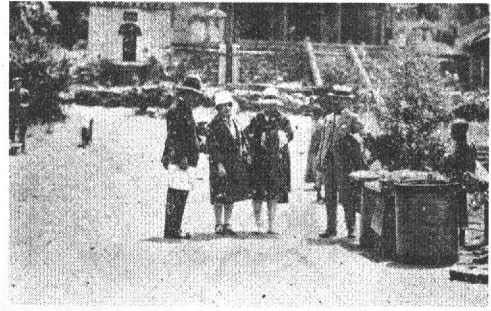
長春のヤマトホテル



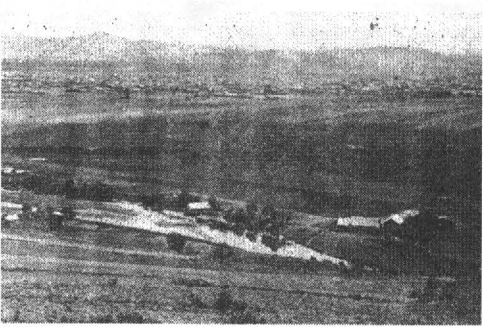
吉林省吉林東団山城と松花江



吉林省吉林 龍潭山の古池



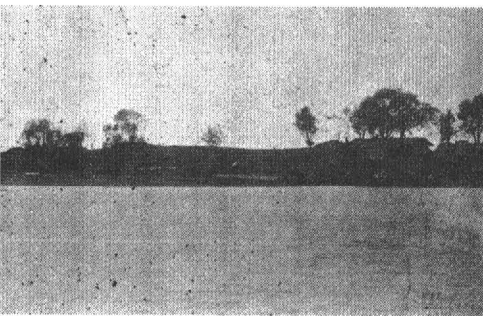
龍潭山上の観音廟 (山崎氏 著者三人)



敦化県城の遠望



山城の北門から北方を望む

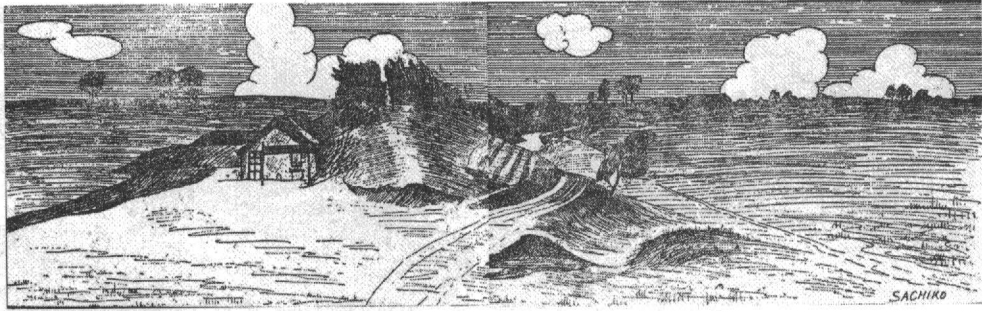


牡丹江から古城を望む

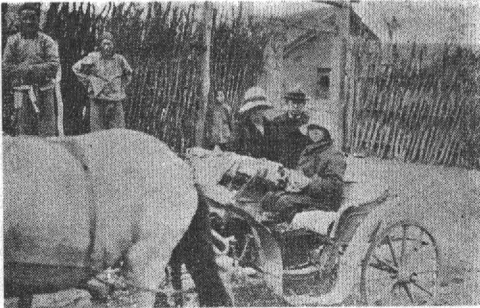


敦化の街

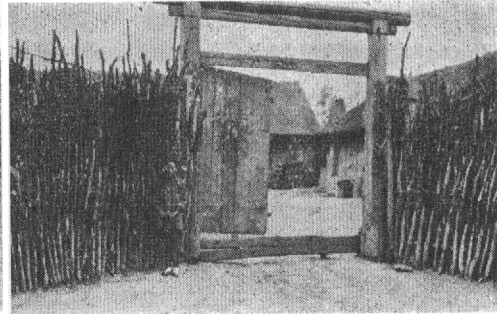
図 15 『西伯利亞から満蒙へ』(鳥居龍蔵・君子 1929)



金の上京西門



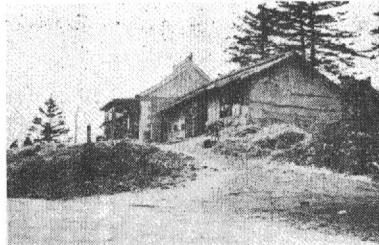
門前に於ける龍蔵・君子・幸子



満州人の鳥居に似た門



牡丹江の独木舟



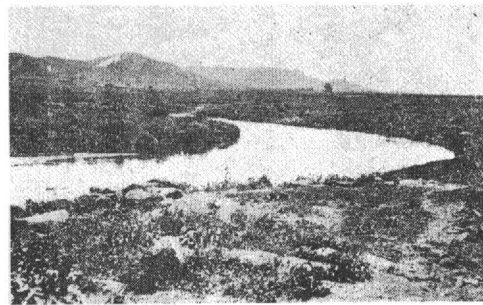
老爺嶺の山神廟



幸子と支那人の子供



石頭子河の渡舟と岸の空屋



草地の中を流れる大石頭子河



墳墓と遺物散乱の状態 (鳥居と幸子)



鞍山満鉄社宅 (井々寮)



組み立て、見た石塔と私共

図 16 『西伯利亞から満蒙へ』〔鳥居龍蔵・君子 1929〕

は山躑躅の花を露西亜少女が賣りに来て居たのを買った〔鳥居君子1928：160〕。

午前中に**ハルビン**駅に着き、北満ホテルにはいる。

05/31 **ハルビン**駅から東支線で阿什河に向った。1・2等のない3等列車。**阿什河**に着く。西に阿城県の城壁がみえる。駅の喫茶店で休憩。金の上京に到着。老爺廟。満州人の鳥居に似た門などをみて、西門に向かう。鳥居は1年前にトルマチョフ氏などととも調査した。駅にもどる。喫茶店の「マダム」の家で宿泊。

06/01 朝に出発。午前中に**ハルビン**に到着、北満ホテルにはいる。午後博物館見学と採集品の整理。陸軍の教官が同宿。磁石や地図、薬などを残してくれたという。

06/02 **スنگリ**に行く。日本人の本屋の主人が『満蒙の探査』をみて、阿什河に行ったという。鉄橋附近に支那の軍艦2隻が投錨。ボートに乗る。

私共は之から蒙古入の出来なかつた其のかわりに、もつと有益にあと一二月は過ごしたいものだと考へた。それで少し危険ではあるが、長春に引返し、あれから吉林省の奥に這入つて見たいと思つた〔鳥居君子1928：184〕。

06/03 朝9時発の汽車で、長春に向かう。午後3時**長春**駅に着き、ヤマトホテルにはいる。ほかに日本人経営の富士屋ホテルがある。領事館と満鉄公所を訪問。夜の汽車で吉林に向かう。吉林では名古屋ホテルに泊まる。

06/04 吉林の天主堂でミサ（天津の博物館長のリサン霊父）。幸子に前年の1月に亡くなつた「巴里のお兄さんは如何」と聞かれたという。

06/05 **龍潭山**に行く。吉林満鉄支部の山崎氏の案内で、駅から龍潭山までモーターカーで。龍潭山は前年の1927年（第4回満蒙調査）に調査した、「砦の形をした小山」の石器時代の遺跡（東団山遺跡）の写真などをとる。古池を回って観音廟を見る。龍潭山の城壁や池の石組みに気づかず、高句麗山城であることを認識していなかつた。博学な鳥居龍蔵としてはめずらしい。吉林駅にもどる。汽車の時間があるので、北山（本尊）の方に馬車で行つた。同じ宿に泊まる敦化の満鉄公所の河野公所長に会う。敦化まで同行することになる。

06/06 吉林から汽車で**老爺嶺**までくる。吉敦線は工事中。吉敦鐵道の出張所の梶川主任に出迎え、宿舍の一室で泊まる。老爺嶺の山上に山神廟があつた

06/07 老爺嶺から先は線路が置いてある状態で、**蛟河**までは鐵道線路敷掛のためにモーターカーが通じている。そこまで送ってくれる。蛟河は人口三千余の街。駅の西より北に拉法子山があることを記す。高句麗の拉法子山城がのこる。

06/08 10時過ぎに馬で出発。鳥居ら5人と満鉄の一行5人。君子・幸子のはじめて巻脚絆を巻いたという。鐵道駅の巡警が交代で守護した。君子は馬が乗せなかつたので、徒歩で行つた。二道河子付近で、馬賊が縛られているの見る。馬賊は銃殺されるか、その親分が身代金を持参、命乞いして助けるという。蛟河を出て4里、**六道河子**で茅葺きの古ぼけた家で泊まる。

06/09 朝5時に出発。昼ごろ**大沙河**の吉敦鐵路工務段に到着。二道河子から4里。段長の宿舍で泊まる。

06/10 早朝**大沙河**を出発。3里半位で**威虎嶺**に着く。工務段長は案内人をつける。君子は乗馬。2里進んで**陳家河**に到着。**魚亮子**で下馬。4時ごろ**魚亮子**を出る。2里ほど**黃泥河**駅に

着く。「朝鮮人の家族が所々野地の中に掘立小屋を造って其の周圍を少しづつ開墾し始めて居る所があつた」〔鳥居君子1928：230〕。

06/11 馬10頭がいなくなったが、盗まれたのではなく、草をもとめて移動したらしい。馬夫が牽引してもどる。7時頃出発。巡警6人が護衛。約4里で**臭季子溝**で昼食。**太平嶺**に進む。午後5時ごろ**敦化**に入る。満鉄公所の河野公所長の部屋に泊まる。

06/12 街の見学。

06/13 **敦化古城**調査。約1里ばかりで牡丹江沿岸に出る。古城の城壁は塼積み。周囲東西540m、南北約250mで、城内の中央に「一段高く土を盛った處」がある。周囲に堀があつた。また「東の方に寄つて城内に一條の築地の跡が低く南北に走つて居る、堀の深さは三米五〇であつた」〔鳥居君子1928：250〕。鳥居は錢貨などから金代とみている。今日、敖東城とよばれているところだ。満鉄公所に帰り着いたころ、敦化県の徐彬敦化知事が訪問、敦化城西南方1里半の山城についての調査をすすめられた。

06/14 河野公所長の招待。敦化街の支那料理屋。敦化電報局長黃憲章、敦化商會副會長蘇履成、東北陸軍歩兵十三旅第七團少校團附趙廣善、そのほか敦化の重要な役職数人が招待。

06/15 朝6時、**敦化城**の南門を出る。西南1里半で**石頭河**の村に着く。徒歩で山城子に向かう。山城調査。大石頭河と黃泥河の合流地点。北門の城壁は比較的高くのこる。高さ約2m、幅5m。上端は1m。北門から十数歩の所に深さ7m、径6.6mの円形の凹地がある。約5町で南面の城壁に至った。山城の所在については徐彬敦化知事に教えられたという。夫餘、高句麗、渤海時代の城山子山城である。午後3時、知事の招待会があつた。知事官邸内の広間でおこなわれた。列席は河野公所長の宴とおなじ二十名ほどであつた。

06/16 朝6時、敦化の東方、安図へ至る**哈爾巴嶺**の麓に高麗の遺跡遺物があるときいて、騎馬で出かける。金代の遺跡のようである。帰路、**二道梁子**の豪農家に泊まる。

06/17 **黄土腰子**をへて、12時ごろ**牡丹江**に出る。午後2時ごろ満鉄公所に帰り着く。

06/18 雨。翌日の旅立ちの準備。

06/19 昨日の大雨のため、出発を延期する。

06/20 5時半に、**敦化**を出発。3里余の**臭梨子溝**で昼食。途中雨。4里余りで**黃泥河子驛**に到着し、行きとおなじ大工宅に泊まる。

06/21 5時半に出発。幸子落馬。その時君子は飛び降り、手綱を離したため、馬が逃げる。徒歩で、**陳家店**に着く。12時ごろ**威虎嶺**のトンネル（工事中）東口に入る。西口では土砂の崩壊。威虎嶺の公務段で昼食。2時半ごろ鉄道線路の新道をとおつて、**大沙河**の公務段。泊。

06/22 端午の節句。モーターカーで**蛟河**まで、午前11時ごろ着。この日、汽車が開通した。

06/23 朝8時10分発の吉林行き列車で出発。午後1時**吉林駅**に到着。領事館を訪問。午後5時発の長春行きの列車に乗る。8時ごろ**長春**に着き、ヤマトホテルに泊まる。

06/24 午後3時の大連行列車で出発。公主嶺から蒙古学者の菊竹氏が同乗。午後10時半、**奉天**に着く。ヤマトホテル。奉天から大連に帰る満鉄松岡副社長に会う。奉天からは、同行の島崎写真技師は大連の自宅にもどる。

汽車が奉天に近づいた頃であつた、列車のボーイが張作霖の殺されたという云ふ、場所を

見せてくれた、私共は先に教化に居た時、此凶報を耳にしたのであつた、夜であつたが、電氣の光で能く見えた、恰も上の方を私共の汽車が走つて居る、此レールと十字形になつて居る處の、その下のガードを、東の方へ少し出た處に、焼け残りの汽車や、曲つたレール、ガードの煉瓦が、ひどく破れた箇所など無慘な跡が其儘に残つて居て、當時の物凄かつた様子がまざまざと見える様で、思はず身内が震えるのを覺えた〔鳥居君子1928：315-316〕。

06/25 總領事館、満鉄公所を訪問。城外の骨董店をまわり、満鉄公所に立寄つて、**奉天駅**に急ぐ。午後1時30分発の大連行の汽車に乗る。夜の8時30分に**大連**に着く。「何だかもう日本に帰へつて来た様な気がする。さぞ東京では、緑や龍次郎が待て居やう。ヤマトホテルに泊つた〔鳥居君子1928：321〕。

五月十五日であつた、大雪の日に此ホテルの二階から、街を眺めて居た事を、思ひ出して見ると、教の淋しさは、どうしたのかと不思議な位にひつそりとして居た、停車場に集ふ人も稀で、廣場に客待の馬車も腕車も大變淋しさうであつた〔鳥居君子1928：317〕。

總領事館から帰へつてから、菊竹さんの御案内で、城内の満鉄公所を訪問した。城内でも一流の場所で、建物も大變美しいものである。階上の見晴らしに導かれて眺めた、城内は一望の内に指摘され、張作霖の居つたもと満州の宮殿も、近くに眺める事が出来る、喪の假屋が白く高く、宮殿奥の方に聳えて居た〔鳥居君子1928：317-318〕。

此處の満鉄公所では、鎌田所長に御目にかゝつた、私は始め支那人と思つた位、支那服が能く似合つて居られる、多くの支那の大官連と、親交のある方で、張作霖や吳俊陞の死を非常に悼んで居られた、そして従容として、支那人達の處置を稱へて居られた〔鳥居君子1928：317-318〕。

此骨董店に居た時前の通りを多くの大官連が、自動車飛ばして、張作霖の葬儀場に行くのを見た〔鳥居君子1928：319〕。

鳥居一行は521日、**鄭家屯**の日本領事館で北京の政治状況の様子を聞いていた。「領事」婦人引き上げの情報は信憑性があつた。危機的状況にあつた。

06/26 午前11時の列車で鞍山に向かう。夕暮れ時に**鞍山駅**に着く。駅には林所長、矢澤校長、梅本先生などが出迎え。満鉄倶楽部に泊る。

06/27～07/07 **鞍山**に2週間滞在。満鉄の苗圃前の丘上で漢代塼墓数カ所、苗圃附近の2基の古墳を発掘。千山の画像石、遼金の土城、明の古城、桜桃園のストーンサークル、遼代の鉄の採掘跡などを調査。

07/08 夜半、鞍山から汽車で大連に向かう。

07/09 朝に**大連**に着く。満鉄本社の松岡副社長、岡理事に挨拶。「其他數カ所訪問して」、午後から自動車で**旅順**に向かった。関東庁を訪問、木下長官は不在、博物館を見学。ホテルに木下長官から電話があつた。星ヶ浦の料亭で満鉄本社の招待（満鉄重役代）をうける。

07/10 大連発の亜米利加丸に乗る。

07/13 早朝、**神戸**に着く。上陸して、三の宮から上り急行に乗る。「夕方東京驛に着いた時、龍次郎が走つて來るのが先づ眼に付く」〔鳥居君子1928：477〕。

## VI 鳥居龍蔵の大興安嶺・黒龍江・樺太調査と現在

鳥居龍蔵は大正8（1919）年に東部シベリヤ、同10年には北樺太を探検し、同13年に『人類学及人種学上より見たる東北亜細亜』、昭和3年、さらに昭和18（1943）年に『黒龍江と北樺太』を出版している。この両書は、アムール川流域と中国最北端の大興安嶺にかけてのオロチョン族、ギリヤーク族、ゴリド族の探検記である。オロチョン族は大興安嶺からアムール川流域に居住する狩猟民で、一方、ツングース民族の一小分派であるゴリド族はアムール川と松花江の合流地点からウスリー川流域に住む漁撈民である。

### 黒龍江から松花江流域へ

**黒龍江省同江・佳木斯** 2006年10月24日～10月31日、中国とロシアの国境を流れるアムール川（黒龍江）とその二大支流の松花江、ウスリー川（烏蘇里江）の三江平地帯を踏査した。3世紀の史書『三国志』魏書東夷伝の歴史をさぐる、国立歴史民俗博物館のプロジェクトの一環として踏査した。東夷伝に記録された挹婁、夫餘、沃沮、高句麗など、ツングース系の諸民族が興った地域であった。黒龍江南岸の中興城（金）、佳木斯の鳳林土城や滾兔嶺土城（挹婁）、吉林の東团山城（夫餘）、龍潭山城（高句麗）などの遺跡を調査した〔東2009〕。

黒龍江省同江のアムール河畔に立った。黒龍江省東北端の地。その一帯は、漁獵民族の赫哲族（ロシアではナナイ族、ゴリド族とよばれる）の居住地である。

凌純聲〔1934：60〕によると、中国内の赫哲族は松花江から烏蘇里江流域に分布する。

松花江流域（四百餘人）：樺川縣境（蒙古力、蘇蘇屯、萬里霍通）、富錦縣境（哈庫碼、富克錦、嘎爾當、霍通吉林、窪其奇）、同江縣西（古必扎拉、圖斯科、泥爾博）、黒龍江省綏濱縣境（顎爾米）

混同江（三百八十餘人）：同江縣東（拉哈蘇蘇、齊齊喀、穆紅闊、哈義、街津口、得勒奇）、撫遠縣東（俄圖、秦皇魚通、上八叉、下八叉、義日嘎）

烏蘇里江（四百餘人）：撫遠縣南（交界牌、海青魚廠、別拉紅）、饒河縣境（饒河口、團山子、杜馬河、紅石礮子、阿巴清、西博格林）、虎林縣境（黃崗、黒咀子、松夏查）

泉靖一は1936年に黒龍江省蘇蘇屯（旧三江省旧樺川県城）のゴルジ族を調査した〔泉靖一・赤松智城1938〕。当時周辺の松花江流域に蘇蘇屯9家族、万瓦霍吞（ゴルジ語の古土城趾）に5～6家族、富錦西方1里の大屯と富錦間に30家族、同江・豊清附近に若干が居住していた。

1919年の鳥居の調査後、数十年にして同世紀末に大興安嶺から黒龍江・アムール流域の考古学的・民族学的調査が着手、推進されつつある〔大貫静夫・佐藤宏之2005〕。

2000年の第5次人口統計によると、赫哲族は4640人、中国の人口のうち最小の少数民族の一人で、56民族のうち55番目という〔張敏杰2008〕。凌純聲の調査をふまえ、赫哲族の固有の武8

ンかを物質的、非物質的文化遺産の研究、民族資料の収集がすすめられているという。

**大興安嶺北端—黒龍江漠河—** 2007年10月20日～10月31日、国立歴史民俗博物館のプロジェクトで、大興安嶺を縦走するかたちで、黒龍江の漠河まで行く。

10/23 遼寧省瀋陽北方の高句麗の石台子山城に行く。瀋陽発19:30の列車で哈爾濱を経由して内蒙古加格達奇に向かう。

10/24 加格達奇に13:53着。マイクロバスに乗り換え、約4時間、大興安嶺の山並みにそって北にむかい、塔河にまで行く。18:30に到着。

10/25 朝7時に出発。加漠公路(317号線)で塔河から西に大興安嶺を横断して山中の漠河まで向かう。山中に雪がのこる。14時すぎに到着。流水の黒龍江辺に立つ。対岸はロシアのイグナシーナ。金鉱で栄えた漠河の港は上流側にある。現在「北極村」として観光地化されている。旅館も多く、従業員も多い。「北極郷中学」もある。16時ごろ漠河を離れる。雪道のうえ、日が暮れ、徐行運転。18時30分、西林吉までもどる。塔河に着いたのは00時30分であった。

10/26 9:45塔河から顎倫春自治旗の阿里河に向かう。予定の十八站のオロチョン村落へは断念する。阿里河では嘎仙洞鮮卑碑文を調査し、顎倫春博物館を見学する。阿里河は2003年以来2度目。同年6月末、滞在していた長春で乗車、哈爾濱で乗り換え、夜明けまえの3時9分に阿里河に着いたのだった。阿里河では顎倫春博物館を見学。オロチョンの民俗室、生態(自然環境)室、鮮卑室からなる。烏盟地区出土の銅鏡、鉄鏡、渦紋装身具などの遺物が展示されている。大興安嶺山中の嘎仙洞洞窟に行く。

10/27 深夜に雪。阿里河一帯では初雪であった。海拉爾まで行く予定を変更せざるをえなくなる。雪の嘎仙洞を再び訪れる。夕方、加格達奇まで移動。

10/28 加格達奇発6:37で海拉爾に向かう。18:42に到着。約12時間で大興安嶺を横断する。その夜、大連行きの列車で瀋陽まで行く。2003年6月には海拉爾まで行って宿泊し、翌日に満州里まで行った。またしても札賚諾爾遺跡に踏み入れることができなかった。

10/29 瀋陽に到着。遼寧省博物館に。

10/30 遼寧省博物館をへて帰国。

鳥居龍蔵は1919年大興安嶺山中を踏査し、1923年に大興安嶺をこえ、海拉爾・満州里まで行った。すでに大興安嶺の自然環境の破壊がはじまっていたことを指摘している

北のオロチョンは嫩江の北西に走って居る興安嶺の山中から、アムールの対岸の方面にわたって分布し、南のオロチョンは墨爾根あたりから南の興安嶺の山中に分布して居る〔鳥居1924:82-83〕。

元来この辺のオロチョンの分布地帯として最も鞏固なる区域であった。ロシア人がこの附近に鉄道を敷設しない以前は、南方オロチョンは終始此処に水草を追うて仮小屋生活をなし、狩猟を業として肉を食い毛皮を売り、以てその桃原的生活を楽しんで居たのであった。然るにロシア人がひとたび東清鉄道を敷設するや、彼らの住居地は遠慮なく切断せられ、彼らが生活の資源たる野獣の棲息せる山林は濫伐せられ、一朝にして彼らの樂園は破壊されたといつてよい。殊に材木屋の山中侵入、露人、シナ人の奥深く這入り込んで来たのは、彼らの住地を他に求めしめる原因となった〔鳥居1924:92〕。



泉靖一は1936年、大興安嶺南部のチョル川流域のカントラー帯を1ヵ月にわたって調査した。今日の牙克石市博古図鎮、綽源鎮、巴林鎮の地域である〔泉靖一1937〕。

今西錦司らの興安嶺探検は1942年5月～7月であった〔今西錦司編1952〕。大興安嶺山系のドラガチェンカからガン河の流域、ピストラヤの源流、黒龍江の黒河から漠河、チーリンジからターリンホ河水系の自然環境、オロチョンの生態が調査された。

願徳清〔2001〕は1982年～1985年にかけて、大興安嶺一帯のオロチョン・エヴェンキ族の生活風俗、狩猟についての記録をのこしている。1982年06月15日～1882年07年14日に阿里河の東北、加格達奇、塔河、十八站、白銀納、呼瑪、黒河、新生、愛輝、遜克、新顎、新興、嘉蔭、1982年11月16日～12月05日に阿里河の南、加格達奇、朝陽、古里、大楊樹、烏蘇門、1984年03月17日～04月30日、阿里河の西北方、敖魯古雅の顎温克族郷、1984年07月17日～09月14日、飼養馴鹿顎温克族の生活風俗、1985年03月08日～03月24日に漠河境内の狩猟、1985年07月08日～08月04日に敖魯古雅、交勞格道の狩猟を記録している。願徳清の「飼養馴鹿顎温克狩猟民風俗撮影」展が海拉爾、北京民族文化宮などで開催された。

大塚和義〔1988〕は1985年から1986年、大興安嶺一帯の満帰、敖魯古雅、阿里河、南屯、大楊樹、古里、烏魯布鉄などの地域でオロチョン・エヴェンキ族の民族学的調査をおこなった。

2003年夏、中国内のオロチョン族による狩猟生業は終焉したとの報道があった。

**大興安嶺南辺** 2009年09月15日～09月26日 大興安嶺から阿爾山、モンゴルとの国境、ノモンハン戦場、大興安嶺南麓の内蒙古の遼上京、遼墓、黒龍江省阿城の金の上京をめぐる。

2009/09/15 関空から長春に飛ぶ。春誼賓館（旧ヤマトホテル）に泊まる。1981年らしいの宿泊となる。

09/16 長春駅から列車で白城站出来に出発。白城博物館で鮮卑、遼の遺物をみる。

09/17 白城站発の列車で阿爾山站に向かう。20:00ごろ到着。零下にちかい。

09/18 朝8:00ごろタクシーでノモンハン戦場跡に行く。大興安嶺を越えて、草原、砂漠地帯の戦場跡。戦争博物館がつくられている。砂漠地帯の戦場の一端をかいまにる。阿爾山市にもどって、バスで烏蘭浩特市（王爺廟）にむかう。

09/19 烏蘭浩特市からバスで科爾沁右翼中旗をへて、通遼にたつする。18時の列車で林東（巴林左旗）に行く。20時ごろ到着。

09/20 遼上京、南塔をまわる。

09/21 巴林左旗からバスで阿魯科爾沁旗に。博物館。午後、遼の耶律羽之墓・宝山墓に往復。耶律羽之墓の北西に鳥居の調査した白城土城が位置する。

09/22 阿魯科爾沁旗からバスで通遼をへて庫倫旗まで行く。

09/23 庫倫旗から車で遼韓州故城を見学して金宝屯鎮。バスで双遼（鄭家屯）まで行く。列車で四平市まで行き、哈爾濱行きの列車に乗る。哈爾濱に深夜1:30に着く。

09/24 列車で阿城県の金上京に行く。哈爾濱をへて、長春にもどる。

09/25 長春市内。

09/26 長春空港から関空へ。



サハリン (樺太) 調査 2008年09月18日～09月26日

09/18 (木) 徳島 (14:50) から羽田空港 (14:25) を経由して、函館空港 (19:10) に。

09/19 (金) 函館空港発12:45発の遅れるので、その間を利用して函館市内の北方民族資料館と函館市立博物館に行く。16:00空港に行き、出国手続き。18:20に離陸。予定より8時間の遅れ。その間どうもソウルまで往復したとのこと。乗客は13名。ほとんどビジネス客。19:25でユジノサハリンスクに着陸。約1時間、近い。現地時間は+2時間の21:25。約20分でホテルにつく。関根達人 (弘前大学) さんと同行。通訳は在ロシアの韓国朝鮮人の徐載万さん。

09/20 (土) ユジノサハリンスク駅前のバス乗り場からコルサコフ (大泊) に行く。20～30人乗りのバス。湿原地帯を南下し、約1時間でコルサコフ市街地にはいる。建市60周年記念祭がおこなわれ、市内の交通や博物館は無料。コルサコフ博物館に行く。一室が博物館、入り口に樺太アイヌと「鈴谷南貝塚 (大泊郡千歳村大字貝塚)」の土器、石器が展示されている。近くの日本の統治時代の神社の跡地をたずねる。近辺に日本人墓地もある。タクシーで貝塚に行く。南貝塚のチャシ跡を見学。壕と堅穴の痕跡がのこる [新潟武彦・宇田川洋1990・1992]。近くの学校 (小学から高校) に隣接して博物館があるが、管理人不在で入館できなかった。アニワ (巫庭) 湾の景観がわかる。ユジノサハリンスクにもどる。レーニン通り、広場でスターリン像を見る。

09/21 (日) サハリン州立郷土博物館の見学。サハリン大学周辺の書店をまわる。18:25発の列車でノグリキに向かう。寝台車 (4人部屋)。北上して、ドリンスクを過ぎると、オホーツク海岸を走る。20時ごろまで薄明かり。

09/22 (月) 朝8:25予定どおりノグリキに到着する。駅近くのホテルに線路沿いに行く。ホテルで入境者登録。10:30ごろ博物館に行く。周辺の考古・民族資料が展示。ニヴフのつくった最後の舟も展示。13時ごろ小舟 (発動機船) でヌイヴォに行く。ツイミ川が流れこむヌイヴォ潟 (湾) を横切る。ニヴフの漁村。潟の砂州上に離れて3軒も漁村。夏場の漁屋。二家族共同でサケなどの漁撈をおこなっている。一家族は三世代からなる。第一世代の女性と第二世代の夫婦、第三世代の兄弟からなる。隣接する家族 (親族) も三代からなる。家屋はカマドを備えた台所と寝室 (一室) と作業場、物干し場、トイレからなる。離れたところに共同の井戸がある。内湾でのサケ猟のため網を仕掛ける舟に同乗して、対岸まで送ってもらう。満潮をまって猟にでたが、湾内は浅瀬で、船に藻がからみつく。湾の本土側に網をおく。途中水鳥を鉄砲で射止めていた。ご馳走になったスープにはいていたもの。純粹のニヴフの家族はすくなくなっているという。ロシア人と婚姻する。沖合に天然ガスの採掘ボーリングがみえる。

09/23 (火) 朝8時ごろ、ジープをチャーターして、ツイミ川を遡ってティモフスクに向かう。途中チル・ウンヴドへ至るツイミ川の橋が崩壊、遮断されていた。このチル・ウンヴドはニヴフなどの諸族を集めた村落であるという。204人のニヴフとロシア人をふくめ、360人が住む。ノグリキに600人、バルに180人、オハに80人、ネクラフサカに220人、マスカリボに44人、リブノェスクに15～20人、ポロナイスクに480人が住むという。スラヴォ附近のツイミ川をみながら、13時ごろティモフスクにつく。博物館の見学。ティモフスクはツイミ川上流域にあたり、その南はボロナイ川の上流域にあたる。鳥居龍蔵はこの地からツイミ川を下ったのだった。

09/24 (水) ティモフスク07:24発の列車でポロナISKに。12:50に到着。博物館を見学。

09/25 (木) 午前中にプロムイスロヴォエ遺跡の見学。港から渡して中州に行く。河口では干満を利用してのサケ漁をしている。8:10ロシア製ジープに乗り、浜辺や砂州、海岸段丘上を走る。砂浜には沙鉄が縞状に堆積している。途中、ニヴフ人とロシア人の村をすぎる。遺跡はサハリン博物館と日ソ極東・北海道博物館交流協会が共同調査がなされた。その後もポロナISK博物館は継続調査を実施している。ほぼ3時間の踏査をおえ、ポロナISK12:50発のユジノサハリンスク行の列車に乗る。21:00に到着。

09/26 (金) 10:00にホテルを出て、空港に行く。飛行機は予定どおり、12:30に離陸する。アニワ湾上空、宗谷海峡をまたたくに越え、函館に着陸する。2008年3月、雪の礼文島の岬に立って、サハリンをのぞんで、はやくも実現した旅であった。函館から根室に向かった。翌日の〈研究フォーラム『夷酋列像』と道東アイヌ〉に参加するためだ。

09/27 (土) 研究フォーラム

09/28 (日) ノサップ岬、釧路博物館

09/29 (月) 白老アイヌ民族博物館

サハリンのノグリキの海岸からコルサコフ、北海道の根室へとオホーツク海域をたどり、千島列島をのぞんだ。

1808年の間宮林蔵、1871年の岡本韋庵(1839~1904)につづき、鳥居龍蔵は1899年に千島列島、1921年に樺太を調査した。わたしも間宮林蔵の200年後の2008年にサハリンの地を歩いた。シベリヤ出兵から世界第2次大戦、日ロの領土問題、天然ガスの開発と、サハリンは変貌をたげつつある。

**鳥居龍蔵の満州・シベリヤ沿海州・黒龍江(アムール川)・蒙古の探査** 1928年(昭和3)年の調査は、1919年(大正8)6月13日~12月20日、1921年(大正10)6月29日~7月30日につづぐものであった。『西伯利ヤから満蒙へ』は龍蔵・君子・幸子の家族による調査であった。蒙古・満州調査のいわば総括的な旅であるような気がする。「故龍蔵に捧ぐ」書であった。

この行、外務省の対支文化事業の仕事で、その目的は私達の二十二年前に探査した東蒙古の巴林にある遼の上京や行宮を、シナの學者とよもに発掘調査せんとするものであった。けれども折悪しくも動亂で、北京行きの汽車は殆ど不通状態、加之支那の文化事業の人々は辭職するといふ有様で、残念ながらこの発掘は中止せなければならぬ事情となつて仕舞つた〔鳥居1928:2〕。

遼の慶陵の地すら踏めなかつた。東北アジアの調査の成果を六つの主題でまとめている。

極東シベリヤの考古学・人類学の研究の現状を語り、研究者をあげる。ウラジオストックのアルセネフ氏は土俗学や文化史の研究者で、シオタアハリン山中のウデヘ人(ツングース)とその地理について研究。ウラジオストック博物館のラヂン氏は先史時代。ニコリスクの植物学研究所のフォードル所長は歴史考古学者で、渤海や金時代のことに詳しい。ハバロフスクにリプスキー氏はゴリド人の専門家。美術博物館にボクロフスキー館長はロシア農民、シベリヤ土人の原始藝術の研究。ブラゴエスチェンスク博物館長のボウボフ氏は林学、考古学も研究。ハバロフスクで会つたゴリゴ人の研究家の土俗学者ロバーチンはアメリカに行った。ブラゴエ

スチュエンスクのクロチキン氏はヤクート族の研究家であるが、永眠したという。革命以後、よくなっているようである。ソビエト政府による探検調査は極東シベリヤまでおよんでいない。

ハバロフスク博物館のグラデキー河畔採集の土器とアイヌ土器の類似性に注目する。「日本海の北陸沿岸地方からその製作使用者が同地方に往來した結果と見て居る」。また弥生土器や朝鮮の物に類似するものがあるという。

ウラジオストック博物館の細形銅劍と多紐粗文鏡について注目した。銅鏡は「我が國の大和・河内・長門等から出た古鏡」と類似するもので、朝鮮慶尚道にもある。古鏡は「漢族のそれを真似てX民族が製作したもので、而かもこれがシベリヤの沿海州から朝鮮・日本等に存在するのは、これ等の各地方に互いに聯絡のあることが推知せらるゝのである」。またウスリ河畔や黒龍江河畔の「同類似の銅劍・石器・骨器」に注目している。

ニコリスク土城など、ブッセ、フョードル、アルセネフによって調査された渤海から金代の瓦について紹介する。「渤海の瓦から見ると、渤海人は當時において西域の影響を受けた隋・唐の文化を輸入せられて居たことが考へられるのである。加之、かれ等は契丹の起つて中間地帯（東蒙古）を中斷せられるまでは、かの東突厥と往來してゐた」。今日沿海州地域の土城・石城の時期や構造について問題になっているが、鳥居ははやくから、渤海と金の両時代を念頭において考察している。

ウラジオストック博物館の陳列品のなかに、「ルニック體」のウイグル文字以前の古突厥文字を彫刻した石をみつけた。第1回のシベリヤ探査のときから着目していた。ロシアのラドリフ氏の研究にもとづき、渤海初期か靺鞨とみる。渤海と突厥との往來、契丹（遼）、靺鞨との關係についてかんがえる。北海道の小樽の手宮岩面彫刻文字と比較する。

奴児干都司の塼塔の二つの碑石の拓本をとる。間宮林蔵も文化5年（1808）に丘上の塔を見た。1854年にロシアの探検隊（マークとシュレンク）一行もスケッチした。そのご塔はうち壊された。「大正八年と十年と両度にわたつて調査して、その跡を発掘して塼や瓦や塼佛などを採集した」。塔や塼紋は永楽期のみならず、明代以前、元代で、さらに女真の金代末期とみる。

『黒龍江と北樺太』1943では、まず「黒龍江の思い出」をつづる。明治23年、東京に來たころに参謀本部出版の『西伯利亞地誌』や『満州地誌』『大清一統志』、間宮林蔵の『東靺鞨紀行』『北蝦夷圖説』を読んだ。鈴木券太郎が坪井久馬三「黒龍江」（『東洋學藝雜誌』）はコーン『黒龍江志』の剽竊で、学者として実に許すべからず事であると批判したと記している。

アムール石器時代のネフライト玉質石器はバイカル湖方面からイツクーツク附近のアンガラ河畔に多く、アムール上流にも見えるという。「この石材の北海道石器に就いて、小藤文次郎博士は東大『理科大学紀要』で、この北海道石器の原料は、あるいはシベリヤ方面から輸せられたものであろうか、と記されたのは卓見である」〔鳥居1943；299〕。小藤文次郎博士の孫にあたる小藤（徳島大学総合科学部）さんに、クラスキノ遺跡の城牆に用いられた石の表面の朱色部分を分析してもらったことがある。「朱」ではなかった。

ヤンコフスキー半島の貝塚について早くから注目する。ポシエト灣をとおして、朝鮮の豆満江畔から朝鮮半島のものに類似する。バイカル湖附近オーノン河畔から、アムール河上流のものは、蒙古や満州のものと比較すべきものが多いから 弥生式土器の問題、1970年代に弥生土

器、沿海州起源説がだされたが、弥生土器と類似した土器の存在を知り、比較したのであった。

「金属期時代の沿海州」について考察した。青銅器、鉄器があり、ツングース族たる挹婁・靺鞨から女真、さては金に至るまでのもの〔鳥居1943；300〕がある。日本列島における弥生時代研究の水準の先端をゆく。

スキアン式 Animal Symbols は西部シベリヤのエニセイ方面のものと比較すべきで、ツングース族の文化と接触しているという。

アムール流域は肅慎の本拠地で、のちには生女真の活動舞台であった。これらの地方が古来どんな状態になっていたかは未だ何人の発表もない疑問の場所である〔鳥居1943；300〕。

アムール河畔のチールに存在する永寧寺観音堂の址で、奴児干都司の址である。都合三回行った。此処に立っていた塔はすでに打ち崩され、二個の明碑はウラジオストックの博物館に持って来ている。

ウスリー河一帯に渤海・遼・金・元時代の土城が分布することを指摘する。今それらの調査研究がロシア、中国でおこなわれている。

鳥居が東部シベリア調査に出発した前年（1918）に「シベリア出兵」があった。そのときの踏査は、東京からウラジオストックを経由してイルクーツク、ホロンバイル、大興安嶺地域、チチハル、ハルビン、ハバロフスク、黒龍江下流、さらにウスリー流域に至るものであった。

鳥居は永年、東部シベリア、黒龍江流域の調査にたいして熱望していた。『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』には「これらの地域が未だ斯学（しがく）上、闇黒界の裡（うち）に閉ざされている。日本人種の起源問題、アイヌ文化など、東アジアの人類学、人種学、考古学、古代史の研究のうえで重要である」とある。アジアの民族に想いあこがれた少年のころの夢の実現でもあった。

そのシベリヤ調査報告は、ウラジオストック上陸から敦賀港に帰る日まで、半年にわたる日々を欠かさずに記録したもので、「本書は大正8年における東部西シベリア駐屯軍の偽らざる一の日記、一の歴史的記録であって、また後日の参考考資料ともなるものと信ずる」〔鳥居1924；4〕ものであった。いわば従軍的な記録、戦時中のシベリヤ民族生活誌である。

わたしは『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』の原本を手にして調査した。その序文は「大正13年6月20日 大学辞職願の許可せられたる日 新築の書齋に於て」と締めくくられる。ここには、23歳で人類学教室の標本整理係となって以来、30年におよんで在籍した東京帝国大学を去るに当たっての思いがつつられている。

これでいよいよ宿願たる1人前の浪人的学者となった。…これより自由な個人的学究として、専心の努力を傾倒せんとする日に当たり、偶然にも本書の出版を見るに至った…前途は実に洋々である」〔鳥居1924；5～6〕。

1905（明治38）年から1907年、30代だった鳥居は東大講師のまま蒙古に同行した。それは生涯のライフワークとなる「遼」（10世紀にモンゴル系の契丹（きつたん）族が建てた国家）の文化研究のきっかけとなる旅であった。

それから12年後の大正8年、黒龍江流域から大興安嶺、モンゴル、カラフトへと、鳥居龍蔵の未知への探検がなすとげられた。

**鳥居の樺太（サハリン）踏査** 大正10年11月11日の帝国学士院総会において、「北樺太及び黒龍江下流の民族に就いて」（『官報』2881・2882・2883・2884）〔鳥居龍蔵1921〕という題で、ギリヤーク・オロッコ・ツングースなどの諸民族について講演した。

ギリヤークは黒龍江畔附近から江を下りてその沿岸、江より延びて間宮海峡、樺太島に分布する。その南はボロナイ河口。シュレンク・マークによると1850年前後の分布区域はマリンスクプール附近より存在した。1800年代の間宮林蔵の『東韃紀行』のなかに、プールから下流はスメレングル夷（ギリヤーク）と記す。黒龍江ギリヤーク、樺太ギリヤークの二派がある。

1912年出版パトカノフ氏『シベリヤ土人人口統計報告』第3冊に従へば、黒龍江の彼らは、人口2679人（男1437、女1242）、樺太の彼らは、人口1971人（男1118人、女853）なり。この統計は、1898年露国が全シベリヤ土人の人口を調査せし際の材料より採用せるものとす。次に旧露国最後の出版ともいふべき1914年発行の『アジアロシア』第1冊によれば、彼らは1897年に人口4649人、更に1911年には4182人と記せり〔鳥居1924；235〕。

樺太ギリヤークは北部にツイミ川、東海岸、西海岸の三群、南部にはボロナイ河畔に一群がある。鳥居は「ツイミピン」、「ケット」、「シャギピン」と称する。露国の調査によると、「ツイミ川」群は9村、「東海岸」群は23村、「西海岸」群は48村であった。すでに西海岸群がもっとも「教化」されていた。

北樺太のギリヤークはもと黒龍江下流より或る時代に渡り來りたるは明らかにして、これを証するに許多の事実あり。…彼らをギリヤークと呼ぶは決して自身の呼称に非ずして…彼らは自ら「ニグブン」と称す。…オロッコは彼らを「クギ」と呼び、またアイヌは彼らを「スメレングル」と呼ぶ。シナ人は彼らを「費雅喀（フェイヤク）」という。…奴児干都司のありし観音堂の傍らに建てられありし明の永樂十一年の碑文には「吉列迷（キリミ）」と書し、また樺太の海洋中の島嶼なる事を記せり〔鳥居1924：235～236〕。

ゼーマン氏によれば、彼らの平均身長は男子一米六二、女子は一米五〇なりとせり。

ギリヤークの生活本意は漁業を専らとす。この関係より彼らは漁業に最も便利なる河畔若しくは海岸に住す。…交通往來はすべて独木舟を使用。…犬は彼らと最も離るべからざるものにして、常にこれを屋外に飼養し、冬期櫓を曳かしむ。これは黒龍江及び北樺太方面共に同一なりとす。然るに我が南樺太ボロナイ河畔の彼らはこれに反し馴鹿を家畜とす。されどこれはオロッコより得たる風にして、今より四、五十年以前に遡ればかくの如き事なくギリヤークの家督は全く犬のみなりき。

樺太探検史をたどる。1944年のポルヤコフ、1706年のウイツェン、1787年のラペルーズ、1805年のクルゼンステルン、1805年のプロートン、1854・1885年のシュレンク、1855年のマークらの探検について文献を丹念にみている。

**鳥居の間宮林蔵論** 間宮林蔵の探検、ギリヤークにかんする記述についてたかく評価した。

彼は文化5年（1808）に幕府の命を受け、単身北樺太の西海岸ギリヤークの諸村を探検し、同年冬は此処に越年し、翌年ギリヤークの舟に乗じ、彼らと共に黒龍江を遡り、今日のソフィースクの上流デレン（北緯51度4分1、東経138度3分1）にまで至り、此処より更に同江を下って江口に出て、再び樺太に帰り來り。この探検に於いて彼は、ギリヤーク

はもとよりその他ツングースの各族に接せり。これは『東韃紀行』によりて明らかなりとす。而して樺太の人類学上の著述としては『北蝦夷圖説』を残し、その中にギリヤークの事を詳密に図記にして、シュレンク、マーク両氏に先立つ事、実に四十余年に属す〔鳥居1924 : 237〕。

鳥居は間宮林蔵の探検の地を訪れている。

七月十七日、間宮はデレンを辞して下江の途に就いた。…ギリヤークの居るボールという所から下手の方の夷人は、樺太のスメレングルに同じという事を書いて居る。このボールは今日のプルである。それからチールの丘陵の下に来て居る。これはアムグン河が黒龍江に合する所で、丘の上に明時代の奴児干都司の跡があり、また永楽と宣徳の二つの石碑があった処であります。…間宮は此処を通った時に、石碑があるということを書いて居ります。…一体黒龍江はハバロフスクから掛けて河口までの間に、大きな支流が二つあって、一つはゴリン河、一つはアムグン河である。殊にアムグン河は非常に意味ある河であって、明の時に奴児干都司を同河と黒龍江との合流点に置いたのも、けっして偶然でないと思う。…黒龍江下流のドキュメントとしては、間宮の書いたものが最も古く、それからシュレンクとマークである。…間宮の探検後四十年間は、黒龍江下流の状態がほとんど間宮の書いたそのままのものであったらうと思う。…現今黒龍江土人の村落の状態、その他を比較するには、どうしても『東韃紀行』が参考になるのであります。…〔鳥居1924 : 255~257〕

『北蝦夷圖説』は樺太に居る土人、すなわちギリヤーク、オロッコ、アイヌの事を図記したもので、この図記は人類学的調査としてよほど古い企てであります。…徳川時代の先輩に対して、非常に尊敬を払わねばならぬという念が起こるのであります〔鳥居1924 : 255~258〕

松浦武四郎の安政3年（1856）の探検、樺太東海岸ボロナイ河口敷香のギリヤーク（『北蝦夷餘志』）につづいて、岡本韋庵（岡本監輔）をあげる。岡本韋庵は鳥居とおなじ阿波の人であった。

岡本監輔氏は慶応年間ボロナイ河口附近よりアイヌの舟に乗り、東海岸より北端に出て、更に西海岸に沿ひて同島をほとんど一周せり。この行に於いてギリヤークの各村を訪へり。岡本氏の以上の探検は、実に間宮氏と対比すべきものにして、その東海岸より北岬に出で、更に西海岸に回りしが如きは、氏によって始めてこれを実行せられたるものなり。その著として『北蝦夷新志』あり〔鳥居1924 : 237〕。

樺太探検の歴史を念入りにたどっている。同郷の岡本韋庵（1837~1904）を評価する。岡本韋庵は明治37年（1904）に66歳で卒している。鳥居龍蔵の生まれた明治3年（1870）の翌年に樺太に渡り、1871年に『窮北日誌』を刊行した。鳥居は早くから、韋庵の探検記を手にしてきたにちがいない。

樺太の種族について概観する。オロッコ（オロチョン）は樺太島に住み、居住地は樺太ボロナイ河畔及びタライカ湖畔と北樺太東海岸にわかれる。前者は人口607人、戸数81戸。村落はキウリ（戸数14）、ノコル（2~3戸）、ムイカ（19戸）、ジユタキ（2~3戸）、ジョドイ（17戸）、ワラバイ（2~3戸）、タランコタン（2~3戸）等の10村からなる。タライカ湖畔にアイヌ族のタライカ村落がある。ボロナイ河畔ではギリヤーク族と相い接して居住する。

川に沿ふてまづオロッコ、その次はギリヤークと点々散在せり。彼らは漁獵を以て生活し、交通往來すべて独木舟を使用する。家畜は馴鹿を飼養し、宗教としてシャマン教行はる。家屋は丸太を寄せ集め作りたる簡単な「テント」式なり。食物はギリヤークに於ける如く魚類をも用ゆれども、亦狩獵にて獲たる獸類をも食す。男子は散髪となるもの多けれども、女子はなお辮髪にして、耳に銀製の鐙を掛け、衣服その他古風を存す。

北樺太東海岸方面の彼らはいはゆる「ツンドウラ」地帯に住し、人口は129人にして、村落は都合六村とりなり、すなはちワージ、オフーダン、コジーン、ダウツー、ダーゲ、コロマイこれなり。

1912年のパトカノフ氏『シベリヤ土人人口統計報告』第3冊に従へば、オロッコはコルサコフ方面にて、男159人、女145人、チモウスカ方面にて、男236人、女209人と記し、なお同氏の名著1905年出版『ツングースの地理学的分布と其の統計』によれば、彼らは男395人、女354人とし、その合計749人とせり。次にマックスフンケ氏『樺太島』によれば、彼らの人口800人とせり。以上を現今の人口を比較するに、ポロナイ方面607人、東海岸方面129人、合計736人なれば、まず樺太全島にて彼らの人口は750人以内と見て可なるべし。オロッコはもと対岸の大陸に住せしものにして、これが或る古き時代に馴鹿を追ひつつ結氷を踏んで樺太の島に渡來せしものと見るべきなり〔鳥居1924：240〕。

**満蒙調査と張作霖事件** 鳥居一行が各地の領事館、満鐵公所でえた情報は、同じ年の1928年5月国民革命軍の北伐が北京にせまる政治情勢にほかならなかつた。6月4日午前5時23分、張作霖は関東軍参謀河本大作大佐の策謀で爆殺された。鳥居一行がその事件を知ったのは敦化であった。爆破事件の1週間後の6月11日以降であった。その3週間後に爆破現場を通過した。爆破の日、鳥居たちは吉林にいたのであった。1週間で事件が伝わっていたことになる。鳥居らが接したのは領事館であり、満鐵公所であった。事件の情報をえる条件にあった。日本国内では翌年の1929年に議会で問題となったという。

鳥居一行の旅は、1918年（大正7）のシベリヤ出兵から10年、1922（大正11）年のシベリヤ撤兵のから6年、北伐、1927～1928年の山東出兵、張作霖爆破事件の最中、満州事変（1931年）の3年前のことであった。

本研究は、平成19年度三菱財団人文科学研究助成による。また人間文化研究機構連携研究『ユーラシアと日－交流と表象』（国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館）の共同研究においている。

#### 引用文献（年代順）

- 鳥居龍蔵1922『北満州及び東部西伯利亞調査報告』（『朝鮮総督府古蹟調査特別報告』2、『鳥居龍蔵全集』8、261～280、1976）
- 鳥居龍蔵1928『満蒙の探査』（『鳥居龍蔵全集』9；285～393）
- 鳥居龍蔵・君子・幸子・緑子1929『西比利亞から満蒙へ』（『鳥居龍蔵全集』10；167～217）
- 鳥居龍蔵・きみ子1932『満蒙を再び探る』（『鳥居龍蔵全集』9；395～542）

- 凌純聲1934『松花江下游の赫哲族』（『中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之十四』）
- 泉靖一1937「大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告」（『民族学研究』3巻1号、『泉靖一著作集1フィールド・ワークの記録（1）』読売新聞社）
- 泉靖一・赤松智城1938「赫哲（ゴルジ）族踏査報告」（『民族学研究』4巻3号、『泉靖一著作集1フィールド・ワークの記録（1）』読売新聞社）
- 鳥居龍蔵1943『黒龍江と北樺太』生活文化研究会
- 鳥居龍蔵1943『黒龍江と北樺太』（『鳥居龍蔵全集』8；281～330）
- 今西錦司1952『大興安嶺探検』毎日新聞社（復刻版、講談社、1975年）
- 鳥居龍蔵1953『ある老学徒の手記』朝日新聞社
- 鳥居龍蔵1953『ある老学徒の手記』（『鳥居龍蔵全集』12；283～293、1976）
- 大塚和義1988『草原と樹海の民—中国・モンゴル草原と大興安嶺の少数民族を訪ねて』新宿書房
- E・A・クレイノヴィチ1973『サハリン・アムール民族誌—ニヴフ族の生活と世界観—」（榎本哲訳 1993、法政大学出版局）
- 鳥居龍蔵1980『中国の少数民族地帯をゆく』朝日選書、朝日新聞社
- 大林太良1980「解説」（『中国の少数民族地帯をゆく』朝日選書、朝日新聞社）
- 江上波夫1976「解題」（『鳥居龍蔵全集』8、朝日新聞社）
- 田畑久夫・金丸良子1989『中国少数民族誌ミャオ族・トン族』白帝社
- 新岡武彦・宇田川洋1990『サハリン南部の遺跡』北海道出版企画センター
- 伊東忠太1990『伊東忠太見聞野帖清国Ⅱ』柏書房
- 曾土才1991「西南中国調査」（『乾板に刻まれた世界—鳥居龍蔵の見た世界—』東京大学総合研究資料館）
- 中川裕1991「北千島・樺太・東部シベリヤ調査」（『乾板に刻まれた世界—鳥居龍蔵の見た世界—』東京大学総合研究資料館）
- 新岡武彦・宇田川洋1992『サハリン南部の考古資料』北海道出版企画センター
- 塚田誠之1993「鳥居龍蔵の西南中国調査」（『民族学の先駆者鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館）
- 中藪英助1995『鳥居龍蔵—アジアを走破した人類学者』岩波書店
- 田畑久夫1997『民族学者鳥居龍蔵—アジア調査の軌跡』古今書院
- 山内昌之1999「アジアとヨーロッパ—日本からの視角—」（『岩波講座世界歴史』23、岩波書店）
- 黔东南苗族侗族自治州地方志編纂委員会編2000『黔东南苗族侗族自治州志 民族志』貴州人民出版社
- 塚田誠之2001「屯軍の末裔—たち—貴州における移住と民族の生成—」（『移動する民族—中国南部の移住とエスニシティ』平凡社）
- 願徳清2001『獵民生活日記—1982～1985探訪興安嶺』山東画報出版社
- 大貫静夫・佐藤宏之2005『ロシア極東の民族考古学—温帯森林漁獵民の居住と生業—』六一書房
- 杉浦重信2005「鳥居龍蔵の南樺太調査について」（『北方博物館交流』17）
- 東潮2008「鳥居龍蔵の中国西南部調査—足跡をたどる上・下」（『徳島新聞』2008年5月21日、5月22日）
- 張敏杰2008『赫哲族漁獵文化遺存』黒龍江人民出版社
- 東潮2009「『三国志』書東夷伝の文化環境」（『国立歴史民俗博物館研究報告』151）
- 呉正光2009『沃野耕耘—貴州民族文化遺産研究』学苑出版社





武漢 長江

200802



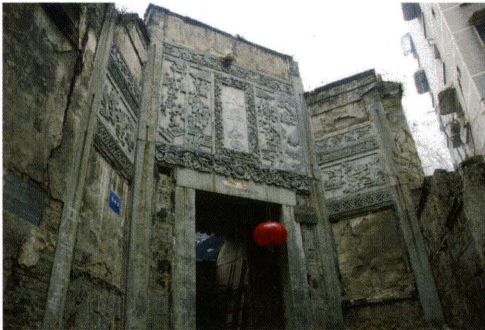
洪江市 沅江 200802



洪江市 沅江



洪江市 沅江



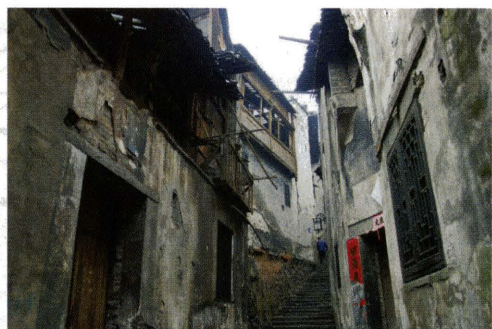
洪江市



洪江市



洪江市



洪江市

图 17 武漢（湖北省）から洪江市（湖南省）





郎徳上寨 楼閣橋



郎徳上寨 南から



郎徳上寨 北から



郎徳上寨 西から



郎徳上寨 水くみ場



郎徳上寨 広場



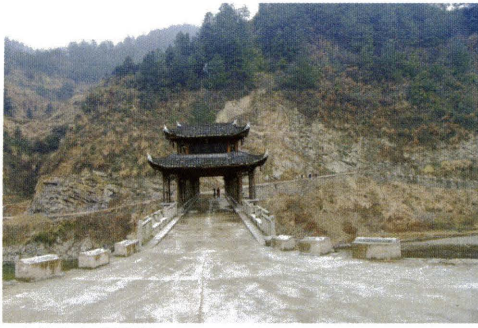
郎徳上寨 貯水池



郎徳上寨 石敷き道と商家

図 18 郎徳上寨（貴州省黔东南苗族侗族自治州凱里）





南花苗寨 楼閣橋



南花苗寨 楼閣橋



南花苗寨 上流側



南花苗寨 祭壇 20080229



南花苗寨 春節 (初三)



南花苗寨 春節 (初三) 太鼓 20040124



南花苗寨 春節 (初三)



南花苗寨 春節 (初三) 銅鼓 20040124

图 19 南花苗寨 (貴州省黔东南苗族侗族自治州凱里)

(攝影東藍)





鴨塘翁牙寨 初一三敲堂鼓·蘆笙會 20080219



鴨塘翁牙寨



鴨塘翁牙寨



鴨塘翁牙寨



鴨塘翁牙寨



鴨塘翁牙寨



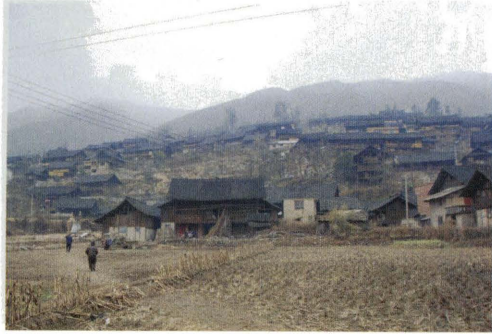
鴨塘翁牙寨



鴨塘翁牙寨

圖 20 鴨塘翁牙寨 (貴州省黔东南苗族侗族自治州凱里)





青曼寨

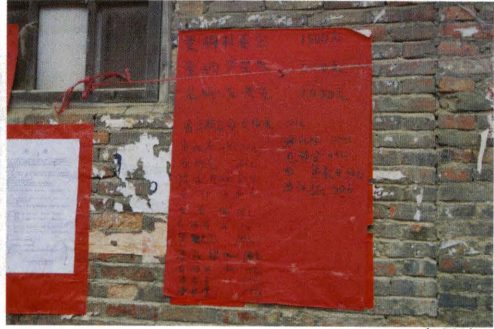
20080219



青曼寨



青曼寨



青曼寨



青曼寨 初三 芦笙会



青曼寨



青曼寨



青曼寨

图 21 青曼寨 (贵州省黔东南苗族侗族自治州凯里)

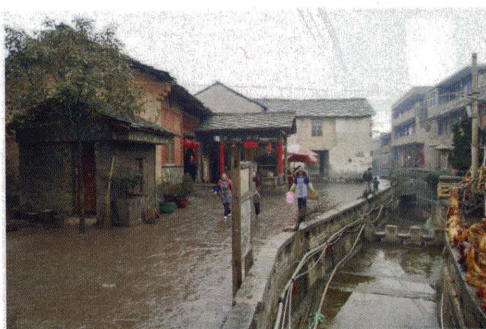




天龍鎮屯堡



天龍鎮屯堡



天龍鎮屯堡茶館



天龍鎮屯堡水路



天龍鎮屯堡



天龍鎮 屯堡人



天龍鎮屯堡教練所



天龍鎮屯堡 學堂旧跡

图 22 天龍鎮屯堡 (贵州省黔西南布依族苗族自治州)





石頭寨附近



石頭寨附近



石頭寨 寨內廣場



石頭寨 寨內廣場



石頭寨 寨內廣場



石頭寨 騰繭染



石頭寨 寨內祭祀祠



石頭寨 寨內的墓

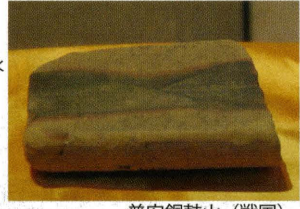
图 23 石頭寨 ((贵州省黔西南布依族苗族自治州))





赫章可樂

興義  
咸寧中水  
(前漢)  
銅鼓山  
(前漢)



普安銅鼓山 (戰國)



咸寧中水 (秦漢)



赫章可樂

普安銅鼓山 (漢)

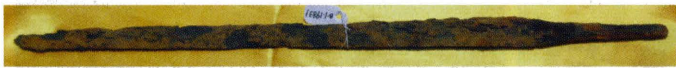
赫章可樂 (前漢)



赫章可樂 (前漢)



赫章可樂 (前漢)



赫章可樂 (前漢)



赫章可樂 (前漢)



赫章可樂 (前漢)



赫章可樂 (前漢)



赫章可樂 (前漢)

图 24 「夜郎国」出土遺物 (貴州省博物館)





黒龍江省同江 黒龍江 (アムール川)



黒龍江省同江 黒龍江 (アムール川)



黒龍江省中興土城 (金)



黒龍江省中興土城 (金)



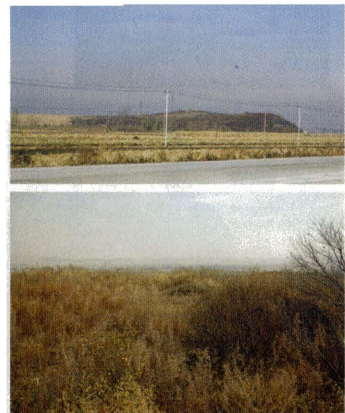
黒龍江省鳳林土城 (金)



黒龍江省鳳林土城 (金)



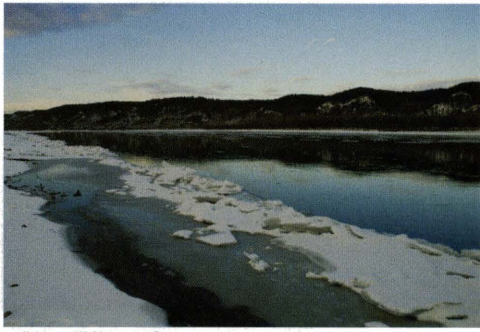
黒龍江省滾兔嶺土城 (挹婁)



滾兔嶺土城 (挹婁)

図 25 黒龍江 (アムール川) 流域





漠河 黒龍江上流



漠河 黒龍江下流



嘎仙洞洞窟



嘎仙洞鮮卑碑文



嘎仙洞鮮卑碑文



頸倫春博物館



図 26 大興安嶺・黒龍江 (アムール川)





大興安嶺山中 加格達奇～伊圖里河 20071028



大興安嶺山中 加格達奇～伊圖里河 20071028



大興安嶺山中 加格達奇～伊圖里河 20030623



大興安嶺から海拉爾 20030623



満州里博物館



中口国境



中口国境 20030624

図 27 大興安嶺 阿里河 海拉爾・満州里





札賚諾爾附近

20030624



内蒙古・ノモンハン戦場 20090918



ノモンハン戦場 20090918



内蒙古・阿爾山市 20090918



内蒙古・巴林左旗南塔

20090920



遼上京 パイン・ゴール 東から 20090920



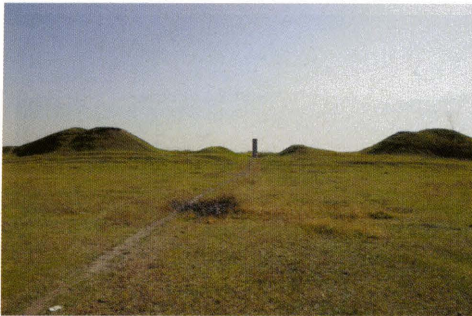
遼上京 漢城



遼上京 西城墻

図 28 大興安嶺-中国・ロシア・モンゴル国境から内蒙古





宮殿南門

20090924



宮殿



宮殿南門



宮殿南門



南城牆南門



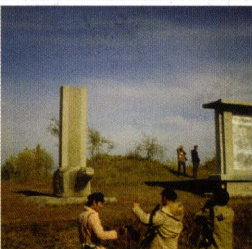
南城牆南門



西城牆



南城牆  
東城牆



西城牆

198110

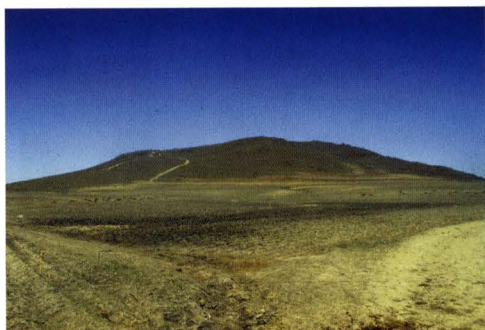


圖 29 金上京（黑龍江省阿城）

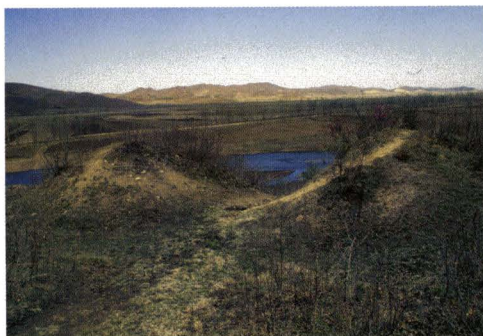


宮殿南門 198110





敦化城子山山城（夫餘・高句麗・渤海）199910



敦化城子山山城北門 199910



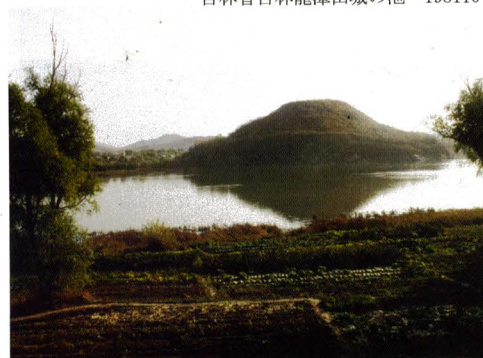
吉林省吉林龍潭山城（高句麗）198110



吉林省吉林龍潭山城の池 198110



龍潭山城から東団山産（夫餘）



東団山産（夫餘）



哈爾濱駅 2003



阿城駅 2009



1981



長春・旧ヤマトホテル 2009



長春旧満州国經濟部跡 2003



長春駅 2009



鄭家屯駅 2009



大連・旧ヤマトホテル 2006

図30 哈爾濱・敦化・吉林





黒龍江章大城子古城



龍江省石頭河子土城



中ロ国境



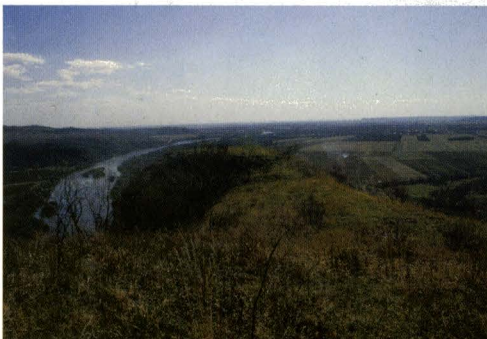
シェレニコボ山城 スイフン川



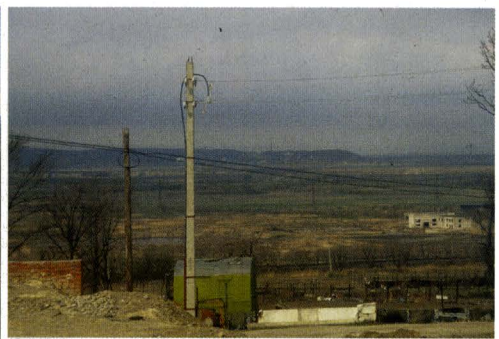
ロシア・クラスキノ城



クラスキノ 渤海日本道



シェレニコボ山城 サイフン川



シェレニコボ山城遠景

図 31 シベリヤ沿海州・中ロ国境





クラスノヤールスカヤ土城

199908



コピンスキー寺院



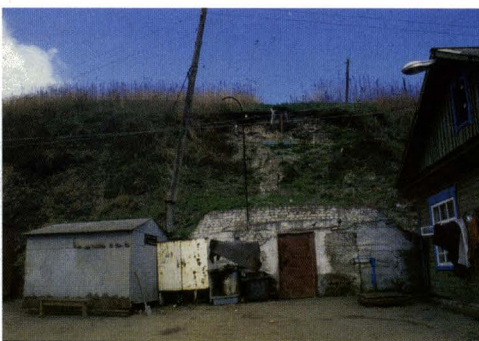
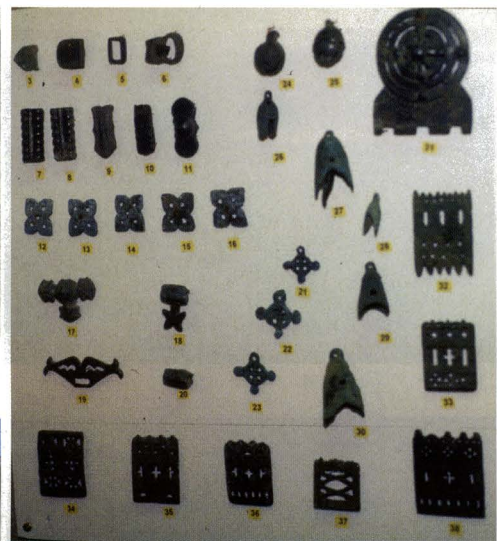
ユジノウスリスカヤ土城



ユジノウスリスカヤ土城版築



スタロリエチェンスカヤ遺跡



貝塚



極東科学アカデミー博物館

図 32 沿海州・スイフン河流域





ヌイボォ湾



ヌイボォ湾ツイミ川河口



ニヅフ族の漁屋



ニヅフ族三代



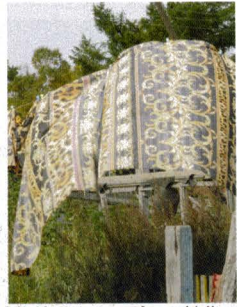
ニヅフ族 隣家



ニヅフの祖母 (78歳)

図 33 ヌイボォのニヅフ族





ノグリキ博物館

ノグリキ博物館近くのニヴズの村落

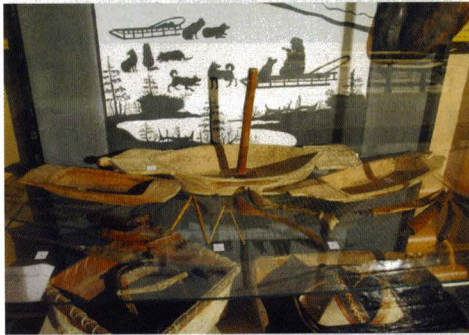


図34 ノグリキ博物館

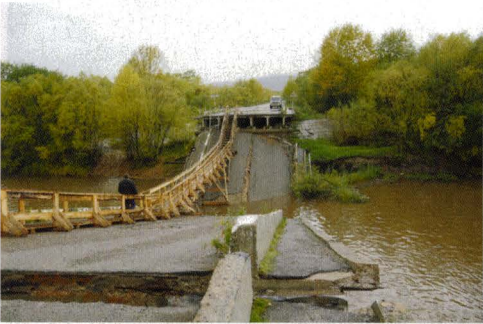




ツイミ川河口 スイボオの潟にいたる



ツイミ川河口



ツイミ川 橋の向こうにチルウヴド村



アダトイモヴォ附近 ロシア人村落



スラヴォ ニヅフの廃村



ティモフスク ツイミ川 ロシア人村落



ティモフスク ツイミ川 鳥居の船出の地点



ティモフスク ツイミ川 鳥居の船出の地点

図 35 ツイミ川流域





図 36 ティモフスク博物館





図 37 ポロナиск博物館

韓国展示室





図 38 サハリン州立郷土博物館





ボロナイスク港



ボロナイスク港



ボロナイスク港



プロムイスロヴォエ遺跡



プロムイスロヴォエ遺跡



プロムイスロヴォエ遺跡



プロムイスロヴォエ遺跡



ニヅフ漁村

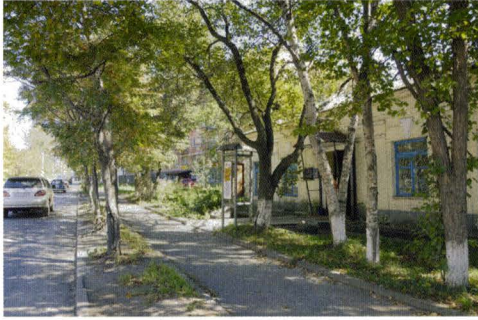


ニヅフ漁村



図 39 ボロナイスク、プロムイスロヴォエ遺跡、ニヅフ漁村





コルサコフ博物館



ススヤ南貝塚 チャン



ススヤ南貝塚 チャン



ススヤ南遺跡 チャン

図 40 コルサコフ博物館・ススヤ南貝塚